

サンスクリット語文法概略

千葉大学大学院 人文社会科学研究科

教育・学修支援研究会

石井正人（千葉大学教授）

千葉大学 人文社会科学教科書シリーズ No.2

サンスクリット語文法概略

千葉大学文学部 石井正人

2016

千葉大学大学院人文社会科学研究所 教育・学修支援研究会編
千葉大学人文社会科学教科書シリーズ No.2

目次

0	はじめに	5
0.1	本書の目的	5
0.2	本書を教材とされる方へ	6
0.3	参考文献	8
1	文字と発音	9
1.1	文字と発音 デーヴァナーガリー文字	9
1.1.1	子音	9
1.1.2	母音	11
1.1.3	数字	12
1.1.4	辞書におけるアルファベット順	12
1.1.5	合字 ligature	13
1.1.6	文の綴り方	14
1.1.7	アクセント	15
1.2	母音の階梯 Ablaut	16
1.3	絶対語末子音の制限と変化	17
1.4	連声法 Sandhi	19
1.4.1	外連声 external Sandhi	19
1.4.2	内連声 internal Sandhi	21
1.4.3	語形変化と音便規則 (euphonization)	23
1.4.4	注意すべき点	23
1.4.5	連声法まとめ 『ナラ王物語』冒頭の通常テキスト形(上)と、連声法適用前の単語の分ち書き(下)	24
1.5	補足	25
1.5.1	印欧語の中のインド・イラン語派	25
1.5.2	印欧語における母音推移	27
1.5.3	印欧語における子音推移	27
1.5.4	印欧語における母音交替	28
1.5.4.1	概略	28

1.5.4.2	種類	28
1.5.4.3	母音交替列	28
1.5.4.4	サンスクリット語の母音交替の特徴	29
2	名詞変化	30
2.1	名詞変化の概要	30
2.2	子音幹名詞の変化	32
2.2.1	単語幹名詞の語尾一覧	32
2.2.2	<単語幹名詞の変化>	33
2.2.3	<多語幹名詞の変化>	38
2.2.3.1	多語幹名詞の一覧	38
2.2.3.2	2語幹名詞	39
2.2.3.2.1	2語幹名詞 強語幹と弱語幹の標準的分布	39
2.2.3.2.2	at-語幹名詞（現在分詞・未来分詞）	40
2.2.3.2.3	in-語幹名詞	42
2.2.3.2.4	yas-語幹名詞（形容詞の比較級）	43
2.2.3.3	3語幹名詞	44
2.2.3.3.1	3語幹名詞 強語幹と中語幹と弱語幹の標準的分布	44
2.2.3.3.2	an-語幹名詞	45
2.2.3.3.3	vas-語幹名詞（完了能動分詞）	47
2.2.3.3.4	ac-語幹名詞（方向を表す）	49
2.3	母音幹名詞の変化	51
2.3.1	a-/ā-語幹	51
2.3.2	i-語幹/u-語幹	53
2.3.3	ī-語幹/ū-語幹（女性名詞）	55
2.3.4	ṭṛ-語幹	57
2.3.5	二重母音語幹	59
2.4	補足	60
2.5	形容詞の比較変化	61
2.6	代名詞	63
2.6.1	注意点	63
2.6.2	人称代名詞（1人称・2人称）	64
2.6.3	指示代名詞	65

2.6.3.1	tad-/etad-/enad- 「彼, 彼女, それ」	65
2.6.3.2	idam- 「これ」 / adas- 「あれ」	66
2.6.4	関係代名詞・疑問代名詞・不定代名詞	67
2.7	数詞	70
2.7.1	基数詞	70
2.7.1.1	基数詞の形態	70
2.7.1.2	基数詞の変化	71
2.7.2	序数詞	75
2.8	複合名詞	77
2.8.1	dvandva 並列複合語	77
2.8.2	tatpuruṣa 限定複合語	77
2.8.3	karmadhāraya 同格限定複合語	78
2.8.4	dvigu 数限定複合語	78
2.8.5	bahuvrīhi 所有複合語	78
2.8.6	avyayibhāva 副詞的複合語	79
3	動詞変化	80
3.1	総論	80
3.1.1	動詞定形の構造	80
3.1.2	活用カテゴリー	81
3.1.3	動詞変化について — 特に「中動態」について	81
3.1.4	結合母音 i	82
3.1.5	加音 (augment)	82
3.1.6	重音 (reduplication)	82
3.1.7	活用組織の一覧	84
3.2	現在組織	86
3.2.1	現在組織における人称語尾一覧	86
3.2.2	補足	87
3.2.3	現在組織における活用タイプ一覧	88
3.2.4	現在組織 第1種活用	89
3.2.5	現在組織 第2種活用	92
3.2.5.1	第2種活用における強語幹・弱語幹の分布	92
3.2.5.2	第2種活用における語尾変化の特例	92

3.2.5.3	第2類動詞	93
3.2.5.3.1	第2類動詞活用表	93
3.2.5.3.2	第2類に属する重要動詞	94
3.2.5.4	第3類動詞	99
3.2.5.4.1	第3類動詞活用表	99
3.2.5.4.2	第3類に属する重要動詞	101
3.2.5.5	第5類動詞	107
3.2.5.5.1	第5類動詞活用表	107
3.2.5.5.2	第5類に属する重要動詞	108
3.2.5.6	第7類動詞	110
3.2.5.6.1	第7類動詞活用表	110
3.2.5.6.2	第7類に属する重要動詞	111
3.2.5.7	第8類動詞	114
3.2.5.7.1	第8類動詞活用表	114
3.2.5.8	第9類動詞	116
3.2.5.8.1	第9類動詞活用表	116
3.2.5.8.2	第9類に属する重要動詞	118
3.3	未来組織	119
3.3.1	単純未来	119
3.3.2	複合未来	120
3.4	アオリスト組織	121
3.4.1	語根アオリスト	121
3.4.2	a-アオリスト	122
3.4.3	重音アオリスト	122
3.4.4	s-アオリスト	123
3.4.5	iṣ-アオリスト	124
3.4.6	siṣ-アオリスト	124
3.4.7	sa-アオリスト	125
3.5	完了組織	126
3.5.1	重音完了(単純完了)	126
3.5.1.1	単子音 + i,u,r + 単子音	127
3.5.1.2	単子音 + a + 単子音	127
3.5.1.3	Samprasāraṇa の起るもの	128

3.5.1.4	ā/2 重母音で終わる語根	128
3.5.2	複合完了	129
3.6	第2次活用	130
3.6.1	受動活用	130
3.6.2	使役活用	131
3.6.3	意欲活用 (desiderative)	132
3.6.4	強意活用 (intensive, frequentative)	132
3.7	準動詞	133
3.7.1	現在能動分詞 (at-語幹変化 >2.1.2.2.2)	134
3.7.2	現在中動分詞 (a/ā 語幹変化 >2.2.1)	134
3.7.3	未来能動分詞 (at-語幹変化 >2.1.2.2.2)	134
3.7.4	未来中動分詞 (a/ā 語幹変化 >2.2.1)	134
3.7.5	完了能動分詞 (vas-語幹変化 >2.1.2.3.3)	134
3.7.6	完了中動分詞 (a/ā 語幹変化 >2.2.1)	134
3.7.7	過去受動分詞 (a/ā 語幹変化 >2.2.1)	135
3.7.8	過去能動分詞 (vat-語幹変化 >2.1.2.2.2 の 2.)	135
3.7.9	動形容詞 (gerundive) (a/ā 語幹変化 >2.2.1)	135
3.7.10	不定詞 (無変化)	136
3.7.11	絶対詞 (gerund, absolutive) (無変化)	136
3.8	前置詞・動詞の派生接頭辞	137
3.8.1	前置詞・動詞前綴り	137
3.8.2	機能動詞表現	138
4	統語論	139
4.1	概略	139
4.2	語順	139
4.3	数 (numerus)	140
4.4	一致の特例	141
4.5	代名詞	141
4.6	主格の用法	142
4.7	対格の用法	142
4.8	具格の用法	142
4.9	与格の用法	143

4.10	奪格の用法	144
4.11	属格の用法	144
4.12	位格の用法	145
4.13	絶対位格と絶対属格	146
4.14	分詞	147
4.15	不定詞	149
4.16	動詞の現在形	149
4.17	動詞の過去形 (未完了過去・完了・アオリスト)	150
4.18	動詞の未来形	150
4.19	命令形	150
4.20	願望法	151

0 はじめに

0.1 本書の目的

既に内外に多くの優れたサンスクリット語文法書が存在するにもかかわらず、ここに勇気を奮って本書を著す所以は、音韻論・形態論の記述に新しい方法を提案しつつ、本来極めて明晰で単純な構造になっているサンスクリット語文法の全体像をできる限り簡明に提示し得る新たな文法書の必要性を感じたからである。

日本におけるサンスクリット語の教育研究が世界に誇る長く豊富な歴史的蓄積を有している反面、現在のサンスクリット語の研究場面も学習人口も極めて限られているため、多くの歴史的な良書、例えば J.Gonda, A.A.Macdonell, M.Coulson, A.F.Stenzler 等の定評ある初等文法書の実用性・実践性が必ずしも生かされる環境になく、また M.Mayrhofer の比較言語学の精華とも呼ぶべき小著を十分に利用し得る状態にもない。

浅学非才の身ながら歴史言語学の一学徒として、この現状に少しでも対応しうる何某かの成果を提出し、印欧語に関する言語学・文献学の研究教育の発展に資することを志したばかりであることを御寛恕頂ければ幸いである。

0.2 本書を教材とされる方へ

1. 変化形が多く複雑に見えるが全体の構造は明晰で単純である。まず全体像を把握することを優先されたい。
2. 文法用語を英独仏の原語・略号と共に是非覚える必要がある。書物によって訳語が不統一で混乱する場合があるからである。(e.g. locative: 位格, 処格, 所格, 位置格 etc.)
3. 古典語の語彙は現代語に比べて圧倒的に少なく、基本的に派生語でしか増えない。最初から語彙を丁寧に覚え、派生規則をマスターすべきである。特にサンスクリット語は合成語を多用するので、基礎語彙の知識は不可欠となる。
4. 印欧語の基本で、語形変化(屈折: 英 inflexion, 独 Flexion, 仏 inflexion)は,
 - (a) 名詞系の変化(曲用, 形容詞と代名詞を含む): 英 declension, 独 Deklination, 仏 declension
 - (b) 動詞の変化(活用): 英 conjugation, 独 Konjugation, 仏 conjugaisonに分かれる。この両者を混同してはならない。
5. 可能な限り、ラテン語と古典ギリシャ語を平行して学ぶべきである。理解が飛躍的に高まる。この古典3言語は、単体で孤立的に学ぶと極めてロスが多く、捗らない。教育研究の効率のために必ず印欧語の多言語比較の観点から学ぶべきである。
6. サンスクリット語をはじめ古典語関係は著作権の問題が無い(原テキストはもちろん、文法書・辞書の類も著作権切れのものが多い)、他分野に先駆けて電子化されているので、大いに活用して欲しい。— 旧世代の研究者・学習者には想像もできなかったことだが、下のサイトから Monier の A Sanskrit-Englisch Dictionary の電子辞書版が無料でダウンロードできるし、Böhtlingk の Sanskrit-Wörterbuch の PDF 版さえ無料で入手可能である。ラテン語や古典ギリシャ語関連はもちろんのこと、Du Cange さえ電子

辞書化されていることも付言しておく。

- (a) ここまでできる→ネットで無料で読める世界の語学教科書（古典語篇）
「読書猿」
<http://readingmonkey.blog45.fc2.com/blog-entry-565.html>

- (b) **EPWING for the classics:**
<http://classicalepwing.sourceforge.jp/download.html>

7. また原テキストについてはさしあたり次のサイトを紹介しておく：

- (c) ドイツ・ゲッティンゲン大学のサイト
<http://gretil.sub.uni-goettingen.de/>

- (d) **Indira Gandhi National Center for the Arts,**
Gaudiya Grantha Mandira :Sanskrit Text Repository:
<http://www.ignca.nic.in/sanskrit.htm>

0.3 参考文献

- 高津春繁『印欧語比較文法』2005 岩波書店
- J. ゴンダ (鎧淳訳)『サンスクリット語初等文法』1974/1984/2012 春秋社
- 辻直四郎『サンスクリット文法』1974/1984 岩波書店
- 平岡昇修『サンスクリット・トレーニング』4巻 1990-1995 世界聖典刊行協会
- O. Böhtlingk: Sanskrit-Wörterbuch, 7 Bde. 1852-75 St.Petersburg.
- Roderick S. Buckel: Sanskrit Manual. 1992 Delhi .
- Michael Coulson: Sanskrit. A complete course for beginners. 1976 Teach Yourself.
- Jan Gonda: A Concise Elementary Grammar of the Sanskrit Language. 1966/2006 The University of Alabama Press.
- Hans Krahe: Indogermanische Sprachwissenschaft. 1966/69/85 Walter de Gruyter.
- Leumann/Hofmann/Szantyr: Lateinische Grammatik.2 Bde.1965/1972 Mnchen.
- Arthur A. Macdonell: A Sanskrit Grammar for Students. 3.ed.1926/1988 Oxford University Press.
- Manfred Mayrhofer: Sanskrit-Grammatik. 1978 Walter de Gruyter.
- Michael Meier-Brügger: Indogermanische Sprachwissenschaft. 7.Aufl.2000 Walter de Gruyter.
- M.Monier-Williams: A Sanskrit-English Dictionary. 1899 Oxford.
- J.S.Speijer: Sanskrit Syntax. 1886 Leyden.
- Adolf Friedrich Stenzler: Elementarbuch der Sanskrit-Sprache. 1896, 19.Aufl. 2003 Walter de Gruyter.
- Peter Thoni: Sanskrit-Lehrbuch. 2.Aufl. 2008 Buske.
- J. Wackernagel: Altindische Grammatik. 1896-1964 Göttingen.
- William Dwight Whitney: Sanskrit Grtammr. 1879/2003 Dover.
- OswaldSzemerényi: Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft. 1980 Darmstadt.

1 文字と発音

1.1 文字と発音 デーヴァナーガリー文字

1.1.1 子音

破裂音 explosive/stop

無声無気 無声有気 有声無気 有声有気 鼻音 半母音 歯擦音
 voiceless/ voiceless/ voiced/ voiced/ nasal semivowel sibilant
 unaspirate aspirate unaspirate aspirate

軟口蓋音 velar	क k	ख kh	ग g	घ gh	ङ ṅ			
硬口蓋音 palatal	च c	छ ch	ज j	झ jh	ञ ñ	य y	श ś	
反舌音 retroflex	ट ṭ	ठ ṭh	ड ḍ	ढ ḍh	ण ṇ	र r	ष ṣ	
歯音 dental	त t	थ th	द d	ध dh	न n	ल l	स s	
唇音 labial	प p	फ ph	ब b	भ bh	म m	व v		

気音 aspirate ह h

—注意—

1. デーヴァナーガリー文字は音節文字であり、これらの文字は全て母音 a を伴う。
2. 表の横列の音韻は全て調音点（舌の位置）が同じになる。
3. ch/th/ph などの h は、気音 = 「息の音がする音」の印であり、[tʃ]/[θ]/[f] の音を意味しない。
4. 「反舌音（そりじたおん）」は [ʃ] と同じ舌の位置で発音する。従って ś=[ʃ]。

古くは「脳に響かせる」という意味から cerebral と呼ばれたこともある。

5. r は舌をふるわせる音ではなく、英語のように発音する。

6. 有声の歯擦音, [f], [w] は存在しない。

特殊記号：

Visarga □: saḥ सः

語末の s/r が気音化しドイツ語の ch[x] の様な音になったもの。

Anusvāra □̣ taṃ तं

前の母音が鼻母音化したことを表す。taim とも。

Anunāsika ल̣ ĩ

母音化した l.

Avagraha ऽ te + api ते + अपि > te 'pi ते ऽपि

母音衝突で省略された a.

Virāma □ ka क > k क्

その文字が a を含まない子音のみを表すことを示す。

1.1.2 母音

独立形 अ a आ ā इ i ई ī उ u ऊ ū ऋ ṛ ॠ ṝ लृ ḷ
 付加形 क ka का kā कि ki की kī कु ku कू kū कृ kr̥ कृ̄ kṝ क्ल̥ kl̥

※例外

ru रु rū रू
 (hu) (hū) हृ हृ̄ (hr̥) ह्र̥

独立形 ए e ऐ ai ओ o औ au
 付加形 के ke कै kai को ko कौ kau

母音の基本構造	i/ī	u/ū
a	e (< a + i) 長母音!	o (< a + u) 長母音!
ā	ai (< ā + i)	au (< ā + u)

※ ṛ/ḷ は「コンソナント (子音)」に対して「ソナント (鳴音)」といい、「母音化して音節を担えるようになった流音・鼻音」のこと。r̥/l̥ とも。

英: single, little や仏語のシラブルの数え方を参照。

「り」と音読する習慣。R̥gveda 「リグヴェーダ」

1.1.3 数字

१, २, ३, ४, ५, ६, ७, ८, ९, ०

२०१३

1.1.4 辞書におけるアルファベット順

- 母音の順: a > ā > i > ī > u > ū > ṛ > ṝ > ḷ > e > ai > o > au
- 子音の順: (それぞれの子音の中は上の母音の順に従う: ka > kā > ki > kī 等)
 1. 軟口蓋音: 無声無気 k > 無声有気 kh > 有声無気 g > 有声有気 gh
 2. 硬口蓋音: 無声無気 c > 無声有気 ch > 有声無気 j > 有声有気 jh
 3. 反舌音: 無声無気 ṭ > 無声有気 ṭh > 有声無気 ḍ > 有声有気 ḍh
 4. 歯音: 無声無気 t > 無声有気 th > 有声無気 d > 有声有気 dh
 5. 唇音: 無声無気 p > 無声有気 ph > 有声無気 b > 有声有気 bh
 6. 鼻音: 軟口蓋音 ñ > 硬口蓋音 ṅ > 反舌音 ṇ > 歯音 n > 唇音 m
 7. 半母音: 硬口蓋音 y > 反舌音 r > 歯音 l > 唇音 v
 8. 歯擦音: 硬口蓋音 ś > 反舌音 ṣ > 歯音 s
 9. 気音 h

1.1.5 合字 ligature

- 単独の文字は必ず a を伴う。子音だけを表したいときはヴィラーマ Virāma を付ける。

ka क > k क् ; pa प > p प् ; ma म > m म्

- 子音だけが連続する場合には、結合文字（合字 ligature）を使う。

tamaya तमय > tmya त्म्य

- 最初の文字が縦線で終わるなら、この縦線を失って、後の文字の左に付く。

t त् + ka क > tka त्क ; g ग् + ya य > gya ग्य

- 最初の文字が縦線で終わらないなら、後の文字が横線を失って、最初の文字の下に付く。

k क् + va व > kva क्व ; ḍ ḍ् + ga ग ḍga > ḍḡ

(例外が多い)

- r は特別. dhra ध्र rdha र्ध ; pra प्र rpa र्प

- その他例外や難読文字がある。

kta क्त ; kṣa क्ष ; jña ज्ञ ; tta त्त ; tna त्त ; tra त्र ; dda द्द ;
ddha द्ध ;

dbha द्भ ; dbhya द्भ्य ; dya द्य ; śca श्च ; ścya श्च्य ; ṣṭa ष्ट ;
ṣṭya ष्ट्य ;

ṣṭha ष्ट ; ṣṭhya ष्ट्य 等多数。

1.1.6 文の綴り方

- 基本的に単語ごとに区切らず、文は一続きで書く習慣だが、単語が母音・m・hで終わり、次の単語が子音で始まる場合区切って書く。(子音 + 母音, 母音 + 母音, 子音 + 子音の場合には続け書きするということである。>連声法)
- 句読法は： 文中の小さな区切りには | を用い、文末には || を用いる。
- 「ナラ王物語」冒頭の例 (> 1.4.3)

Bṛhadaśva uvāca:
 āsīd-rājā nalo nāma vīrasenasuto balī
 upapanno guṇair-iṣṭai rūpavān-aśvakovidah /1/
 atiṣṭan-manujendrāṇām mūrdhni devapatiryathā
 upary-upari sarveṣām-āditya iva tejasā /2/
 brahmaṇyo vedavic-chūro nisadheṣu mahīpatiḥ
 akṣapriyaḥ satyavādī mahān-akṣauhiṇīpatiḥ /3/

भृहदश्व उवाच ॥

आसीद्राजा नलो नाम वीरसेनसुतो बली ।

उपपन्नो गुणैरिष्टै रूपवानश्वकोविदः ॥ १ ॥

अतिष्ठन्मनुजेन्द्राणां मूर्ध्नि देवपतिर्यथा ।

उपर्युपरि सर्वेषामादित्य इव तेजसा ॥ २ ॥

ब्रह्मण्यो वेदविच्छूरो निषधेषु महीपतिः ।

अक्षप्रियः सत्यवादी महानक्षौहिणीपतिः ॥ ३ ॥

1.1.7 アクセント

ラテン語のアクセント法則に準ずる。ただし語末から4音節にまで拡張する。

1. 最後の音節にアクセントは来ない。
2. 従って2音節語は必ず第1音節にアクセントが来る。
3. 「長い(重い guru)音節」「短い(軽い laghu)音節」の区別がアクセントでは重要になる。
 - (a) 「長い音節」とは、長母音(ā,ī,ū,ī)・複母音(e,ai,o,au)を含む音節か、
 - (b) 短母音に2つ以上の子音が後続する音節のことである。
 - (c) ただし、kh,ph等の、hで有気を表したアルファベット翻字は、2文字であっても本来1音を表しているから要注意:
 la-ghu「軽い」:短-短,
 lag-na「付着した」:長-短
4. 3音節語の場合,
 - (a) 後から2番目の音節が「長い音節」なら、そこにアクセントが落ち、
A-śó-ka
 - (b) 後から2番目の音節が「短い音節」なら、後から3番目の(つまり語の第1音節)にアクセントが落ちる。Rā-gha-va
5. 4音節以上の語の場合,
 - (a) 後から2番目の音節が「長い音節」なら、そこにアクセントが落ちる。
Kā-li-dā-sa
 - (b) もし後から2番目の音節が「短い音節」ならば,
 - i. 後から3番目の音節が「長い音節」の時には、そこにアクセントが落ち: hi-mā-la-ya
 - ii. 後から3番目の音節が「短い音節」時には、後から4番目の音節にアクセントが落ちる。ū-pa-ni-ṣad
6. 後から4番目の音節より前にアクセントは遡らない。
7. 語形変化に伴ってアクセントは規則通り移動する。合成語は個々の成分にアクセントが保持される。

1.2 母音の階梯 Ablaut

周囲の音韻に関係なく（周囲の音韻から影響を受けたわけではなく）、母音自体が文法範疇に合わせて規則的に変化することがある。印欧語に広く見られるこの現象を母音交替 (Ablaut) と呼ぶ。サンスクリット語では、標準階梯を中心にして、弱階梯（消失階梯）と強階梯（長音階梯）の間で交替する。語形変化の際に重要な役割を果たす。

		a + i	a + u	a + ṛ	a + ḷ
弱階梯・消失階梯	–	i (ī)	u (ū)	ṛ (ṝ)	ḷ
標準階梯 Guṇa	a	e (< a + i)	o (< a + u)	ar (< a + ṛ)	al (< a + ḷ)
強階梯・長音階梯 Vṛddhi	ā	ai (< ā + i)	au (< ā + u)	ār (< ā + ṛ)	–

通例母音交替は、後ろに続いた他の母音のとの間で特徴ある変化のセットを形成する。しかし一部に、母音交替の前に他の母音が先行して特別な変化のセットを形成することがある。これをサンブラサーラナと呼ぶ。

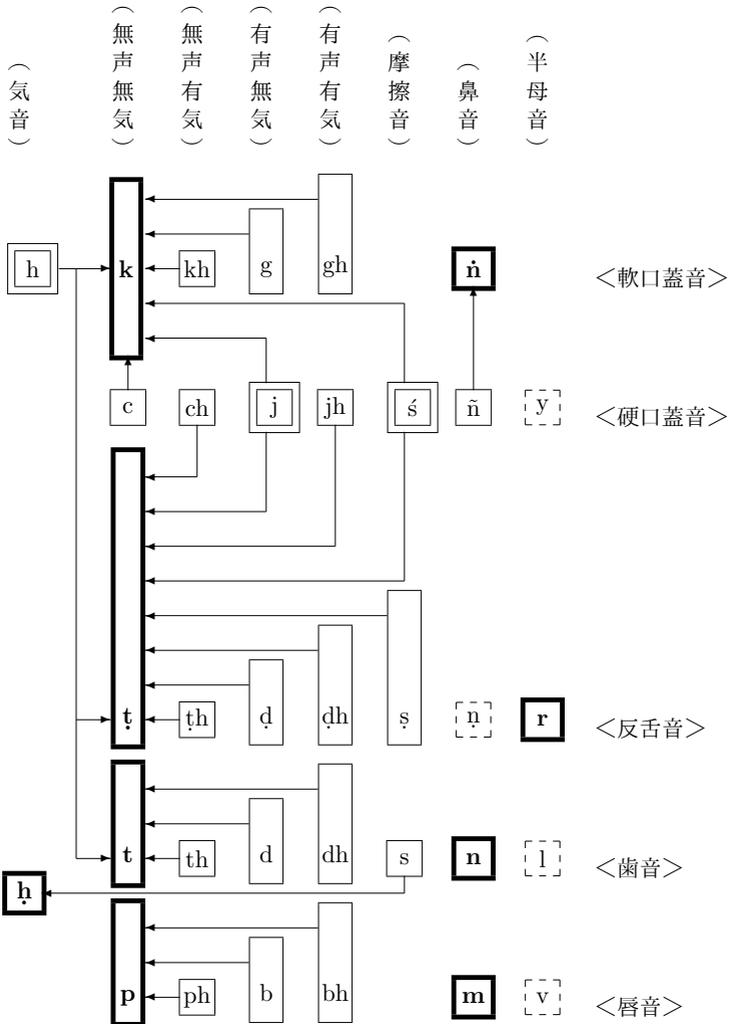
特殊例： サンブラサーラナ samprasāraṇa					
		i + a	u + a	ṛ + a	ḷ + a
弱階梯・消失階梯	–	i (ī)	u (ū)	ṛ (ṝ)	ḷ
標準階梯 Guṇa	a	ya (< i + a)	va (< u + a)	ra (< ṛ + a)	al (< ḷ + a)
強階梯・長音階梯 Vṛddhi	ā	yā (< i + ā)	vā (< u + ā)	rā (< ṛ + ā)	–

1.3 絶対語末子音の制限と変化

1. サンスクリット語の語形変化（屈折）する単語は、文法的規則に従って「理論的語形」をいったん形成した後、この語末子音（「絶対語末子音 consonants in pausa」と呼ぶ）に規則的な制限をかけて現実に使用する「現実的語形」を形成する。
2. 絶対語末子音は1個に限られる。複数の場合は通例先頭の1個が残される：
*bharants (bhṛ-「運ぶ」の現在分詞男性単数主格) > bharan
3. 語末で2つの子音が許されるのは、r+子音の場合だけである：urk-「力」
4. 絶対語末に許されるのは、母音 (r/l以外) の他に、次の8つだけである：
k, t, ṭ, p, ṇ, n, m, ḥ.
5. これ以外の子音が理論的に語末に来た場合には、通例同系列の無性無気音に変化する。不規則な変化が多いので注意。
6. 有声無気で始まり有声有気で終わる語根が、その有声有気の語根末音を規則に従って無気音に変える時、語幹初めの無気音が有気音に変わる。(1語内に有気音は1つに限られるが、1つは残さねばならないので)：budh-「目覚めている、聡明な」> bhut (単数主格)

k は語末に立つことを許される子音 [ɲ] は語末に来る可能性のない子音

j は変化の方向が複数あるので注意を要する子音



1.4 連声法 Sandhi

1.4.1 外連声 external Sandhi

連続する2語の間で、

1. 語末母音と語頭子音 > 外連声は起こらない。
2. 語末母音と語頭母音 > 表1
3. 語末子音と語頭子音・語頭母音 > 表2

- -X-は、前後の語が融合したことを意味する。
- -X|X-は、前後の語が融合せず、それぞれに変化が生じた事を意味する。
- -X/-X は、語によっていずれかの変化が生じることを意味する。

<表1：語末母音と語頭母音の間の外連声>

語末母音								語頭母音
-ă	-ĩ	-ũ	-ṛ	-e	-ai	-o	-au	
-ā-	-ya-	-va-	-ra-	-e -'	-ā a-	-o -'	-āva-	a-
-ā-	-yā-	-vā-	-rā-	-a ā-	-ā ā-	-a ā-	-āvā-	ā-
-e-	-ī-	-vī-	-rī-	-a ĩ-	-ā ĩ-	-a ĩ-	-āvī-	ĩ-
-o-	-yũ-	-ũ-	-rũ-	-a ũ	-ā ũ	-a ũ	-āvũ-	ũ-
-ar-	-yṛ-	-vṛ-	-ṛ-	-a ṛ-	-ā ṛ-	-a ṛ-	-āvṛ-	ṛ-
-ai-	-ye-	-ve-	-re-	-a e-	-ā e-	-a e-	-āve-	e-
-ai-	-yai-	-vai-	-rai-	-a ai-	-ā ai-	-a ai-	-āvai-	ai-
-au-	-yo-	-vo-	-ro-	-a o-	-ā o-	-a o-	-āvo-	o-
-au-	-yau-	-vau-	-rau-	-a au-	-ā au-	-a au-	-āvau-	au-

-e+aの場合と、-o+aの場合に注意。-e/-oは変化せず、a-が省略される：

te + api > te 'pi; prabho + atra > prabho 'tra

例外：双数語尾 ī, ū, e は母音の前で省略されず、変化もしない。

代名詞 amīと間投詞も。

〈表2：語末子音と語頭子音・語頭母音の間の外連声〉

絶 对 語 末 子 音										語頭 子音
-k	-ṭ	-t	-p	-ṅ	-n	-m	-ḥ/-r -āḥ以外	-āḥ	-aḥ	
-k	-ṭ	-t	-p	-ṅ	-n	-ṃ	-ḥ	-āḥ	-aḥ	k-/kh-
-g	-ḍ	-d	-b	-ṅ	-n	-ṃ	-r	-ā	-o	g-/gh-
-k	-ṭ	-c	-p	-ṅ	-ṃś	-ṃ	-ś	-āś	-aś	c-/ch-
-g	-ḍ	-j	-b	-ṅ	-ñ	-ṃ	-r	-ā	-o	j-/jh-
-k	-ṭ	-ṭ	-p	-ṅ	-ṃṣ	-ṃ	-ṣ	-aṣ	-aṣ	ṭ-/ṭh-
-g	-ḍ	-ḍ	-b	-ṅ	-ṃ	-ṃ	-r	-ā	-o	ḍ-/ḍh-
-k	-ṭ	-t	-p	-ṅ	-ṃs	-ṃ	-s	-ās	-as	t-/th-
-g	-ḍ	-d	-b	-ṅ	-n	-ṃ	-r	-ā	-o	d-/dh-
-k	-ṭ	-t	-p	-ṅ	-n	-ṃ	-ḥ	-āḥ	-aḥ	p-/ph-
-g	-ḍ	-d	-b	-ṅ	-n	-ṃ	-r	-ā	-o	b-/bh-
-ṅ	-ṃ	-n	-m	-ṅ	-n	-ṃ	-r	-ā	-o	n-/m-
-g	-ḍ	-d	-b	-ṅ	-n	-ṃ	-r	-ā	-o	y-/v-
-g	-ḍ	-d	-b	-ṅ	-n	-ṃ	消失	-ā	-o	r-
-g	-ḍ	-l	-b	-ṅ	-ḷ	-ṃ	-r	-ā	-o	l-
-k	-ṭ	-c/-ch	-p	-ṅ	-ñ ś-/ch-	-ṃ	-ḥ	-āḥ	-aḥ	ś-
-k	-ṭ	-t	-p	-ṅ	-n	-ṃ	-ḥ	-āḥ	-aḥ	ṣ-/s-
-g/-gh	-ḍ/-ḍh	-d/-dh	-b/-bh	-ṅ	-n	-ṃ	-r	-ā	-o	h-
-g	-ḍ	-d	-b	-ṅ/-ṅṅ	-n/-nn	-m	-r	-ā	-a -o ²	母音 a-以外 a
-k	-ṭ	-t	-p	-ṅ	-n	-m	-ḥ	-āḥ	-aḥ	行末

語末子音と語頭母音の間に一般に外連声は起こらないが：

- -āḥ+ 語頭母音の場合には，-āḥ>-ā となり，語頭母音には変化がない。
- -aḥ+ 語頭母音の場合には，
 1. a-以外の語頭母音の前では，-aḥ>-a となり，語頭母音には変化がない。
kaḥ+eṣaḥ>ka eṣaḥ
 2. a-の前では，-aḥ>-o となり，a-は省略される．naraḥ+āyam>naro 'yam

1.4.2 内連声 internal Sandhi

1. 基本は外連声に同じだが、若干の例外がある。
2. 語根や語幹の末にある子音は、通例母音・半母音・鼻音で始まる接尾辞・語尾の前で変化しない。
3. 語根の i/u+r/v+ 子音 > ī/ū: pur- 「叫」 > pūrbyah
4. 有声有気音 + t-, th- > 有声無気音 + dh-:
 - budh- 「目覚める」 + ta (過去分詞接尾辞) > buddha-
 - labh- 「得る」 + ta (過去分詞接尾辞) > labdha-
 - rundh- 「阻む」 + thaḥ (現在能動 2 人称双数) > runddhaḥ
 - rundh- 「阻む」 + taḥ (現在能動 3 人称双数) > ruddhaḥ
5. -h + 破裂歯音
 - (a) -h + t-, th-, dh- > -ḍh (前の r 以外の短母音は延長される): lih- 「舐める」 + ta (過去分詞接尾辞) > liḍha-
 - (b) -h + t-, th-, dh- > -gdh: dah- 「焼く」 + ta (過去分詞接尾辞) > dagdha-
 - (c) nah- 「繋ぐ」 + -ta (過去分詞接尾辞) > naddha-; vah- 「運ぶ」 + ta- (過去分詞接尾辞) > uḍha-; vah + tum (不定詞接尾辞) > voḍhum; sah 「制する」 + tum (不定詞接尾辞) > soḍhum
6. 反舌音 + 歯音 > 反舌音 + 反舌音: dveṣ- 「憎む」 + ti (現在能動 3 人称単数) > dveṣṭi
7. ṣ/ś + s > kṣ:
8. s/n > ṣ/ṇ は、以下に図示するように極めて複雑な条件化で頻繁に発生する。
 - 条件 1. "s/n" の直後に特定の音韻がある
 - 条件 2. "s/n" の前に特定の音韻がある
 - 条件 3. "s/n" の前にある特定の音韻と, "s/n" との間に
 - 別の音韻が挟まっていないか
 - 特定の音韻が挟まっても

9. s の反舌音化

条件 2	条件 3		条件 1
k, r i, ī, u, ū, ṛ, ṝ, e, ai, o, au	m または ḥ が 介在しても	$s \implies ṣ$	r が後続していなければ

例: kāntāsu
kānteṣu

10. n の反舌音化

条件 2	条件 3		条件 1
ṛ ṝ r ṣ	軟口蓋音 (k, kh, g, gh, ṅ) または唇音 (p, ph, b, bh, m, v) または y, h, ṃ (ḥは起こりえない) または母音が 介在しても	$n \implies ṇ$	母音または m, y, v, n が 後続していれば

例: aśvena
sarveṇa

1.4.3 語形変化と音便規則 (euphonization)

サンスクリット語の単語は、文法規則に従った語形変化と、発音上美しい（なめらかである）と古代インド人の音感が捉えた規則的な音韻変化＝「音便規則」(euphonization)の2つが複雑に入り組む。連声法と「絶対語末子音の制限」は「音便規則」である。

サンスクリット語の単語は、まず文法的に正しい変化を加えた「理論的語形」を作ってから、それに「音便規則」を加えて「現実的語形」に作り替え、さらにそれを文中で用いた際に前後に並んだ別の語の音韻との関係でもう1度「音便規則」を加えて「文中での語形」にする。このように2段階で音便規則が作用する。

1. 理論的語形 ←原形に文法変化（決まった語尾）を加える＋内連声・母音交替
2. 現実的語形 ←絶対語末子音の制限・内連声（pada 語尾は例外。後述）
3. 文中での語形 ←外連声

1.4.4 注意すべき点

連声法を適用した結果、異なる語の繋がりが同じものになってしまうことがある：
āgacchan nṛpasya ...

←āgacchan (ā+gam-「来る」, 過去, 能動, 3人称, 複数) +nṛpasya ...

←āgacchat (ā+gam-「来る」, 過去, 能動, 3人称, 単数) +nṛpasya ...

前後の文脈から判断するしかない。

1.4.5 連声法まとめ 『ナラ王物語』冒頭の通常テキスト形（上）と、連声法適用前の単語の分かち書き（下）

Nalopākhyāna I 1-3:

Bṛhadaśva uvāca:

āsīdrājā nalo nāma vīrasenasuto balī
 upapanno guṇairiṣṭai rūpavānaśvakovidah /1/
 atiṣṭanmanujendrāṇām mūrdhni devapatiryathā
 uparyupari sarveśamāditya iva tejasā /2/
 brahmaṇyo vedavicchūro nisadheṣu mahīpatiḥ
 akṣapriyaḥ satyavādī mahānakṣauhiṇīpatiḥ /3/ ,

Bṛhadaśvaḥ uvāca:

āsīt rājā nalaḥ nāma vīrasenasutaḥ balī
 upapannaḥ guṇaiḥ iṣṭaiḥ rūpavān aśvakovidah /1/
 atiṣṭat manujendrāṇām mūrdhni devapatiḥ yathā
 upari upari sarveśam ādityaḥ iva tejasā /2/
 brahmaṇyaḥ vedavit śūraḥ nisadheṣu mahīpatiḥ
 akṣapriyaḥ satyavādī mahān akṣauhiṇīpatiḥ /3/

『ナラ王物語』（鎧淳訳）第1章 1-3

ブリハドアシュヴァ仙は語り始めました—

昔、ナラという王子がありました。ヴィーラセーナ王の御子で、たくましく、身に望ましい美質を具え、眉目秀麗で、調馬に長けておりました。 /1/
 美丈夫ぶりでは、あたかもインドラ神が神々の筆頭の座を占めるように、王たちに抜きんで、

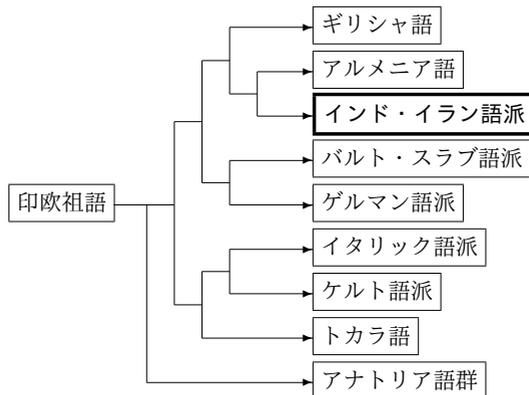
威光では、さんさんと輝く日輪のように、諸々の王をはるかにしのいでおりました。 /2/

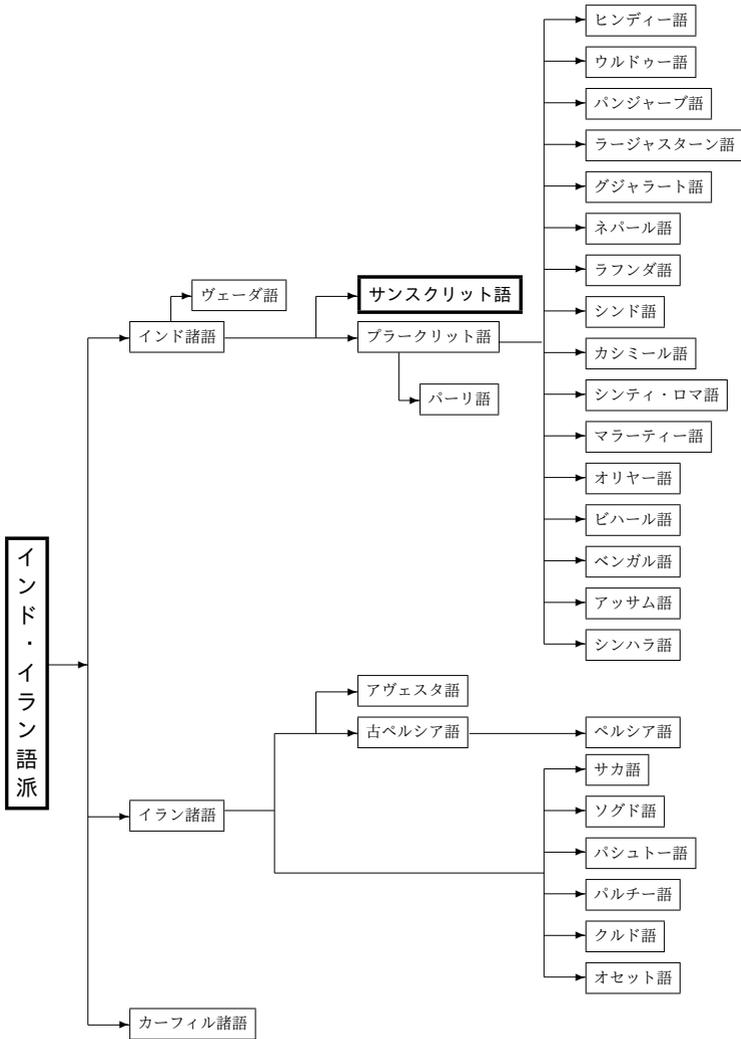
バラモンを敬い、ヴェーダ聖典に通じた威き武士、ニシャダ国の王であり、賽子をたしなみ、不快虚飾の言を語らず由々しき大將軍でした。 /3/

1.5 補足

1.5.1 印欧語の中のインド・イラン語派

1. 「サンスクリット語 *sanskṛta-*」とは「整えられた、正確な言葉」という意味で、紀元前 4 世紀頃活躍したパーニニを始祖とする古代インドの文法学者たちによって整備され、規範化された古代インドの文語である。ある意味で人工的な言語であるが、宗教・哲学・文芸のための言葉として尊重され、人口は少ないものの、今日に至るまで実際に使用されている。
2. インド・イラン語派の最古の資料としては、紀元前 1500 年頃の楔形文字史料（特にミタンニ王国のもの）が中近東で出土している。
3. 紀元前 500 年ころまでに成立した「ヴェーダ賛歌」の言語が、インド最古のまとまった言語で、ヴェーダ語と呼ばれる。
4. サンスクリット語が文語として成立するのに対し、口語の方はプラークリット語と呼ばれ、紀元後 500 年ころから数多くの方言に分解して今日に至っている。南伝仏教の経典が書かれたパーリ語もここに属する。





1.5.2 印欧語における母音推移

*代表的な推移のみを簡略にまとめた。実際には条件によって複数の推移を示す。

印欧祖語	短母音 e o a ə i u	長母音 ē ō ā ī ū	複母音 ei oi ai eu ou au	ソナント r l n m
ゲルマン祖語	e a i u	ē ō ī ū	ī ai eu au	ur ul un um
古典ギリシャ語	ε ο α ι υ	η ω ᾱ ῑ ῡ	ει οι αι ευ ου αυ	α ρ α λ α υ α μ
ラテン語	e o a i u	ē ō ā ī ū	ī ū ae ū au	or ol en em
サンスクリット語	a i i u	ā ī ū	ē ō	r r a a
中世ケルト語	e o a i u	ī ā ā ī ū	ē,ia oe ae ō, ūa	ar al an am
リトアニア語	e a i u	ė uo o y ū	ei ai,ie jau au	ir il in im
古代教会スラブ語	e o ĭ ŭ	ě a y u	i ě ju u	ĭr ĭl ĭn ĭm

1.5.3 印欧語における子音推移

*破裂音以外はほとんど異同がない。

*印欧祖語/kが口蓋音で保持されているか、歯擦音に推移したかで大きく二つに分類される。

100を表す語によって前者を centum 語群、後者を satem 語群と呼ぶ。

	無声無気	有声無気	有声有気
印欧祖語	p t k k _u	b d g g _u	bh dh gh gh _u
ゲルマン祖語	f þ h h	p t k k	b d g gw
古代ギリシャ語	π τ κ π, τ, κ	β δ γ β, δ, γ	φ θ χ φ, θ, χ
ラテン語	p t c qu, c	b d g qu, v, g	f(b) f(b, d) h, g f, gu, v, g
ケルト語	t c, ch c, ch	b d g b	b d g g
サンスクリット語	p t ś k(c)	b d j g(j)	bh dh h gh(h)
リトアニア語	p t š k	b d ž g	b d ž g
古代教会スラブ語	p t s k(č, c)	b d z g(ž, dz)	b d z g(ž, dz)

1.5.4 印欧語における母音交替

■1.5.4.1 概略 印欧語では、語形変化に伴いアクセントが移動していたが、母音交替はこのアクセント移動が原因で生じた二次的な現象であると推定されている。文法的な機能を担うようになり、特にゲルマン語では強変化動詞の形成に重要な役割を果たした。

eg. drink/drank/drunken; trinken/trank/getrunken

■1.5.4.2 種類 印欧語の母音交替には次の2種類がある:

1. 音質交替 (Abtönung): e と o が (まれにəが) 交替する。lat. tegere/toga;
gr. πατέρα/ἐπάτορα
2. 音量交替 (Abstufung): 同じ母音が長母音・短母音・消失と変化する: lat. tegere/tēgula; gr. πατέρα/πατήρ/πατρός

■1.5.4.3 母音交替列 音質交替と音量交替を組み合わせ、印欧語には次の6種類の母音交替列があった:

a) 短母音を基本階梯とする母音交替列

	基本階梯	音質交替階梯	延長階梯	消失階梯
1	e gr.λείπο lat.rego	o λέλοιπα rogo	ē rēx	— ἔλιπον
2	a gr.ἄγο lat.scabo		ā ῥῆα(η<ā) scābi	
3	o gr.ρήτορα lat.fodio		ō ῥήτωρ fōdi	

b) 長母音を基本階梯とする母音交替列

	基本階梯	音質交替階梯	弱化階梯
4	ā gr.στήσω(η<ā) lat.stāre		ə στατός(α<ə) status(a<ə)
5	ō gr.δίδωμι lat.dōnum		ə δόςις(ο<ə) datus(a<ə)
6	ē gr.τίθημι lat.fēci(f<dh)	ō θημός sacerdōs	ə θητός facio(f<dh, a<ə)

■1.5.4.4 サンスクリット語の母音交替の特徴

1. サンスクリット語にあっては印欧語の a/e/o が全て a に変化したため、母音交替列 1.2.3. が統合され、ā/a/—を基本とする単一の母音交替列が形成された。
2. 古代の文法家は消失階梯を基本（標準）階梯として捉えていた。サンプラサーラナから考えて、今日では Guna が標準階梯とされている。（消失階梯を基本として出発すると、その母音交替列がサンプラサーラナかそうでないか決定できなくなるから）
3. ただし実用的な観点から動詞の基本形を弱階梯で記述し辞書の見出し語とすることが行われている。

2 名詞変化

2.1 名詞変化の概要

1. サンスクリット語の名詞は:

- (a) 性 (gender) : 男性 (masculine), 女性 (feminine), 中性 (neuter)
- (b) 数 (number) : 単数 (singular), 双数 (両数) (dual), 複数 (plural)
- (c) 格 (case) :
 - i. 主格 nominative (主語になる形)
 - ii. 呼格 vocative (呼びかけのための形)
 - iii. 対格 accusative (直接目的語になる形, ~を)
 - iv. 具格 instrumentalis (手段・材料・方法を示す形, ~によって)
 - v. 与格 (為格) dative (間接目的語になる形, ~に)
 - vi. 奪格 ablative (分離を表す形, ~から)
 - vii. 属格 genitive (所属を表す形, ~の)
 - viii. 位格 (処格・所格) locative (場所を表す形, ~において)

に従って変化する。(格は昔からこの順番で文法が組まれているので, この順番で暗記すること)

- 2. それぞれの意味用法については「4 統語論」を参照せよ
- 3. それぞれの文法用語のサンスクリット語は, 2.2.1. の a-/ā-語幹名詞の変化表に示しておいた。
- 4. 名詞は通例「語幹 (stem) + 語尾 (ending)」で形成される。語幹が意味を表し, 語尾が文法的機能を表す。
- 5. 語幹と語尾の間に連声法が適用される。
- 6. サンスクリット語の名詞変化には次のタイプがある:
 - (a) 子音幹名詞 (語幹は変化することがあるが, 全ての変化タイプで語尾が共通。男女の区別なし)
 - i. 単語幹名詞
 - ii. 複語幹名詞 (2 語幹名詞, 3 語幹名詞)
 - (b) 母音幹名詞 (語幹は変化しないが, 変化タイプ毎に語尾が微妙に異なる。男女差が明確)

- i. a-語幹名詞
 - ii. ā-語幹名詞
 - iii. i-語幹名詞
 - iv. u-語幹名詞
 - v. ī-語幹名詞
 - vi. ū-語幹名詞
 - vii. tŕ-語幹名詞
7. 中性形は主格・対格においてのみ男性形と異なる形を取る.
 8. 名詞と形容詞の間に基本的に区別がない.
 9. 代名詞は変化形の一部で特殊な変化形を取る.

2.2 子音幹名詞の変化

2.2.1 単語幹名詞の語尾一覧

数	格	男性・女性	中性		
単	主格	-s	-	絶対語末子音の制限により、 この-s は実際には現れない。	
	呼格	-	-		
	対格	-am	-		
	具格	-ā			
	与格	-e			
	奪格	-as			
数	属格			-aḥの形で現れる	
	位格	-i			
双	主格			(pada 語尾)	
	呼格	-au	-ī		
	対格				
	具格	-bhyām			
	与格				
	奪格				
数	属格	-yos		-yoḥの形で現れる	
	位格				
複	主格			中性複数形は、語尾-i を付けるだけでなく、 語幹末子音の前に同系列の鼻音を挿入する： jagat- n. 「世界」 > jaganti	
	呼格	-as	-i		
	対格				
	具格	-bhis			-bhiḥの形で現れる (pada 語尾)
	与格	-bhyas			-bhyaḥの形で現れる (pada 語尾)
	奪格				
数	属格	-ām		(pada 語尾)	
	位格	-su			

2.2.2 <単語幹名詞の変化>

- 語幹末子音の種類に従って、詳しく紹介した。
- 男性・女性・中性名詞をそれぞれ例示せず、形容詞で同時に3性の形を示す方法を使った。
- 語幹末子音と語尾との間の連声法や、中性複数主格の形に注意のこと。
- 特に pada 語尾 (-bhyām, -bhis, -bhyas, -su) の場合に注意せよ。他の語尾は、「絶対語末子音の制限」を受ける前の本来の語末子音に直接付加されるが、pada 語尾は「絶対語末子音の制限」を受けた後の語末子音に付加される。しかもその際に、語末子音と pada 語尾の間に外連声が適用される。

- | | | |
|---------------|---------------------|--------------|
| 1. 歯音幹 | 2. 軟口蓋音幹 | 3. 唇音幹 |
| 4. 硬口蓋音幹 a, b | 5. 歯擦音幹 a, b, c, d | 6. h-語幹 a, b |
| 7. r-語幹 | 8. as-, is-, us- 語幹 | |
- *. in-, min-, vin- 語幹 > 2 語幹名詞

		1. 歯音幹 suyudh- “良く戦う”			2. 軟口蓋音幹 sarva-śak- “全能の”		
		男性形	女性形	中性形	男性形	女性形	中性形
単	主格	suyut		suyut	sarvaśak		sarvaśak
	呼格						
	対格	suyudham			sarvaśakam		
	具格	suyudhā			sarvaśakā		
	与格	suyudhe			sarvaśake		
	奪格	suyudhaḥ			sarvaśakaḥ		
	属格						
数	位格	suyudhi			sarvaśaki		
	主格						
	呼格	suyudhau		suyudhī	sarvaśakau		sarvaśakī
	対格						
	具格	suyudbhyām			sarvaśagbhyām		
	与格						
	奪格						
数	属格	suyudhoḥ			sarvaśakoḥ		
	位格						
複	主格						
	呼格	suyudhaḥ		suyudhi	sarvaśakaḥ		sarvaśaṅki
	対格						
	具格	suyudbhiḥ			sarvaśagbhiḥ		
	与格	suyudbhyaḥ			sarvaśagbhyaḥ		
	奪格						
数	属数	suyudhām			sarvaśakām		
	位格	suyutsu			sarvaśakṣu		

		3. 唇音幹 dharma-gup- “法を守る”			4. 硬口蓋音幹 a. satya-vāc- > -vāk “真実を語る” b. viśvasṛj- > -sṛṭ- “一切を創造する”		
		男性形	女性形	中性形	男性形	女性形	中性形
单	主格	dharmagup		dharmagup	satyavāk		satyavāk
	呼格						
	对格	dharmagupam			satyavācam		
	具格	dharmagupā			satyavācā		
	与格	dharmagupe			satyavāce		
	奪格	dharmagupaḥ			satyavācaḥ		
	属格						
数	位格	dharmagupi			satyavāci		
双	主格						
	呼格	dharmagupau		dharmagupī	satyavācau		satyavācī
	对格						
	具格	dharmagubbhyām			satyavāgbhyām		
	与格						
	奪格						
	属格	dharmagupoḥ			satyavācoḥ		
数	位格						
複	主格						
	呼格	dharmagupaḥ		dharmagumpi	satyavācaḥ		satyavāñci
	对格						
	具格	dharmagubbhiḥ			satyavāgbhiḥ		
	与格	dharmagubbhyaḥ			satyavāgbhyaḥ		
	奪格						
	数	属数	dharmagupām			satyavācām	
	位格	dharmagupsu			satyavākṣu		

		5. 齒擦音幹			6. h-語幹		
		a. su-dṛṣ- > -dṛk “容貌の美しい”			a. madhu-lih- > -liṭ “蜜を舐める”		
		b. viś- f. > viṭ “部族”			b. go-duh- > -dhuk “牛乳を搾る”		
		c. brahma-dviṣ- > -dviṭ “バラモンを憎む”					
		d. dadhṛṣ- > dadhṛk “大胆な”					
		男性形	女性形	中中性形	男性形	女性形	中中性形
单	主格	sudṛk		sudṛk	madhuliṭ		madhuliṭ
	呼格						
数	对格	sudṛsam		madhuliham			
	具格	sudṛsā			madhulihā		
	与格	sudṛśe			madhulihe		
	奪格	sudṛśaḥ			madhulihāḥ		
	属格						
	位格	sudṛśi			madhulihī		
	双	主格					
呼格		sudṛsau		sudṛśī		madhulihau madhulihī	
对格							
具格		sudṛgbhyām			madhulidbhyām		
与格							
奪格							
属格		sudṛśoḥ			madhulihōḥ		
複	主格						
	呼格	sudṛśaḥ		sudṛśī		madhulihāḥ madhulihī	
	对格						
	具格	sudṛgbhiḥ			madhulidbhiḥ		
	与格	sudṛgbhyaḥ			madhulidbhyaḥ		
	奪格						
	属数	sudṛśām			madhulihām		
位格	sudṛkṣu			madhuliṭṣu			

		7 r-語幹	8. as-, is- us-語幹	
		a. dvār- f. > dvāḥ “扉” b. gir- f. > gīḥ “部族”	a. su-manas- > su-manaḥ “好意ある” b. bṛhaj-jyotis- > bṛhaj-jyotiḥ “盛んに輝く” c. dīrgh-āyus- > dīrgh-āyuḥ “長生の”	
		女性名詞	男性形	女性形
				中性形
单	主格	gīḥ	sumanāḥ	sumanaḥ
	呼格		sumanaḥ	
	对格	giram	sumanasam	
	具格	girā	sumamasā	
	与格	gire	sumanase	
	奪格	giraḥ	sumanasahaḥ	
	属格			
	位格	giri	sumanasi	
双	主格			
	呼格	girau	sumanasau	sumanasī
	对格			
	具格		sumanobhyām	
	与格	gīrbhyām	sumanobhyām	
	奪格			
	属格	giroḥ	sumanasoḥ	
	位格			
複	主格			
	呼格	giraḥ	sumanasahaḥ	sumanāṁhi
	对格			
	具格	gīrbhiḥ	sumanobhiḥ	
	与格	gīrbhyaḥ	sumanobhyaḥ	
	奪格			
	属数	girām	sumanasām	
	位格	gīrṣu	sumanaḥsu /sumanassu	

2.2.3 <多語幹名詞の変化>

■2.2.3.1 多語幹名詞の一覧

	2 語幹				3 語幹			
			弱語幹	強語幹		弱語幹	中語幹	強語幹
at-	at-	mat-	vat-	at-	ant-			
an-					an-	man-	van-	n- a- ān-
in-	in-	min-	vin-	i-	in-			
as-	yas-			īyas-	īyāms-	vas-	us-	vat- vāms-
ac-						vac-	ūc-/īc-	ac- añc-

■2.2.3.2 2 語幹名詞

2.2.3.2.1 2 語幹名詞 強語幹と弱語幹の標準的分布

		男性形		女性形 (i-語幹名詞に準じて作る)		中性形	
		語幹	語尾	語幹	語尾	語幹	語尾
単	主格	<強>	-s		-ī		-
	呼格	<強>	-		-i		-
	対格	<強>	-am		-īm		-
	具格		-ā		-yā		-ā
	与格		-e		-yai		-e
	奪格		-as		-yās		-as
	属格		-as		-yās		-as
	位格		-i		-yām		-i
双	主格	<強>	-au		-yau		-ī
	呼格	<強>	-au		-yau		-ī
	対格	<強>	-au		-yau		-ī
	具格		-bhyām		-ībhyām		-bhyām
	与格		-bhyām		-ībhyām		-bhyām
	奪格		-bhyām		-ībhyām		-bhyām
	属格		-os		-yos		-os
	位格		-os		-yos		-os
複	主格	<強>	-as		-yas	<強>	-i
	呼格	<強>	-as		-yas	<強>	-i
	対格		-as		-īs	<強>	-i
	具格		-bhis		-ībhis		-bhis
	与格		-bhyas		-ībhyas		-bhyas
	奪格		-bhyas		-ībhyas		-bhyas
	属格		-ām		-inām		-ām
	位格		-su		-īṣu		-su

2.2.3.2.2 at-語幹名詞（女性形は i-語幹名詞に準じて作る）

1. -at 語幹 動詞の現在分詞・未来分詞
 - (a) bodhat(<bhud) 型, 第 1・4・10 類動詞, 第 2 次活用: 中・両・主呼対と全女性形で強語幹
 - (b) adat(<ad) 型, 第 2 種活用動詞 (第 2・3・5・7・8・9 類): 中・両・主呼対と全女性で弱語幹
 - (c) tudat(<tud) 型, 第 6 類と第 2 類の中で -ā で終わる動詞: 中・両・主呼格と全女性で弱語幹・強語幹両方可
 - (d) dadat(<dā) 型, 重複語幹: 中・複・主呼格で強語幹, 後は全て弱語幹
2. -mat/-vat 語幹 「～を持つ」: 男・単・主が^s -mān/-vān
3. mahat 「大きい」: mahat/mahānt

		1.c tudat- 「打っている」 強語幹: tudant- < tud					
		男性形		女性形 (i-語幹)		中性形	
		語幹		語幹		語幹	
単	主	強	tudan	弱 / 強	tudatī/ tudantī		tudat
	呼	強		弱 / 強	tudati/tudanti		
	対	強	tudantam	弱 / 強	tudatīm/tudantīm		
	具		tadata	弱 / 強	tudatyā/tudantyā		tudatā
	与		tudate	弱 / 強	tudatyai/tudantyai		tudate
	奪		tudataḥ	弱 / 強	tudatyāḥ/ tudantyāḥ		tudataḥ
	属		tudati	弱 / 強	tudatyām/ tudantyām		tudati
双	主	強	tudantau	弱 / 強	tudatyau/ tudantyan	弱 / 強	tudatī/ tudantī
	呼	強		弱 / 強	tudatyau	弱 / 強	tudantī
	対	強		弱 / 強		弱 / 強	
	具		*tuda d hyām	弱 / 強	tudatībhyām/ tudantībhyām		*tuda d hyām
	与			弱 / 強			
	奪			弱 / 強			
	属		tudatoḥ	弱 / 強	tudatyoḥ/ tudantyoḥ		tudatoḥ
複	主	強	tudantaḥ	弱 / 強	tudatyāḥ/ tudantyaḥ	強	tudanti
	呼	強		弱 / 強		強	
	対		tudataḥ	弱 / 強	tudatīḥ/tudantīḥ	強	
	具		*tuda d bhiḥ	弱 / 強	tudatībhiḥ/ tudantībhiḥ		*tuda d bhiḥ
	与		*tuda d bhyaḥ	弱 / 強	tudatībhyaḥ/ tudantībhyaḥ		*tuda d bhyaḥ
	奪			弱 / 強			
	属		tudatām	弱 / 強	tudatīnām/ tudantīnām		tudatām
位		tudatsu	弱 / 強	tudatīṣu/tudantīṣu		tudatsu	

2.2.3.2.3 in-語幹名詞（女性形は i-語幹名詞に準じて作る）

		balin-「力ある」 弱語幹:balī-					
		男性形		女性形 (i-語幹)		中性形	
		語幹		語幹		語幹	
単	主格		*baī	強	balinī		balī
	呼格	強	balin	強	balini	弱 / 強	balī/balin
	対格	強	balinam	強	balinīm	強	balī
	具格	強	balinā	強	balinyā	強	balinā
	与格	強	baline	強	balinyai	強	baline
	奪格	強	balinaḥ	強	balinyāḥ	強	balinaḥ
	属格	強	balinaḥ	強	balinyāḥ	強	balinaḥ
数	位格	強	balini	強	balinyām	強	balini
双	主格	強	balinau	強	balinyau	強	balinī
	呼格	強	balinau	強	balinyau	強	balinī
	対格	強	balinau	強	balinyau	強	balinī
	具格		balibhyām	強	balinībhyām		balibhyām
	与格		balibhyām	強	balinībhyām		balibhyām
	奪格		balibhyām	強	balinībhyām		balibhyām
	属格	強	balinoḥ	強	balinyoḥ	強	balinoḥ
数	位格	強	balinoḥ	強	balinyoḥ	強	balinoḥ
複	主格	強	balinaḥ	強	balinyaḥ	強	*baīni
	呼格	強	balinaḥ	強	balinyaḥ	強	*baīni
	対格	強	balinaḥ	強	balinīḥ	強	*baīni
	具格		balibhiḥ	強	balinībhiḥ		balibhiḥ
	与格		balibhyaḥ	強	balinībhyaḥ		balibhyaḥ
	奪格		balibhyaḥ	強	balinībhyaḥ		balibhyadh
	属格	強	balinām	強	balinīnām	強	balinām
数	位格		baīṣu	強	balinīṣu		baīṣu

2.2.3.2.4 yas-語幹名詞（女性形は i-語幹名詞に準じて作る） 形容詞比較級

		garīyas 「より重い」；強語幹: garīyāms- < gur-u-					
		男性形	女性形 (i-語幹)	中性形			
		語幹	語幹	語幹			
単	主格	強	garīyān		garīyasī		garīyaḥ
	呼格	強	garīyān		garīyasi		garīyaḥ
	対格	強	garīyāmsam		garīyasīm		garīyaḥ
	具格		garīyasā		garīyasyā		garīyasā
	与格		garīyase		garīyasyai		garīyase
	奪格		garīyasaḥ		garīyasyāḥ		garīyasaḥ
	属格		garīyasaḥ		garīyasyāḥ		garīyasaḥ
数	位格		garīyasi		garīyasyām		garīyasi
双	主格	強	garīyāmsau		garīyasyau		garīyasī
	呼格	強	garīyāmsau		garīyasyau		garīyasī
	対格	強	garīyāmsau		garīyasyau		garīyasī
	具格		*garīyobhyām		garīyasībhyām		*garīyobhyām
	与格		*garīyobhyām		garīyasībhyām		*garīyobhyām
	奪格		*garīyobhyām		garīyasībhyām		*garīyobhyām
	数	属格		garīyasoḥ		garīyasyoḥ	
位格		garīyasoḥ		garīyasyoḥ		garīyasoḥ	
複	主格	強	garīyāmsaḥ		garīyasyaḥ	強	garīyāmsi
	呼格	強	garīyāmsaḥ		garīyasyaḥ	強	garīyāmsi
	対格		garīyasaḥ		garīyasīḥ	強	garīyāmsi
	具格		*garīyobhiḥ		garīyasībhiḥ		*garīyobhiḥ
	与格		*garīyobhyaḥ		garīyasībhyaḥ		*garīyobhyaḥ
	奪格		*garīyobhyaḥ		garīyasībhyaḥ		*garīyobhyaḥ
	数	属格		garīyasām		garīyasīnām	
位格		garīyaḥsu/ garīyassu		garīyasīṣu		garīyaḥsu/ garīyassu	

■2.2.3.3 3 語幹名詞

2.2.3.3.1 3 語幹名詞 強語幹と中語幹と弱語幹の標準的分布

		男性形		女性形 (i-語幹名詞に準じて作る)		中性形		
		語幹	語尾	語幹	語尾	語幹	語尾	
単	主格	<強>	-s		-ī	<中>	-	
	呼格	<強>	-		-i	<中>	-	
	対格	<強>	-am		-īm	<中>	-	
	具格		-ā		-yā		-ā	
	与格		-e		-yai		-e	
	奪格		-as		-yās		-as	
	属格		-as		-yās		-as	
数	位格		-i		-yām		-i	
	双	主格	<強>	-au		-yau		-ī
		呼格	<強>	-au		-yau		-ī
		対格	<強>	-au		-yau		-ī
		具格	<中>	-bhyām		-ībhyām	<中>	-bhyām
		与格	<中>	-bhyām		-ībhyām	<中>	-bhyām
		奪格	<中>	-bhyām		-ībhyām	<中>	-bhyām
属格			-os		-yos		-os	
複	位格		-os		-yos		-os	
	数	主格	<強>	-as		-yas	<強>	-i
		呼格	<強>	-as		-yas	<強>	-i
		対格		-as		-īs	<強>	-i
		具格	<中>	-bhis		-ībhis	<中>	-bhis
		与格	<中>	-bhyas		-ībhyas	<中>	-bhyas
		奪格	<中>	-bhyas		-ībhyas	<中>	-bhyas
属格			-ām		-īnām		-ām	
位格	<中>	-su		-īṣu	<中>	-su		

2.2.3.3.2 an-語幹名詞

1. 標準型: 強語幹: -ān/-mān/-vān, 中語幹: -a(n)/-ma(n)/-va(n), 弱語幹: -n
2. -子音 +van/man 型: 弱語幹が^s-n ではなく -an になり, 実質 2 語幹変化
3. 特殊例
 - (a) path- m. 「道」: 強語幹: panthān, 中語幹: pathi, 弱語幹: path
 - (b) ahan n. 「日」: 強語幹: ahān, 中語幹: ahas, 弱語幹: ahn
 - (c) śvan m. 「犬」: 強語幹 śvān, 中語幹: śvan, 弱語幹: śun (サンブラ
サーラナ)
 - (d) yuvan 「若い」: 強語幹: yuvān, 中語幹: yuvan, 弱語幹: yūn (サンブ
ラサーラナ)
 - (e) -han 「～殺しの」: 強語幹: han, 中語幹: ha, 弱語幹: ghn

		pīvan 「肥えた」:					
		強語幹: pīvān, 中語幹: pīva(n), 弱語幹: pīvn, 女性形: pīvarī					
		男性形		(女性形は i-語幹)		中性形	
		語幹		語幹		語幹	
単	主格	強	pīvā		pīvarī		中 pīva
	呼格	強	pīvan		pīvari		中 pīva/pīvan
	対格	強	pīvānam		pīvarīm		中 pīva
	具格		pīvnā		pīvaryā		pīvnā
	与格		pīvne		pīvaryai		pīvne
	奪格		pīvnaḥ		pīvaryāḥ		pīvnaḥ
	属格		pīvnaḥ		pīvaryāḥ		pīvnaḥ
	位格		pīvni/pīvani		pīvaryām		pīvni/pīvani
双	主格	強	pīvānau		pīvaryau		pīvni/pīvani
	呼格	強	pīvānau		pīvaryau		pīvni/pīvani
	対格	強	pīvānau		pīvaryau		pīvni/pīvani
	具格	中	pīvabhyām		pīvarībhyām	中	pīvabhyām
	与格	中	pīvabhyām		pīvarībhyām	中	pīvabhyām
	奪格	中	pīvabhyām		pīvarībhyām	中	pīvabhyām
	属格		pīvnoḥ		pīvaryoḥ		pīvnoḥ
	位格		pīvnoḥ		pīvaryoḥ		pīvnoḥ
複	主格	強	pīvānaḥ		pīvaryāḥ	強	pīvāni
	呼格	強	pīvānaḥ		pīvaryāḥ	強	pīvāni
	対格		pīvnaḥ		pīvariḥ	強	pīvāni
	具格	中	pīvabhiḥ		pīvarībhiḥ	中	pīvabhiḥ
	与格	中	pīvabhyaḥ		pīvarībhyaḥ	中	pīvabhyaḥ
	奪格	中	pīvabhyaḥ		pīvarībhyaḥ	中	pīvabhyaḥ
	属格		pīvnām		pīvarīnām		pīvnām
	位格	中	pīvasu		pīvariṣu	中	pīvasu

2.2.3.3.3 vas-語幹名詞（完了能動分詞）

1. 過去能動分詞との違いに注意！ kṛ- > 完了能動分詞: cakṛvas- vs. 過去能動分詞: kṛtavat-
2. 弱い完了語幹に-vas を付して作る:
kṛ- 「為す」: 完了強語幹: cakṛ, 完了弱語幹: cakṛ > 完了能動分詞 cakṛvas-
3. 弱い完了語幹が単音節の場合 -ivas を付すが, この -i- は弱語幹で消失する:
dā- 「与える」: 完了強語幹: dadā-, 完了弱語幹: dad- > 完了能動分詞 dadivas-, 強語幹: dadivāms-, 中語幹: dadivat-, 弱語幹: dadus-
4. vid- 「知る」は完了形において語根重複を行わないので上の規則から外れる:
vid- > 完了能動分詞: vidvas-, 強語幹: vidvāms-, 中語幹: vidvat-, 弱語幹: vidus-

		cakṛvas- 「為し終えた」:					
		強語幹:cakṛvāms-, 中語幹:cakṛvat-, 弱語幹:cakrus- < kṛ-					
		男性形		女性形 (i-語幹)		中性形	
		語幹		語幹		語幹	
単	主格	強	cakṛvān		cakruṣī	中	cakṛvat
	呼格	強	cakṛvan		cakruṣi	中	cakṛvat
	对格	強	cakṛvāmsam		cakruṣīm	中	cakṛvat
	具格		cakruṣā		cakruṣyā		cakruṣā
	与格		cakruṣe		cakruṣyai		cakruṣe
	奪格		cakruṣaḥ		cakruṣyāḥ		cakruṣaḥ
	属格		cakruṣaḥ		cakruṣyāḥ		cakruṣaḥ
	位格		cakruṣi		cakruṣyām		cakruṣi
双	主格	強	cakṛvāmsau		cakruṣyau		cakruṣī
	呼格	強	cakṛvāmsau		cakruṣyau		cakruṣī
	对格	強	cakṛvāmsau		cakruṣyau		cakruṣī
	具格	中	cakṛva db hyām		cakruṣībhyām	中	cakṛva db hyām
	与格	中	cakṛva db hyām		cakruṣībhyām	中	cakṛva db hyām
	奪格	中	cakṛva db hyām		cakruṣībhyām	中	cakṛva db hyām
	属格		cakruṣoḥ		cakruṣyoḥ		cakruṣoḥ
	位格		cakruṣoḥ		cakruṣyoḥ		cakruṣoḥ
複	主格	強	cakṛvāmsaḥ		cakruṣyaḥ	強	cakṛvāmsi
	呼格	強	cakṛvāmsaḥ		cakruṣyadh	強	cakṛvāmsi
	对格		cakruṣaḥ		cakruṣiḥ	強	cakṛvāmsi
	具格	中	cakṛva db hiḥ		cakruṣībhiḥ	中	cakṛva db hiḥ
	与格	中	cakṛva db hyaḥ		cakruṣībhyaḥ	中	cakṛva db hyaḥ
	奪格	中	cakṛva db hyaḥ		cakruṣībhyaḥ	中	cakṛva db hyaḥ
	属格		cakruṣām		cakruṣinām		cakruṣām
	位格	中	cakṛvatsu		cakruṣīṣu	中	cakṛvatsu

2.2.3.3.4 ac-語幹名詞（方向を表す）

1. āc-型: 2 語幹, 強語幹: āñc, 弱語幹: āc: prāc- 「前の, 東の」, avāc- 「下の, 南の」
2. ac-型: 3 語幹
 - (a) īc 型: 強語幹:añc, 中語幹: ac, 弱語幹:īc: pratyac- 「後の, 西の」, udac- 「上の, 北の」
 - (b) ūc 型: 強語幹:añc, 中語幹: ac, 弱語幹:ūc: anvac- 「次の」, viṣvac(viśvac)- 「普遍の」
 - (c) aśc 型: 強語幹:añc, 中語幹: ac, 弱語幹:aśc: tiryac- 「水平の」

		pratyac- 「後の, 西の」:					
		強語幹: pratyāñc-, 中語幹:pratyac-, 弱語幹:pratic-					
		男性形		女性形 (ī-語幹)		中性形	
		語幹		語幹		語幹	
単	主格	強	pratyāñ		praticī	中	pratyak
	呼格	強	pratyāñ		praticī	中	pratyak
	対格	強	pratyāñcam		praticīm	中	pratyak
	具格		praticā		praticyā		praticā
	与格		pratīce		praticyai		pratīce
	奪格		pratīcaḥ		praticyaḥ		pratīcaḥ
	属格		pratīcaḥ		praticyaḥ		pratīcaḥ
数	位格		praticī		praticyām		praticī
双	主格	強	pratyāñcau		praticyau		praticī
	呼格	強	pratyāñcau		praticyau		praticī
	対格	強	pratyāñcau		praticyau		praticī
	具格	中	pratyagbhyām		pratībhyām	中	pratyagbhyām
	与格	中	pratyagbhyām		pratībhyām	中	pratyagbhyām
	奪格	中	pratyagbhyām		pratībhyām	中	pratyagbhyām
	数	属格		pratīcoḥ		praticyoḥ	
位格		pratīcoḥ		praticyoḥ		pratīcoḥ	
複	主格	強	pratyāñcaḥ		praticyaḥ	強	pratyāñci
	呼格	強	pratyāñcaḥ		praticyaḥ	強	pratyāñci
	対格		pratīcaḥ		pratīciḥ	強	pratyāñci
	具格	中	pratyagbhiḥ		pratīcbhiḥ	中	pratyagbhiḥ
	与格	中	pratyagbhyaḥ		pratīcbhyaḥ	中	pratyagbhyaḥ
	奪格	中	pratyagbhyaḥ		pratīcbhyaḥ	中	pratyagbhyaḥ
	数	属格		praticām		praticīnām	
位格	中	pratyakṣu		praticīṣu	中	pratyakṣu	

2.3 母音幹名詞の変化

2.3.1 a-/ā-語幹

1. a-語幹名詞は男性と中性，ā-語幹名詞は女性。
2. またこの2つの変化タイプを合わせて形容詞を形成する。
3. ラテン語の第1・第2変化形容詞にあたる。
4. 下の形容詞の変化表で，変化語尾をまとめて示す。
5. サンスクリット語の名詞変化関係の文法用語もまとめて示しておく。

a-語幹・男性, a-語幹・中性, ā-語幹・女性の例：

		a-/ā-語幹: kanta-/ā- 「愛された」		
		男性形 puṃliṅgam	中性形 napuṃsakaliṅgam	女性形 strīliṅgam
単 数 ekavacanam	主格 prathamā	kāntaḥ	kāntam	kāntā
	呼格 sambhodanā		kānta	kānte
	対格 dvitīyā		kāntam	kāntām
	具格 tṛtīyā		kāntena	kāntayā
	与格 caturthī		kāntāya	kāntāyai
	奪格 pañcamī		kāntāt	kāntāyaḥ
	属格 ṣaṣṭhī		kāntasya	
	位格 saptamī		kānte	kāntāyām
双 数 dvivacanam	主格	kāntau	kānte	
	呼格			
	対格			
	具格	kāntābhyām		
	与格			
	奪格			
	属格	kāntyoh		
	位格			
複 数 bahuvacanam	主格	kāntāḥ	kāntāni	kāntāḥ
	呼格			
	対格	kāntān		
	具格		kāntaiḥ	kāntābhiḥ
	与格		kāntebhyaḥ	kāntābhyaḥ
	奪格			
	属格	kāntānām		
	位格		kānteṣu	kāntāsu

2.3.2 i-語幹/u-語幹

特徴:

1. 単数・奪格の-au は不規則形である.
2. 中性は語幹末に n を挿入する.
3. 男性・女性の一部に i-語幹ではなく, ai-語幹が現れる

注意:

1. 全ての性の形を例示するのに都合が良いので, 形容詞で例示するが, 形容詞の特例がある.
2. 中性は単数の与格・奪格・属格・位格と, 双数の属格・位格で男性形を取ることにも出来る.
3. 女性はこの表で示したように u-語幹から作ることも出来るが, ū-語幹からも, ī-語幹からも作ることが出来る. 1つの形容詞が3種で現れる事がある:
tanu- 「細い」 f.tanu-, tanū, tanvī-

例外:

1. pati- m 「主, 夫」; 単数具格 patyā, 与格 patye, 奪格・属格 patyuh, 位格 patyau; ただし複合語の基底語としては ali-と同様の変化
2. sakhi- 「友」: 単数主格 sakhā, 対格 sakhāyam, 具格 sakhyā, 与格 sakhye, 奪格・属格 sakhyuh, 位格 sakhyau; 双数 sakhāyau, sakhibhyām, sakhyoh; 複数主格 sakhāyah

		i-語幹: śuci- 「清い」			u-語幹: mṛdu- 「柔らかい」			
		男性形	女性形	中性形	男性形	女性形	中性形	
单	主格	śuciḥ		śuci	mṛduḥ		mṛdu	
	呼格	śuce			mṛdo			
	对格	śucim			mṛdum			
	具格	śucinā	śucyā	śucinā	mṛdunā	mṛdvā	mṛdunā	
	与格	śucaye	śucaye/ śucyai	śucine/ śucaye	mṛdave	mṛdave/ mṛdvai	mṛdune/ mṛdave	
	奪格	śuceḥ	śuceḥ/ śucyāḥ	śucinaḥ/ śuceḥ	mṛdoḥ	mṛdoḥ/ mṛdvāḥ	mṛdunaḥ/ mṛdoḥ	
数	属格			śucini/ śucayā			mṛduni/ mṛdau	
	位格	śucayā	śucayā/ śucyām		śucini/ śucayā	mṛdau		mṛdau/ mṛdvām
双	主格	śucī		śucinī	mṛdū		mṛdunī	
	呼格	śucī			mṛdū			
	对格	śucī			mṛdū			
	具格	śucibhyām			mṛdubhyām			
	与格	śucibhyām			mṛdubhyām			
数	奪格	śucibhyām			mṛdubhyām			
	属格	śucyoḥ		śucinoḥ/ śucyoḥ	mṛdvoḥ		mṛdunoḥ/ mṛdvoḥ	
複	位格	śucyoḥ		śucinoḥ/ śucyoḥ	mṛdvoḥ		mṛdunoḥ/ mṛdvoḥ	
	主格	śucayaḥ		śucīni	mṛdavaḥ		mṛdūni	
	呼格	śucayaḥ			mṛdavaḥ			
	数	对格	śucīn	śucīḥ	śucīni	mṛdūn	mṛdūḥ	mṛdūni
		具格	śucibhiḥ			mṛdubhiḥ		
		与格	śucibhyaḥ			mṛdubhyaḥ		
奪格		śucibhyaḥ			mṛdubhyaḥ			
属格		śucīnām			mṛdūnām			
位格	śuciṣu			mṛduṣu				

2.3.3 ī-語幹／ū-語幹（女性名詞）

1. 多くの名詞が女性形をこの多音節型変化タイプ (nadī-) で形成する。deva-「神」 > devī-
2. 子音幹形容詞の女性形はこの多音節型変化タイプ (nadī-) で作られる。
3. 単数主格で -īs となるものがある。lakṣmīs「幸運」
4. 単音節型変化タイプも、主格対格以外では、多音節型変化タイプと同じ語尾を取ることがある。

		ī-/ū- 語幹 単音節		ī-/ū- 語幹 多音節	
		dhī 「思慮」 f	bhū 「地」 f	nadī 「河」 f	vadhū 「女」 f
単	主格	dhīḥ	bhūḥ	nadī	vadhūḥ
	呼格			nadi	vadhu
	対格	dhiyam	bhūvam	nadīm	vadhūm
	具格	dhiyā	bhuvā	nadyā	vadvhā
	与格	dhiye	bhuve	nadyai	vadvhai
	奪格	dhiyaḥ	bhuvaḥ	nadyāḥ	vadvhāḥ
数	属格				
	位格	dhiyi	bhuvi	nadyām	vadvhām
双	主格				
	呼格	dhiyau	bhuvau	nadyau	vadvhau
	対格				
	具格				
	与格	dhībhyām	bhūbhyām	nadībhyām	vadhūbhyām
数	奪格				
	属格	dhiyoḥ	bhuvoḥ	nadyoḥ	vadhvoḥ
複	位格				
	主格	dhiyaḥ	bhuvaḥ	nadyaḥ	vadvhaḥ
	呼格				
	対格			nadīḥ	vadhūḥ
	具格	dhībhiḥ	bhūbhiḥ	nadībhiḥ	vadhūbhiḥ
	与格	dhībyaḥ	bhūbhyaḥ	nadībhyaḥ	vadhūbhyaḥ
数	奪格				
	属数	dhiyām	bhuvām	nadīnām	vadhūnām
	位格	dhiṣu	bhūṣu	nadīṣu	vadhūṣu

2.3.4 tr-語幹

1. 動作者名詞 (nomina agentis) : 動詞語幹 +tr, 中性形はまれ.
2. 親族名詞 : 全て男性形と同じ変化. 動作者名詞に比べて, 複数主格が^s-tar-となる: dātārah vs mātarah
3. 女性の親族名詞は複数対格が^s-r̥hとなる. mātṛ- 「母」 f > pl.ac. mātṛh

1. 動作者名詞: dātṛ 「与える者」:							
強語幹: -tar/-tār, 中語幹: -ṭr, 弱語幹: -tr							
男性形			女性形 (ī-語幹)		中性形		
語幹			語幹		語幹		
単	主格	強	dātā		dātri	中	dātṛ
	呼格	強	dātāḥ		dātri	中	dātāḥ/dātṛ
	対格	強	dātāram		dātrīm	中	dātṛ
	具格		dātrā		dātryā		dātrā/dātrṇā
	与格		dātre		dātryai		dātre/dātrṇe
	奪格		dātuḥ		dātryaḥ		dātuḥ/dātrṇaḥ
	属格		dātuḥ		dātryaḥ		dātuḥ/dātrṇaḥ
数	位格		dātari		dātryām		dātari/dātṛṇi
双	主格	強	dātārau		dātryau		dātrṇī
	呼格	強	dātārau		dātryau		dātrṇī
	対格	強	dātārau		dātryau		dātrṇī
	具格	中	dātr̥bhyām		dātr̥bhyām	中	dātr̥bhyām
	与格	中	dātr̥bhyām		dātr̥bhyām	中	dātr̥bhyām
	奪格	中	dātr̥bhyām		dātr̥bhyām	中	dātr̥bhyām
	数	属格		dātroh		dātryoḥ	
数	位格		dātroh		dātryoḥ		dātroh/dātr̥noḥ
複	主格	強	dātāraḥ		dātryaḥ	強	dātṛṇi
	呼格	強	dātāraḥ		dātryaḥ	強	dātṛṇi
	対格		dātṛṇ		dātr̥ḥ	強	dātṛṇi
	具格	中	dātr̥bhiḥ		dātr̥bhiḥ	中	dātr̥bhiḥ
	与格	中	dātr̥bhyaḥ		dātr̥bhyaḥ	中	dātr̥bhyaḥ
	奪格	中	dātr̥bhyaḥ		dātr̥bhyaḥ	中	dātr̥bhyaḥ
	数	属格		dātr̥ṇām		dātr̥ṇām	
数	位格	中	dātr̥ṣu		dātr̥ṣu	中	dātr̥ṣu

2.3.5 二重母音語幹

数は少ない。次の2語がよく現れる。

		go- m, f 「牛」	nau- 「舟」 f
単	主格	gauḥ	nauḥ
	呼格		
	対格	gām	nāvam
	具格	gavā	nāvā
	与格	gave	nāve
	奪格	goḥ	nāvaḥ
	属格		
数	位格	gavi	nāvi
	主格		
	呼格	gāvau	nāvau
	対格		
	具格		
	与格	gobhyām	naubhyām
	奪格		
数	属格	gavoḥ	nāvoḥ
	位格		
	主格	gāvaḥ	nāvaḥ
	呼格		
	対格	gāḥ	
	具格	gobhiḥ	naubhiḥ
	与格	gobyāḥ	naubhyaḥ
数	奪格		
	属数	gavām	nāvām
	位格	goṣu	nauṣu

2.4 補足

印欧諸語と比較したサンスクリット語の名詞変化：

o 語幹名詞「狼」の変化例：

	印欧祖語	サンスク リット語	古代ギリ シャ語	ラテン語	古高 ドイツ語
単数 主格	* $\text{ulq}\bar{\text{m}}\text{os}$	vṛkas	λύκος	lupus	wolf
呼格	* $\text{ulq}\bar{\text{m}}\text{e}$	vṛka	λύκε	lupe	wolf
対格	* $\text{ulq}\bar{\text{m}}\text{om}$	vṛkam	λύκον	lupum	wolf
属格	* $\text{ulq}\bar{\text{m}}\text{os}$	vṛkasya	λύκοιο*	lupi	wolfes
奪格	* $\text{ulq}\bar{\text{m}}\text{ōd}$	vṛkāt	—	lupō(d)	—
与格	* $\text{ulq}\bar{\text{m}}\text{ōi}$	vṛkāya	λύκωι*	lupō(i)	wolfe
具格	* $\text{ulq}\bar{\text{m}}\text{ō}$	vṛkēna	—	—	wolfu
位格	* $\text{ulq}\bar{\text{m}}\text{oi}$	vṛkē	—	—	—

* λύκοιο > λύκου

** λύκωι > λύκω

2.5 形容詞の比較変化

1. 比較変化語尾が2種類あり、意味上の区別は明確ではない

2. tara/tama

- 比較級: -tara (>2.2.1. a-/ā-語幹変化)
- 最上級: -tama (>2.2.1. a-/ā-語幹変化)
 - priya-「いとしい」: priyatara-/ priyatama-
 - śuci-「清い」: śucitara-/ śucitama-
 - guru-「重い」: gurutara-/ gurutama-
 - dhanin-「富んだ」: dhanitara-/dhanitama-
- 2語幹変化形容詞では弱語幹に, 3語幹変化形容詞では中語幹に付く
 - dhīmat-「賢い」(2語幹): dhīmattara-/dhīmattama-
 - prāc-「東方の」(2語幹): prāktara-/prāktama-
 - vidvas-「知識ある」(3語幹): vidvattara-/vidvattama-
 - pratyac-「西方の」(3語幹): pratyaktara-/pratyaktama-
- 語幹と tara/tama の間には外連声の規則が適応される
- 名詞に付加されることもある
 - vīra-「勇士」: vīratara-/vīratama-; suhṛd-「友人」: suhṛttara-/suhṛttama-
- tama は序数詞を作る場合にも用いる > 2.5

3. īyas/iṣṭa

- 比較級:(>2.1.2.2.4. yas-語幹変化)
- 最上級: -iṣṭa (>2.2.1. a-/ā-語幹変化)
- 多くは -u, -ra で終わる形容詞の, 語根要素に付ける
 - aṇu-「細い」: aṇīyas-/aṇiṣṭha-; paṭu-「鋭い」: paṭīyas-/paṭiṣṭa-
- 幹母音は guṇa 化することが多い uru-「広い」: varīyas-/variṣṭa-
- 原級の持っていた接尾辞は, 比較語尾を付ける際に失われる
 - kṣipra-「速い」: kṣepīyas-/ kṣepiṣṭa-
- 語根が長母音で終わる場合に, 比較級は-yas となる
 - bhūri-「多い」: bhūyas-/ bhūyiṣṭa-
- 原級を持たない場合がある
 - kaniyas-「より若い」; nedīyas-「より近い」; varṣīyas-「より老いた」

- *īyas/iṣṭa* の後に更に *tara/tama* を付して強調形を作ることがある
guru-「重い」: *garīyas-/gariṣṭa-* > *garīyastara/gariṣṭatama*
4. 一般の形容詞と同様, 中性単数対格形は副詞として用いられる
 5. *tarān/tamām* を付して副詞を作る
 6. 比較の対象は奪格で表す
matir eva balād garīyasī 「思慮こそ腕力より重要である」
 7. 最上級の範囲は属格または位格で表す
manuṣyeṣu kṣatriyaḥ śūratamaḥ 「人間の中でクシャトリア (武人) が最も勇敢である」

2.6 代名詞

2.6.1 注意点

- 母音幹変化に子音幹変化が一部混入した特別の変化タイプをとる.
- 呼格はない
- 中単主・対で -t, 男女単位で -min, 男複主で -e 等, 特殊な変化形を示す.
- 古代から特別な「語幹」を指定されている.

2.6.2 人称代名詞 (1 人称・2 人称)

		1 人称 mad-/asmad-	2 人称 tvad-/yuṣmad-
单数	主格	aham	tvam
	对格	mām (mā)	tvām (tvā)
	具格	mayā	tvayā
	与格	mahyam (me)	tubhyam (te)
	奪格	mat	tvat
	属格	mama (me)	tava (te)
	位格	mayi	tvayi
双数	主格	āvām	yuvām
	对格	āvām (nau)	yuvām (vām)
	具格	āvābhyām	yuvābhyām
	与格	āvābhyām (nau)	yuvābhyām (vam)
	奪格	āvābhyām	yuvābhyām
	属格	āvayoḥ (nau)	yuvayoḥ (vām)
	位格	āvayoḥ	yuvayoḥ
複数	主格	vayam	yūyam
	对格	asmān (nas)	yuṣmān (vas)
	具格	asmābhiḥ	yuṣmābhiḥ
	与格	asmabhyam (nas)	yuṣmabhyam (vas)
	奪格	asmat	yuṣmat
	属格	asmākam	yuṣmākam (vas)
	位格	asmāsu	yuṣmāsu

その他に：

1. bhavān (bhavat-/ 女 bhavatī-) (変化 > 2.1.2.2.2 -at 語幹変化) : 2 人称敬称. 動詞は 3 人称を用いる.
2. ātman- (変化 > 2.1.2.3.2 -an 語幹変化) : 主に男性単数形で, 再帰代名詞として用いる.

2.6.3 指示代名詞

■2.6.3.1 tad-/etad-/enad- 「彼, 彼女, それ」

		tad-			etad- (< e + tad-)			enad-		
		男	中	女	男	中	女	男	中	女
单数	主格	sa(h)	tat	sā	eṣa(h)	etat	eṣā	-	-	-
	对格	tam		tām	etam		etām	enam	enat	enām
	具格	tena		tayā	以下同様に			enena		enayā
	与格	tasmai	tasyai					-	-	-
	奪格	tasmāt	tasyāḥ					-	-	-
	属格	tasya	tasyāḥ					-	-	-
	位格	tasmin	tasyām					-	-	-
双数	主格	tau	te					-	-	-
	对格							enau	ene	
	具格	tābhyām						-	-	-
	与格							-	-	-
	奪格							-	-	-
	属格	tayoh						enayoh		
	位格									
複数	主格	te	tāni	tāḥ				-	-	-
	对格	tān	tāni	tāḥ				enān	enāni	enāḥ
	具格	taiḥ	taiḥ	tābhiḥ				-	-	-
	与格	tebhyaḥ	tābhyaḥ					-	-	-
	奪格							-	-	-
	属格	teṣām	tāṣām					-	-	-
	位格	teṣu	tāṣu					-	-	-

■2.6.3.2 idam- 「これ」 / adas- 「あれ」

		idam- 「これ」			adas- 「あれ」		
		男	中	女	男	中	女
単数	主格	ayam	idam	iyam	asau	adas	asau
	対格	imam	idam	imām	amum	adas	amūm
	具格	anena	anena	anayā	amunā	amunā	amuyā
	与格	asmai	asmai	asyai	amuṣmai	amuṣmai	amuṣyai
	奪格	asmāt	asmāt	asyāḥ	amuṣmāt	amuṣmāt	amuṣyaḥ
	属格	asya	asya	asyāḥ	amuṣya	amuṣya	amuṣyaḥ
	位格	asmin	asmin	asyām	amuṣmin	amuṣmin	amuṣyām
双数	主格	imau	ime	ime	amū	amū	amū
	対格	imau	ime	ime	amū	amū	amū
	具格	ābhyām	ābhyām	ābhyām	amūbhyām	amūbhyām	amūbhyām
	与格	ābhyām	ābhyām	ābhyām	amūbhyām	amūbhyām	amūbhyām
	奪格	ābhyām	ābhyām	ābhyām	amūbhyām	amūbhyām	amūbhyām
	属格	anayoḥ	anayoḥ	anayoḥ	amyoḥ	amyoḥ	amyoḥ
	位格	anayoḥ	anayoḥ	anayoḥ	amyoḥ	amyoḥ	amyoḥ
複数	主格	ime	imāni	imāḥ	amī	amūni	amūḥ
	対格	imān	imāni	imāḥ	amūn	amūni	amūḥ
	具格	ebhiḥ	ebhiḥ	ābhiḥ	amībhiḥ	amībhiḥ	amūbhiḥ
	与格	ebhyaḥ	ebhyaḥ	ābhyaḥ	amībhyaḥ	amībhyaḥ	amūbhyaḥ
	奪格	ebhyaḥ	ebhyaḥ	ābhyaḥ	amībhyaḥ	amībhyaḥ	amūbhyaḥ
	属格	eṣām	eṣām	āsām	amīṣām	amīṣām	amūṣām
	位格	āsu	āsu	āsu	amīṣu	amīṣu	amūṣu

2.6.4 關係代名詞・疑問代名詞・不定代名詞

		關係代名詞 yad-			疑問代名詞 kim-(ka-)		
		男	中	女	男	中	女
单数	主格	yaḥ	yat	yā	kaḥ	kim	kā
	对格	yam	yat	yām	kam	kim	kām
	具格	yena	yena	yayā	kena	kena	kayā
	与格	yasmai	yasmai	yasyai	kasmai	kasmai	kasyai
	奪格	yasmāt	yasmāt	yasyāḥ	kasmāt	kasmāt	kasyāḥ
	属格	yasya	yasya	yasyāḥ	kasya	kasya	kasyāḥ
	位格	yasmin	yasmin	yasyām	kasmin	kasmin	kasyām
双数	主格	yau	ye	ye	kau	ke	ke
	对格	yau	ye	ye	kau	ke	ke
	具格	yābhyām	yābhyām	yābhyām	kābhyām	kābhyām	kābhyām
	与格	yābhyām	yābhyām	yābhyām	kābhyām	kābhyām	kābhyām
	奪格	yābhyām	yābhyām	yābhyām	kābhyām	kābhyām	kābhyām
	属格	yayoḥ	yayoḥ	yayoḥ	kayoḥ	kayoḥ	kayoḥ
	位格	yayoḥ	yayoḥ	yayoḥ	kayoḥ	kayoḥ	kayoḥ
複数	主格	ye	yāni	yāḥ	ke	kāni	kāḥ
	对格	yān	yāni	yāḥ	kān	kāni	kāḥ
	具格	yaiḥ	yaiḥ	yābhiḥ	kaiḥ	kaiḥ	kābhiḥ
	与格	yebhyaḥ	yebhyaḥ	yābhyaḥ	kebhyaḥ	kebhyaḥ	kābhyaḥ
	奪格	yebhyaḥ	yebhyaḥ	yābhyaḥ	kebhyaḥ	kebhyaḥ	kābhyaḥ
	属格	yeṣām	yeṣām	yāsām	keṣām	keṣām	kāsām
	位格	yeṣu	yeṣu	yāsu	keṣu	keṣu	kāsu

1. 関係代名詞: yad-: tad- (>2.4.2.1.) と同様に変化する (代名詞変化)
2. 疑問代名詞: kim-(ka-): tad- (>2.4.2.1.) と同様に変化する (代名詞変化)
3. 不定代名詞: 疑問代名詞 kim-(ka-) に、接尾辞 cit/cana/api を付ける: kaścīt, kaścāna, ko 'pi
4. その他の不定代名詞:
 - (a) 完全に代名詞変化をするもの: anya- 「他の」, aynatara- 「二つのうちのどちらか」, itara- 「他の」, ekatama- 「多数の中の一つ」
 - (b) 中性・単数・主格・対格で a-語幹の-am 語尾をとるもの: sarva- 「全ての」, viśva- 「全ての」, eka- 「一つの」 (>数詞) , ekatara 「二つのうちの一つ」 , ubhaya- (f. ī) 「両方の」 (双数変化なし)
 - (c) 中性・単数・主格・対格で a-語幹の-am 語尾をとり、男性・中性・奪格・位格と男性・複数・主格で代名詞変化と a-語幹変化との両方が可能なもの: pūrva- 「前の、東の」, avara- 「後の、西の」, uttara- 「上の、北の」, dakṣiṇa- 「右の、南の」, adhara- 「下の」, antara- 「内の」, para- 「次の、他の」, apara- 「他の、後の」, sva- 「自分の」
 - (d) 男性・複数・主格においてのみ、代名詞変化と a-語幹変化の両方が可能なもの: prathama- 「第1の」, carama- 「最後の」, divitaya- 「2重の、2倍の」, dvaya- 「2重の、2倍の」, alpa- 「少しの」, ardha- 「半分の」, katipaya- 「若干の」 (女性形はā-/ī-両方可)
 - (e) 男性・女性・中性・単数・与格・奪格・位格において、代名詞変化と a-語幹変化が可能なもの: dvitīya- 「第2の」, tṛtīya- 「第3の」
 - (f) 男性・複数・主格において代名詞変化と a-語幹変化が可能なもの: nema- 「半分の」

		4.a. anya- 「他の」			4.b.sarva- 「全ての」		
		男	中	女	男	中	女
单数	主格	anyaḥ	anyat	anyā	sarvaḥ	sarvam	sarvā
	对格	anyam		anyām	sarvam		sarvām
	具格	anyena		anyayā	sarveṇa		sarvayā
	与格	anyasmai		anyasyai	sarvasmai		sarvasyai
	奪格	anyasmāt		anyasyāḥ	sarvasmāt		sarvasyāḥ
	属格	anyasya		anyasyāḥ	sarvasya		sarvasyāḥ
	位格	anyasmin		anyasyām	sarvasmin		sarvasyām
双数	主格	anyau	anye		sarvau	sarve	
	对格						
	具格	anyābhyām			sarvābhyām		
	与格						
	奪格						
	属格	anyayoḥ			sarvayoḥ		
複数	主格	anye	anyāni	anyāḥ	sarve	sarvāni	sarvāḥ
	对格	anyān			sarvān		
	具格	anyaiḥ		anyābhiḥ	sarvaiḥ		sarvābhiḥ
	与格	anyebhyaḥ		anyābhyaḥ	sarvebhyaḥ		sarvābhyaḥ
	奪格						
	属格	anyeṣām		anyāsām	sarveṣām		sarvāsām
	位格	anyeṣu		anyāsu	sarveṣu		sarvāsu

2.7 数詞

2.7.1 基数詞

■2.7.1.1 基数詞の形態

1 eka	11 ekādaśa	21 ekaviṃśati	
2 dva	12 dvādaśa	22 dvāviṃśati	
3 tri	13 trayodaśa	23 trayoviṃśati	30 trimśat
4 catur	14 caturdaśa	24 caturviṃśati	40 catvāriṃśat
5 pañca	15 pañcadaśa	25 pañcaviṃśati	50 pañcāśat
6 ṣaṣ	16 ṣoḍaśa	26 ṣaḍviṃśati	60 ṣaṣṭi
7 sapta	17 saptadaśa	27 saptaviṃśati	70 saptati
8 aṣṭa	18 aṣṭadaśa	28 aṣṭaviṃśati	80 aṣṭi
9 nava	19 navadaśa/ekonaviṃśati	29 navaviṃśati/ūnatriṃśat	90 navati
10 daśa	20 viṃśati		

	+2 dvā/dvi	+3 trayas/tri	+8 aṣṭā/aṣṭa
10	12 dvādaśa	13 trayodaśa	18 aṣṭadaśa
20	22 dvāviṃśati	23 trayoviṃśati	28 aṣṭaviṃśati
30	32 dvātriṃśat	33 trayastrimśat	38 aṣṭātriṃśat
40	42 dvā-/dvicatvāriṃśat	43 trayas-/tricatvāriṃśat	48 aṣṭā-/aṣṭacatvāriṃśat
50	52 dvā-/dvipañcāśat	53 trayas-/tripañcāśat	58 aṣṭā-/aṣṭapañcāśat
60	62 dvā-/dviṣaṣṭi	63 trayas-/triṣaṣṭi	68 aṣṭā-/aṣṭaṣaṣṭi
70	72 dvā-/dvisaptati	73 trayas-/trisaptati	78 aṣṭā-/aṣṭasaptati
80	82 dvyaṣṭi	83 tryaṣṭi	88 aṣṭāṣṭi
90	92 dvā-/dvinavati	93 trayo-/trinavati	98 aṣṭā-/aṣṭanavati

100	śatam	101	ekaśatam/ekādhikaṃ śatam
200	dve śatam/dviśatam	102	dviśatam/dvyadhikaṃ śatam
300	trīṇi śatāni/triśatam	103	triśatam/tryadhikaṃ śatam
1000	daśa śatāni/sahasram		
10000	ayuta		
100000	lakṣa		

■2.7.1.2 基数詞の変化

- 1,2,3,4 は形容詞として、性と格に従って変化する
- 5,6,7,8,9,10 は形容詞であるが、性を区別せず、格に従って変化する
- 11-19 も形容詞であるが、性を区別せず、格に従って変化する（構造上 10 の変化形と同じ）
- 20, 30, 40, 50, 60, 70, 80, 90 は単数の女性名詞である（構造上 20-99 が全て女性名詞）
 - 20, 60, 70, 80, 90 は、i-語幹女性名詞として変化する (>2.2.2)
 - 30, 40, 50 は、t-語幹名詞として変化する (>2.1.1 の 1.)
- 100, 1000 等は、a-語幹の単数中性名詞として変化する (>2.2.1.)

		1: eka-		
		男	中	女
单数	主格	ekaḥ	ekam	ekā
	对格	ekam	ekam	ekām
	具格	ekena	ekena	ekayā
	与格	ekasmai	ekasmai	ekasyai
	奪格	ekasmāt	ekasmāt	ekasyāḥ
	属格	ekasya	ekasya	ekasyāḥ
	位格	ekasmin	ekasmin	ekasyām
複数	主格	eke	ekāni	ekāḥ
	对格	ekān	ekāni	ekāḥ
	具格	ekaiḥ	ekaiḥ	ekābhiḥ
	与格	ekebhyaḥ	ekebhyaḥ	ekābhyaḥ
	奪格	ekebhyaḥ	ekebhyaḥ	ekābhyaḥ
	属格	ekeṣām	ekeṣām	ekāṣām
	位格	ekeṣu	ekeṣu	ekāsu

	2: dvi-		3: tri-			4: catur-		
	男	中女	男	中	女	男	中	女
主格	dvau	dve	trayaḥ	trīni	tisraḥ	catvāraḥ	catvāri	catasraḥ
对格			trīn			caturaḥ		
具格	dvābhyām		tribhiḥ	tisṛbhiḥ		caturbhiḥ		catasṛbhiḥ
与格			tribhyaḥ	tisṛbhyaḥ		caturbhyaḥ		catasṛbhyaḥ
奪格								
属格	dvayoḥ		trayāṅām	tisṛṅām		caturṅām		catasṛṅām
位格			triṣu	tisṛṣu		caturṣu		catasṛṣu

	5:	6:	7:	8:	9:	10:
	pañca(n)-	ṣaṣ-	saptan(n)-	aṣṭa(n)-	nava(n)-	daśa(n)-
主 対	pañca	ṣaṣ	sapta	aṣṭa/aṣṭau	nava	daśa
具	pañcabhiḥ	ṣaḍbhiḥ	saptabhiḥ	aṣṭabhiḥ/ aṣṭābhiḥ	navabhiḥ	daśabhiḥ
与 奪	pañcabhyaḥ	ṣaḍbhyaḥ	saptabhyaḥ	aṣṭabhyaḥ/ aṣṭābhyaḥ	navabhyaḥ	daśabhyaḥ
属	pañcānām	ṣaṣṇām	saptānām	aṣṭānām	navānām	daśānām
位	pañcasu	ṣaṣṣu	saptasu	aṣṭasu/aṣṭāsu	navasu	daśasu

	20:	30:	40:	50:	60:
	vimśati-	triṃśat	catvāriṃśat-	pañcāśat-	ṣaṣṭi-
主 対	vimśatiḥ	triṃśat	catvāriṃśat	pañcāśat	ṣaṣṭiḥ
具	vimśatyā	triṃśatā	catvāriṃśatā	pañcāśatā	ṣaṣṭyā
与 奪	vimśataye/ vimśatyai	triṃśate	catvāriṃśate	pañcāśate	ṣaṣṭaye/ ṣaṣṭyai
属	vimśateḥ/ vimśatyāḥ	triṃśataḥ	catvāriṃśataḥ	pañcāśataḥ	ṣaṣṭeḥ/ ṣaṣṭyāḥ
位	vimśatau/ vimśatyām	triṃśati	catvāriṃśati	pañcāśati	ṣaṣṭau/ ṣaṣṭyām

	70: saptati-	80: aṣīti-	90: navati-	100: śata-	1000: sahasra-
主	saptatiḥ	aṣītiḥ	navatiḥ	śatam	sahasram
対	saptatim	aṣītim	navatim		
具	saptatyā	aṣītyā	navatyā	śatena	sahasrena
与	saptataye/ saptatyai	aṣītaye/ aṣītāya	navataye/ navatyai	śatāya	sahasrāya
奪	saptateḥ/	aṣīteḥ/	navateḥ/	śatāt	sahasrāt
属	saptatyāḥ	aṣītyāḥ	navatyāḥ	śatasya	sahasrasya
位	saptatau/ saptatyām	aṣītau/ aṣītyām	navatiau/ navatyām	śate	sahasre

2.7.2 序数詞

1	prathama-, f.-ā	11.	ekādaśa-	60.	ṣaṣṭitama-, f. -ī
2	dvitīya-, f. -ā	12.	dvādaśa-	61.	ekaṣaṣṭ(itam)a-
3	trītiya-, f.-ā	13.	trayodaśa-	70.	saptatitama-, f. -ī
4	caturtha-, f.-ī/ caturī(i)ya-, f.-ā	19.	navadaśa-/ ekonaviṃśa(titam)a-	71.	ekasaptat(itam)a
5	pañcama-, f. -ī	20.	viṃśa-/viṃśatitama-, f. -ī	80.	aśītītama-, f. -ī
6	ṣaṣṭha-, f. -ī	21.	ekaviṃśa(titama)-	81	ekāśīt(itam)a-
7	saptama-, f. -ī	30.	triṃśa-/triṃśattama-, f. -ī	90.	navatitama-, f. -ī
8	aṣṭama-, f. -ī	40.	catvāriṃśa-/ catvāriṃśattma-, f. -ī	91.	ekānavat(itam)a-
9	navama-, f. -ī	50.	pañcāśa-/ pañcāśattama-, f. -ī	100.	śatatama-, f. -ī
10	daśama-, f. -ī			1000.	sahasratama-, f. -ī

		1.: prathama-, f. -ā			5.: pañcama-, f. -ī		
		男	中	女	男	中	女
单 数	主	prathamāḥ	pratha-	prathamā	pañcamāḥ	pañca-	pañcamī
	对	prathamam	mam	prathamām	pañcamam	mam	pañcamīm
	具	prathamena		prathamayā	pañcamena		pañcamyā
	与	prathamāya		prathamāyai	pañcamāya		pañcamyai
	奪	prathamāt		prathamāyāḥ	pañcamāt		pañcamyaḥ
	属	prathamasya			pañcamasya		
	位	prathame		prathamāyām	pañcame		pañcamyām
双 数	主	prathamau	pratha-		pañcamau	pañca-	pañcamyau
	对					me	
	具	prathamābhyām			pañcamābhyām		pañcamī- bhyām
	与						
	奪						
属	prathamāyoḥ			pañcamayoḥ		pañcamyoḥ	
複 数	主	prathamāḥ	pratha-	prathamāḥ	pañcamāḥ	pañca-	pañcamyaḥ
	对	prathamān	māni		pañcamān	māni	pañcamīḥ
	具	prathamaiḥ		prathamābhiḥ	pañcamaiḥ		pañcamībhiḥ
	与	prathamebhyaḥ		prathamā- bhyaḥ	pañcamebhyaḥ		pañcamī- bhyaḥ
	奪						
	属	prathamānām			pañcamānām		pañcamīnām
位	prathameṣu		prathamāsu	pañcameṣu		pañcamīṣu	

2.8 複合名詞

サンスクリット語では複合名詞（形容詞）が多用され、長大な複合語が用いられることもまれではない。

pravara|narapati|mukūṭa|maṇi|marīci|nicaya|rañjita|caraṇa|yugalaḥ
 （目前にひざまづく他の）高貴な王達の王冠の宝石の輝きに染まった二本の足（を持つ）

複合語は古来以下の6つに一応分類して説明されるが、とても足りるものではなく、文脈と慣例と背景からその都度解釈するしかない。

文法的には2.7.5. bahuvrīhi「所有複合語」が特に重要である。

2.8.1 dvandva 並列複合語

1. 2個以上の成分が等位に置かれている。分解すれば、並列接続詞 (and) で結ぶことが出来る。
2. それぞれの成分は双数・複数の形を取る。
 hastyaśvau「一頭の象と一頭の馬」
 hastyaśvāḥ「数頭の象と数頭の馬」
 sutabhārye「息子と妻」
3. 並列複合語全体は最後の成分の性を取る。
4. 単数中性の2つの抽象名詞から成ることこともある。
5. 形容詞の並列複合語も存在する。vr̥ttapīna-「丸くて太った」

2.8.2 tatpuruṣa 限定複合語

1. 前成分によって、後成分が限定される。
2. 様々な格関係が代表される。
 pṛthivī-pāla-「大地の守護者」（属格 単数）
 aśva-kovida-「馬術に巧みな」（属格 複数）
 svarga-gati-「天国に上ること」（対格）
 deva-gupta-「神によって守られた」（具格）

svarga-patita-「天国から落ちた」(奪格)

3. 短い母音で終わる語根は末尾に t が付け加えられる. sarava-ji-t-「全てを征服する」
4. -ā で終わる語根は, しばしば短くなる. veda-jñā- (< jñā-)「ヴェーダを知っている」
5. 鼻音幹名詞は, しばしば a-語幹に移行する. grāma-ja- (< jan-)「村で生まれた」

2.8.3 karmadhāraya 同格限定複合語

1. 前成分が後成分の同格・一部・属性として後成分を限定する.
2. 次の4種がある:
 - (a) 形容詞(副詞) + 名詞: nīlotpala-「青い(nīla-)蓮華(utpala-)」
 - (b) 名詞 + 形容詞: megha-śyāma-「雲のように黒い」
 - (c) 名詞 + 名詞: rājarṣi-「王(rāja-)である聖仙(ṛṣi-)」
 - (d) 形容詞 + 形容詞: dṛṣṭa-naṣṭa-「見るやいなや消え去った」; pīta-rakta-「黄色を帯びて赤い」

2.8.4 dvigu 数限定複合語

karmadhāraya(同格限定複合語)のうち, 前成分が数詞であるもの.
tri-loka-「三界」

2.8.5 bahuvrīhi 所有複合語

1. 「～を持つ」という意味の形容詞になる.
2. 後成分は必ず名詞になる.
3. 前成分は:
 - (a) 形容詞(分詞, 数詞): bahu-vrīhi-「多くの米を持つ(人)」; gatāyus-「寿命が尽きた(人)」
 - (b) 名詞: tapo-dhana-「苦行を財産とする(人)」
 - (c) 不変化詞: dur-bala-「弱い力の(人)」; a-bala-「非力な(人)」; sa-bhārya-

「妻を伴った (人)」

4. ka が付くことがある. sāgnika- (< sa-agni-ka-) 「アグニを伴った (人)」
5. 肉体の一部が後成分になることがある. daṃḍa-pāṇi- 「手に杖を持つ (人)」
6. 前成分に動詞語幹, 後成分に manas-/kāma- で, 「～しようと思っている, 望んでいる」という形容詞を作る. vaktumanas- 「言おうと思っている (人)」; tyaktukāma- 「捨てることを望んでいる (人)」

2.8.6 avyayībhāva 副詞的複合語

1. 不変化で, 副詞として用いられる.
2. 前成分は不変化詞, 後成分は名詞で中性・単数・対格の語尾 (-am) を取る.
 - sa-kopam 「怒って」
 - praty-aham 「毎日」
 - yatheccham 「欲するがままに」

3 動詞変化

3.1 総論

3.1.1 動詞定形の構造

例: abharam < bhṛ- 「私は運びつつあった」				
—	a-	bhar-	a-	m
	過去形の 加音	グナ化した 語根	テーマ母音	第2次能動・ 1人称単数
語			幹	
接頭辞		語根	接尾辞	語尾
前綴り	活用 接頭辞			
なし 前置詞 等	なし 加音 重音	母音交替の 有無	なし テーマ母音 時制語幹形成音 2次活用形成音頭	第1次（現在）能動 中動 第2次（過去）能動 中動 完了 能動 中動
連声法 →	連声法 →	連声法 →	連声法 →	

3.1.2 活用カテゴリー

- 人称: 1人称 uttamapuruṣa, 2人称 madhyapuruṣa, 3人称 prathamapuruṣa
- 数: 単数 ekavacana, 双数 dvivacana, 複数 bahuvacana
- 態: 能動態 Parasmaipada, 中動態 (受動態) Ātmanepada
- 時称 kāla: 現在 vartamānaḥ, 過去 anadynatanabhūtaḥ, 完了 parokṣabhūtaḥ, アオリスト bhūtaḥ, 未来 bhaviṣyat, (複合未来 anadyatanabhaviṣyat)
- 法 artha: 命令 ājñā, 願望 vidhiḥ, (祈願 āśiḥ, 条件 saṅketaḥ)
- 第2次活用: 受動活用 kartṛvācyanam, 使役活用 nijantam, 意欲活用 san-nanta, 強意活用 yañanta/yañluganta

3.1.3 動詞変化について — 特に「中動態」について

1. 印欧語の動詞は法・時称・態・人称・数の5つのカテゴリーに従って変化する。
2. サンスクリットの場合「組織」で法と時称がまとめられている。
3. 態は能動態 active, Parasmaipada と中動態 medium, Ātmanepada が対立していることに注意せよ。
4. 中動態とは本来「再帰動詞 reflexive」を表す。「反射態」と呼ばれることもある。サンスクリット語の用語は「他人への語尾」と「自分への語尾」という意味である。
5. 受動態 passive は本来中動態の一部であり、後から独立した。中動態は文脈によって、能動的意味にも受動的意味にも使用される。また動詞によっては中動態に使用が限定されるものもある。
6. 人称は3つ、数も3つあるので、最終的に9個の変化形が並んだ表が出来る。
7. 9個の変化形の表が入った「法・時称・態」のケースが大量に規則的に並ぶのが動詞変化の全体である。

3.1.4 結合母音 i

現在組織以外の時称・法（一般時制と呼ぶことも）において、語幹と y 以外の子音で始まる語尾の間に i を差し挟むことがある。

1. aniṭ語幹: 結合母音 i を挟まないタイプ.
2. veṭ語幹: 結合母音 i を挟んでも挟まなくても任意なタイプ.
3. seṭ語幹: 結合母音 i を挟むタイプ.

3.1.5 加音 (augment)

1. 過去を表す接頭辞 a-. 過去とアオリストの語幹形成に用いる.
tud-「打つ」: a-tudat (過去), a-tautsīt (アオリスト)
2. 語根が母音で始まる時には、その母音は加音 a- と融合して Vṛddhi 化する.
aṭ-「歩き回る」>ātat (過去)
ās-「座る」 >āsta (過去)
īkṣ-「見る」 >aikṣata (過去)
ukṣ-「潤す」 >aukṣat (過去)
ṛṣ-「行く」 >ārṣat (過去)
edh-「栄える」>aidhata (過去)
3. 語根が前綴り（派生接頭辞）を伴う複合動詞である時は、加音 a- は基本（単純）動詞に付き、前綴りと基本動詞の間に挟まれる形になる。
ud-pat-「飛び上がる」 >ud-a-patat (過去)
sam-ud-pat-「共に飛び上がる」>sam-ud-a-patat (過去)
4. 動詞前綴りと加音との sandhi に注意せよ。
pra-vṛt-「起こる」 > (pra-avartata) > prāvartata
5. 叙事詩で加音が省略されることがある。
6. 加音を省略したアオリストと否定詞 mā で禁止命令を表す。

3.1.6 重音 (reduplication)

1. 完了組織や第3類動詞の活用において、語根の一部が重複される。これを重音と呼ぶ。

- dā-「与える」(3類) > da-dāti (現在)
 pat-「落ちる」 > a-pa-ptat (アオリスト)
 pat-「落ちる」 > pa-pāta (完了)

2. 子音の扱いについて

- (a) 語根が単子音で始まる場合は、その子音を用いる。
 tud-「打つ」 > tu-toda (完了)
 pad-「行く」 > pa-pāda (完了)
- (b) 単子音が有気音の場合は、それに対応する無気音に変える。
 dhā-「置く」(3類) > da-dhāti (現在)
- (c) 単子音が軟口蓋音の場合は、それに対応する硬口蓋音に変える。
 kṛ-「為す」 > ca-kāra (完了)
 gam-「行く」 > ja-gāma (完了)
 khan-「掘る」 > ca-khāna (完了)
- (d) h は j で重複する。
 hu-「供物を捧げる」(3類) > ju-hoti (現在)
- (e) 語根が複数の子音で始まる時には、最初の子音を用いる。
 śru-「聞く」 > śu-śrāva (完了)
 bhrāj-「輝く」 > ba-bhrāja (完了)
 kram-「歩く」 > ca-krāma (完了)
 hrī-「恥じる」 > ji-hrāya (完了)
- (f) しかし歯擦音 + 無声子音の場合には後者を用いる。
 stambh-「支える」 > ta-stambha (完了)
 sthā-「立つ」 > ta-sthau (完了)
 skand-「跳ぶ」 > ca-skanda (完了)

3. 母音の扱いについて

- (a) 重音音節の母音は、多くの場合 a が用いられる。
 gai-「歌う」 > ja-gau (完了) so-「結ぶ」 > sa-sau (完了) kṛ-「為す」 > cakāra (完了)
- (b) 語根が i, u の系列の母音を含むときには、重音音節の母音もこれに準ずることがある。ki-「買う」 > ci-krāya (完了) tud-「打つ」 > tu-toda (完了)

3.1.7 活用組織の一覧

例： nī- 「導く」

第1次活用	第2次活用			
	受動活用	使役活用	意欲活用	強意活用
現在組織 現在語幹: ne-(nay-) 1. 直説法現在 nay-a-ti 2. 直説法過去 a-nay-a-t 3. 願望法 nay-e-t 4. 命令法 nay-a-tu 5. 現在分詞 nay-a-nt- (能動) nay-a-māna- (中動)	nī-ya-	nāy-aya-	ni-nī-ṣa-	ne-nī-ya-
	nī-ya-te	nāy-aya-ti a-nāy-aya-t nāy-aye-t nāy-aya-tu	ni-nī-ṣa-ti	ni-nī-ya-te
未来組織 未来語幹: ne-ṣy- 1. 直説法未来 ne-ṣy-a-ti 2. 条件法 a-ne-ṣy-a-t 3. 未来分詞 ne- ṣy-a-nt- (能動) ne-ṣy-a-māna- (中動)		nāy-ayi-ṣy-a-ti a-nāy-ayi-ṣy-a-t		
アオリスト組織 アオリスト語幹: a-nai-ṣ- 1. 直説法完了 a-nai-ṣ-ī-t 2. 祈願法 (まれ) nī-yā-t		a-nī-n-aya-t		

第 1 次活用	第 2 次活用			
	受動活用	使役活用	意欲活用	強意活用
完了組織 完了語幹: ni-nāy 1. 直説法完了 ni-nāy-a 2. 完了分詞 ni-nī-vas- (能動) ni-ny-āna- (中動)				
複合時制 (特殊語幹 + 機能動詞) 1. 複合未来 netā 2. 複合完了 nay-ām āsa/cakre 等		nāy-ay-ām āsa		
準動詞 (語根) 1. 受動過去分詞 nī-ta- 2. 能動過去分詞 nī-ta-vant- 3. 絶対詞 nī-tvā 4. 不定詞 ne-tum 5. 動形容詞 ne-ya ne-tavya nay-anīya				

※第 3 次活用：

受動活用のそのまた使役活用・意欲活用・強意活用 nāyyate 「(彼は) 導かされる」

使役活用のそのまた受動活用・意欲活用・強意活用 nināyayiṣati 「(彼は) 導かせたがる」等

※現在組織以外の活用組織を「一般時制」と呼ぶ。

3.2 現在組織

3.2.1 現在組織における人称語尾一覧

※第1種活用 (thematic conjugation) ・第2種活用 (athematic conjugation) の違いについては >3.2.2.

		単数			双数			複数		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3
第1次語尾 (現在)										
能動	第1種	mi	si	ti	vas	thas	tas	mas	tha	nti
	第2種									anti/ ati(3類)
中動	第1種	e	se	te	vahē	ethe	ete	mahe	dhve	n-te
	第2種					āthe	āte			ate
第2次語尾 (過去)										
能動	第1種	m	s	t	va	tam	tām	ma	ta	n
	第2種	am								an/ ur(3類)
中動	第1種	i	thās	ta	vahi	ethām	etām	mahi	dhvam	nta
	第2種					āthām	ātām			ata
命令法										
能動	第1種	āni	—	tu	āva	tam	tām	āma	ta	ntu
	第2種		dhi/hi							antu
中動	第1種	ai	sva	tām	āvahai	ethām	etām	āmahai	dhvam	ntām
	第2種					āthām	ātām			atām

	単数			双数			複数			
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	
願望法										
能	第1種	eyam	es	et	eva	etam	etām	ema	eta	eyur
動	第2種	yām	yās	yāt	yāva	yātam	yātām	yāma	yāta	yur
中	第1種	eya	ethās	eta	evahi	eyāthām	eyātām	emahi	edhvam	eran
動	第2種	īya	īthās	īta	īvahi	īyāthām	īyātām	īmahi	īdhivam	īran

3.2.2 補足

印欧諸語とサンスクリット語の現在動詞変化の比較：

「運ぶ」という動詞の、直説法・現在・能動態の活用例：

	印欧祖語	サンスクリット語	古代ギリシャ語	ラテン語	ゴート語
単1	*bherō	bharāmi*	φέρω	fero	baíra
2	*bheresi	bharasi	φέρεις	fers	bairis
数3	*bhereti	bharati	φέρει	fert	baíriþ
双1	*bherous	bharāvas	—	—	baírōs
2	*bheretes	bharathas	φέρετον	—	baírats
数3	*bheretes	bharatas	φέρετον	—	—
複1	*bheromes	bharāmas	φέρομες	ferimus	baíram
2	*bherete	bharatha	φέρετε	fertis	baíriþ
数3	*bheronti	bharanti	φέροντι**	ferunt	baírand

* 1人称単数-mi はギリシャ語の μ 動詞に現れている。

** $\phi\acute{\epsilon}\rho\omicron\nu\tau\iota > \phi\acute{\epsilon}\rho\omicron\upsilon\sigma\iota$.

3.2.3 現在組織における活用タイプ一覧

活用タイプ	代表例	語幹形成	語幹形成例
第1種（母音幹活用 thematic conjugation）			
第1類 bhvādigāṇa	Bhū「なる」	グナ化語根 + a	bhū > bhava, budh > bodha「悟る」
第4類 divādigāṇa	Div「遊ぶ」	弱階梯語根 + ya	div > divya, nah > nahya「結ぶ」
第6類 tudādigāṇa	Tud「打つ」	弱階梯語根 + a	tud > tuda
第10類 curādigāṇa	Cur「盗む」	グナ化語根 + aya	cur > coraya, kam > kāmaya「欲する」
第2種（子音幹活用 athematic conjugation）			
第2類 adādigāṇa	Ad「食べる」	語根	ad > admi, lih > lehmi「舐める」
第3類 juhotyādigāṇa	Hu「聖別する」	重音 + 語根	hu > juhomi
第5類 svādigāṇa	Su「塞ぐ」	語根 + no/nu	su > sunomi
第7類 rudhādigāṇa	Rudh「遮る」	語根末子音 の前に na/n	rudh > ruṇadhmi
第8類 tanādigāṇa	Tan「伸ばす」	語根 + o/u	tan > tanomi, kṛ > karomi「行こう」
第9類 kriyādigāṇa	Krī「買う」	語根 + nā/nī	krī > krīṇāmi

2つの活用タイプにまたがるものがある:

- bhṛ-「運ぶ」 第1類 bharati, 第3類 bibharti
- dhū-「振る」 第5類 dhunoti, 第9類 dhunāti 等

3.2.4 現在組織 第1種活用

第1類 グナ化語幹 +a: bhū- > bhava- 「成る」

特殊例:

1. jīv タイプ: 長母音 + 子音 (jīv- 「生きる」) や、母音 + 複数字音 (nind- 「非難する」) の場合は、グナ化しない。
2. guh タイプ: 長母音化する。guh- > gūha- 「隠す」
3. cha タイプ: cha を付ける。gam- > gaccha- 「行く」
4. pā タイプ: 重音を付ける。pā- > pība- 「飲む」
5. daṃś タイプ: 鼻音を失う。daṃś- > daśa- 「咬む」
6. dhmā タイプ: a が加わる。dhmā- > dhama- 「吹く」
7. ハイブリッド・タイプ: dṛś- > paśya- 「見る」

第4類 弱語幹 +ya: tuṣ- > tuṣya- 「満足する」

特殊例:

1. tam タイプ: 長母音化する。tam- > tāmya- 「弱る」
2. bhraṃś タイプ: 鼻音を失う。bhraṃś- > bhraśya-

第6類 弱語幹 +a: tud- > tuda- 「打つ」

特殊例:

1. mṛ タイプ: 語根末のṛ は ri となる。mṛ- > mriya- 「死ぬ」
2. kṛt タイプ: 語根末子音の前に鼻音を挿入する。kṛt- > kṛnta- 「切る」
3. cha タイプ: cha を付ける。iś- > iccha- 「欲する」
4. サンブラサーラナ・タイプ: prach- > pṛccha- 「問う」

第 10 類 グナ化語幹 +aya: cur- > coraya- 「盗む」

特殊例:

1. cint タイプ: 長母音或いは複子音の前の母音は変化なし. cint- > cintaya- 「考える」
2. pat タイプ: 長母音化する: pat- > pātaya- 「落ちる」
3. hi タイプ: ヴリッディ化する: hi- > hāya- 「押しやる」
4. p 使役タイプ: -paya を付加する: dā- > dāpaya- 「与える」
5. y タイプ: -yaya を付加する: pā- > pāyaya- 「飲む」

第1類 bhū-「成る」			単数	双数	複数
現在	能動	1人称	bhavāmi	bhavāvaḥ	bhavāmaḥ
		2人称	bhavasi	bhavathaḥ	bhavatha
		3人称	bhavati	bhavataḥ	bhavanti
	中動	1人称	bhave	bhavāvahe	bhavāmahe
		2人称	bhavase	bhavethe	bhavadhve
		3人称	bhavate	bhavete	bhavante

第1類 bhū-「成る」			単数	双数	複数
過去	能動	1人称	abhavam	abhavāva	abhavāma
		2人称	abhavaḥ	abhavatam	abhavata
		3人称	abhavat	abhavatām	abhavan
	中動	1人称	abhave	abhavāvahi	abhavāmahi
		2人称	abhavathāḥ	abhavethām	abhavadhvam
		3人称	abhavata	abhavetām	abhavanta

第1類 bhū-「成る」			単数	双数	複数
希求法	能動	1人称	bhaveyam	bhaveva	bhavema
		2人称	bhareḥ	bhabetam	bhaveta
		3人称	bharet	bhabetām	bhaveyuḥ
	中動	1人称	bhaveya	bhavevahi	bhavemahi
		2人称	bhavethāḥ	bhaveyāthām	bhavedhvam
		3人称	bhaveta	bhaveyātām	bhaveran

第1類 bhū-「成る」			単数	双数	複数
命令法	能動	1人称	bhavāṇi	bhavāva	bhavāma
		2人称	bhava	bhavatam	bhavata
		3人称	bhavatu	bhavatām	bhavantu
	中動	1人称	bhavai	bhavāvahai	bhavāmahai
		2人称	bhasvasva	bhavethām	bhavadhvam
		3人称	bhavatām	bhabetām	bhavantām

3.2.5 現在組織 第2種活用

■3.2.5.1 第2種活用における強語幹・弱語幹の分布

		現在		過去		命令法		願望法	
		能動	中動	能動	中動	能動	中動	能動	中動
単 数	1	強		強		強	強		
	2	強		強					
	3	強		強		強			
双 数	1					強	強		
	2								
	3								
複 数	1					強	強		
	2								
	3								

■3.2.5.2 第2種活用における語尾変化の特例

1. 幾つかの語尾が第1種活用とは違う
2. 命令法・能動・単数・2人称の語尾は-dhi, 母音の後で-hi
3. 過去・能動・単数・2人称の -s と, 3人称の -t は脱落し, 語幹末子音が絶対語末の制限を受け, 結果として二つは同じ形になる。

■3.2.5.3 第 2 類動詞

3.2.5.3.1 第 2 類動詞活用表

第 2 類 dviṣ 「憎む」強語幹: dveṣ, 弱語幹: dviṣ					
			单数	双数	複数
現在	能動	1 人称	強 dveṣmi	dviṣvaḥ	dviṣmaḥ
		2 人称	強 dvekṣi	dviṣthaḥ	dvṣtha
		3 人称	強 dveṣti	dviṣtaḥ	dviṣanti
	中動	1 人称	dviṣe	dviṣvahe	dviṣmahe
		2 人称	dviḥṣe	dviṣāthe	dviḍḍhve
		3 人称	dviṣte	dviṣāte	dviṣate

第 2 類 dviṣ 「憎む」強語幹: dveṣ, 弱語幹: dviṣ					
			单数	双数	複数
過去	能動	1 人称	強 adveṣam	adviṣva	adviṣma
		2 人称	強 adveṣ	adviṣtam	adviṣta
		3 人称	強 adveṣ	adviṣtām	adviṣan
	中動	1 人称	adviṣi	adviṣvahi	adviṣmahi
		2 人称	adviṣthāḥ	adviṣāthām	adviḍḍhvam
		3 人称	adviṣta	adviṣātām	adviṣata

第 2 類 dviṣ 「憎む」強語幹: dveṣ, 弱語幹: dviṣ					
			单数	双数	複数
願望法	能動	1 人称	dviṣyām	dviṣyāva	dviṣyāma
		2 人称	dviṣyāḥ	dviṣyātām	dviṣyāta
		3 人称	dviṣyāt	dviṣyātām	dviṣyuh
	中動	1 人称	dviṣiya	dviṣivahi	dviṣimahi
		2 人称	dviṣithāḥ	dviṣiyāthām	dviṣidhvam
		3 人称	dviṣita	dviṣiyātām	dviṣiran

第2類 dviṣ 「憎む」強語幹: dveṣ, 弱語幹: dviṣ						
			単数	双数	複数	
命令法	能動	1人称	強 dveṣāni	強 dveṣāva	強 dveṣāma	
		2人称	dviḍḍhi	dviṣtam	dviṣta	
		3人称	強 dveṣtu	dviṣtām	dviṣantu	
	中動	1人称	強 dveṣai	強 dveṣāvahai	強 dveṣāmahai	
		2人称	dviḍḍva	dviṣāthām	dviḍḍhvam	
		3人称	dviṣtam	dviṣātām	dviṣātām	

3.2.5.3.2 第2類に属する重要動詞

as-「ある」: 強語幹:as-, 弱語幹:s-, *中動まれ

	現在		過去		命令法		願望法		
	能動	中動	能動	中動	能動	中動	能動	中動	
単	1	asmi	he	āsam	āsi	asāni	asai	syām	sīya
	2	asi	se	āsiḥ	āsthāḥ	edhi	sva	syāḥ	sīthāḥ
数	3	asti	ste	āsīt	āsta	astu	stām	syāt	sīta
双	1	svaḥ	svahe	āsva	āsvahi	asāva	asāvahai	syāva	sīvahi
	2	sthaḥ	sāthe	āstam	āsāthām	stam	sāthām	syātam	sīyāthām
数	3	staḥ	sāte	āstām	āsātām	stām	sātām	syātām	sīyātām
複	1	smaḥ	smahe	āsma	āsmahi	asāma	asāmahai	syāma	sīmahī
	2	stha	dhve	āsta	ādhvam	sta	dhvam	syāta	sīdhvam
数	3	santi	sate	āsan	āsata	santu	satām	syuḥ	sīran

i- 「行く」:

強語幹: e-

弱語幹: i(y)-

中動 adhi-i- 「学ぶ」

現在:adhīye

<adhi+iye

<adhi+i+e

過去:adhyaīyi

<adhi+aīyi

<adhi+a+i+yi

命令:adhyayai

<adhi+ayai

願望:adhīyīya

<adhi+i+yīya

<adhi+i+yīya

		単数		双数		複数	
現	能	1 強	emi		ivaḥ		imaḥ
	動	2 強	eṣi		ithaḥ		itha
	動	3 強	eti		itaḥ		yanti
在	中	1	adhīye		adhīvahe		adhīmahe
	動	2	adhīṣe		adhīyāthe		adhīdve
	動	3	adhīte		adhīyāte		adhīyate
過	能	1 強	āyam		aiva		aima
	動	2 強	aīḥ		iatam		aita
	動	3 強	ait		aitām		āyan
去	中	1	adhyaīyi		adhyavahi		adhyaimahi
	動	2	adhyaiṭhāḥ		adyaiyāthām		adhyaidhvam
	動	3	adhyaita		adhyaiyātām		adhyaiyata
命	能	1 強	ayāni	強	ayāva	強	ayāma
	動	2	ihi		itam		ita
	動	3 強	etu		itām		yantu
法	中	1 強	adhyayai	強	adhyayāvahai	強	adhyayāmahai
	動	2	adhīṣva		adhīyāthām		adhīdhvam
	動	3	adhīṭām		adhīyātām		adhīyatām
願	能	1	iyām		iyāva		iyāma
	動	2	iyāḥ		iyātam		iyāta
	動	3	iyāt		iyātām		iyuḥ
法	中	1	adhīyīya		adhīyivahi		adhīyimahi
	動	2	adhīyīthāḥ		adhīyīyāthām		adhīyīdhvam
	動	3	adhīyīta		adhīyīyātām		adhīyīran

特例

1. 子音で始まる語尾の前に *i* を差しはさむ: *rud-*「泣く」強語幹 *rod-*, 弱語幹 *rud-*; *an-*「呼吸する」, *švas-*「嘆息する」, *svap-*「眠る」

rud-「泣く」			単数	双数	複数
現在	能動	1 人称	rodimi	rudivaḥ	rudimaḥ
		2 人称	rodiṣi	rudithaḥ	ruditha
		3 人称	roditi	ruditaḥ	rudanti

2. 重音を伴い, 第 3 類と同じ変化をする (特別の語尾) : *jakṣ-*「食べる」強語幹と弱語幹の区別なし (*rud-*と同様に *i* を差しはさむ) , *cakāṣ-*「輝く」, *jāgr-*「目覚める」, *daridrā-*「貧しい」

jakṣ-「食べる」			単数	双数	複数
現在	能動	1 人称	jakṣimi	jakṣivaḥ	jakṣimaḥ
		2 人称	jakṣiṣi	jakṣithaḥ	jakṣitha
		3 人称	jakṣiti	jakṣitaḥ	jakṣati

3. 中動態の語尾 *se, sva, dhve, dhvam* の前に *i* を差しはさむ: *iś-*「支配する」強語幹と弱語幹の区別なし, *īd-*「称える」

iś-「支配する」			単数	双数	複数
現在	中動	1 人称	iśe	iśvahe	iśmahe
		2 人称	iśiṣe	iśāthe	iśīdhve
		3 人称	iṣte	iśāte	iśate

4. 強語幹において子音語尾の前に ī を差しはさむ:brū- 「言う」強語幹 bro-, 弱語幹 brū-

brū-「言う」		単数	双数	複数	
現在	能動	1 人称	bravīmi	brūvaḥ	brūmaḥ
		2 人称	bravīṣi	brūthaḥ	brūtha
		3 人称	bravīti	brūtaḥ	bruvanti

5. 強語幹が子音語尾の前で vṛddhi 化する:yu- 「結合する」強語幹 yau-, 弱語幹 yu-; stu- 「誉める」(子音語尾の前に i を差し込むこともある), 他-u で語根が終わる動詞

yu-「結合する」		単数	双数	複数	
現在	能動	1 人称	yaumi	yuvaḥ	yumaḥ
		2 人称	yauṣi	yuthaḥ	yutha
		3 人称	yauti	yutaḥ	yuvanti

6. -h で終わる語根で, 気音の移動に注意が必要: duh- 「乳を搾る」強語幹 doh-, 弱語幹 duh-, lih- 「舐める」強語幹 leh-, 弱語幹 lih-

duh 「乳を搾る」		単数	双数	複数	
現在	能動	1 人称	dohmi	duhvaḥ	duhmaḥ
		2 人称	dhokṣi	dugdhaḥ	dugdha
		3 人称	dogdhi	dugdhaḥ	duhanti

lih-「舐める」		単数	双数	複数	
現在	能動	1 人称	lehmi	lihvaḥ	lihmaḥ
		2 人称	lekṣi	liḍhaḥ	liḍha
		3 人称	leḍhi	liḍhaḥ	lihanti

7. その他：ad-「食べる」、ās-「座る」（中動で）、mrj-「拭く」、vac-「言う」強語幹と弱語幹の区別なし、3人称複数形の形なし、vid-「知る」、śās-「命令する」、han-「殺す」強語幹 han-, 弱語幹 ha-（m.v.y の前で han-, 母音の前で ghn-）

han-「殺す」		単数	双数	複数	
現在	能動	1 人称	hanmi	hanvaḥ	hanmaḥ
		2 人称	haṃsi	hathaḥ	hatha
		3 人称	hanti	hataḥ	ghnanti

vac-「言う」		単数	双数	複数	
現在	能動	1 人称	vacmi	vacvaḥ	vacmaḥ
		2 人称	vakṣi	vakthaḥ	vaktha
		3 人称	vakti	vaktaḥ	*****

■3.2.5.4 第3類動詞

3.2.5.4.1 第3類動詞活用表

重音, 特別の語尾 (現・能・3 複-ati <-anti, 過・能・3 複-uḥ <-an, 命・能・3 複-atu<-antu) を取る

第3類 hu-「供物を捧げる」強語幹: juho-, 弱語幹: juhu-					
			単数	双数	複数
現在	能動	1 人称	強 juhomi	juhuvaḥ	juhumaḥ
		2 人称	強 juhoṣi	juhuṭhaḥ	juhuṭha
		3 人称	強 juhoti	juhuṭaḥ	juhvati
	中動	1 人称	juhuve	juhuvahe	juhumahe
		2 人称	juhuṣe	juhvāthe	juhudhve
		3 人称	juhuṭe	juhvāte	juhvate

第3類 hu-「供物を捧げる」強語幹: juho-, 弱語幹: juhu-					
			単数	双数	複数
過去	能動	1 人称	強 ajuhavam	ajuhuva	ajuhuma
		2 人称	強 ajuhoḥ	ajuhutam	ajuhuta
		3 人称	強 ajuhot	ajuhutām	ajuhavuḥ
	中動	1 人称	ajuhvi	ajuhuvahi	ajuhumahi
		2 人称	ajuhuṭhāḥ	ajuhvāthām	ajuhudhvam
		3 人称	ajuhuṭa	ajuhvātām	ajuhvata

第3類 hu-「供物を捧げる」強語幹: juho-, 弱語幹: juhu-					
			単数	双数	複数
願望法	能動	1 人称	juhuyām	juhuyāva	juhuyāma
		2 人称	juhuyāḥ	juhuyātam	juhuyāta
		3 人称	juhuyāt	juhuyātām	juhuyuḥ
	中動	1 人称	juhvīya	juhvīvahi	juhvīmahi
		2 人称	juhvīthāḥ	juhvīyāthām	juhvīdhvam
		3 人称	juhvīta	juhvīyātām	juhvīran

第3類 hu-「供物を捧げる」強語幹: juho-, 弱語幹: juhu-								
			単数	双数		複数		
命令法	能動	1人称	強	juhavāni	強	juhavāva	強	juhavāma
		2人称		juhudhi		juhutam		juhuta
		3人称	強	juhotu		juhutām		juhvatu
	中動	1人称	強	juhavai	強	juhavāvahai	強	juhavāmahai
		2人称		juhuṣva		juhvāthām		juhudhvam
		3人称		juhutām		juhvātām		juhvatām

3.2.5.4.2 第3類に属する重要動詞

1. dā-「与える」

第3類 dā-「与える」強語幹: dadā-, 弱語幹: dad-					
			単数	双数	複数
現在	能動	1 人称	強 dadāmi	dadvaḥ	dadmaḥ
		2 人称	強 dadāsi	datthaḥ	dattha
		3 人称	強 dadāti	dattaḥ	dadati
	中動	1 人称	dade	dadvahe	dadmahe
		2 人称	datse	dadāthe	daddhve
		3 人称	datte	dadāte	dadate

第3類 dā-「与える」強語幹: dadā-, 弱語幹: dad-					
			単数	双数	複数
過去	能動	1 人称	強 adadām	adadva	adadma
		2 人称	強 adadāḥ	adattam	adatta
		3 人称	強 adadāt	adattām	adaduḥ
	中動	1 人称	adadi	adadvahi	adadmahi
		2 人称	adatthāḥ	adadāthām	adaddhvam
		3 人称	adatta	adadātām	adadata

第3類 dā-「与える」強語幹: dadā-, 弱語幹: dad-					
			単数	双数	複数
願望法	能動	1 人称	dadyām	dadyāva	dadyāma
		2 人称	dadyāḥ	dadyātam	dadyāta
		3 人称	dadyāt	dadyātām	dadyuḥ
	中動	1 人称	dadiya	dadivahi	dadimahi
		2 人称	dadiṭhāḥ	dadiyāthām	dadiḍhvam
		3 人称	dadīta	dadyīyātām	dadīran

第3類 dā-「与える」強語幹: dadā-, 弱語幹: dad-						
			単数	双数	複数	
命令法	能動	1 人称	強 dadāni	強 dadāva	強 dadāma	
		2 人称	dehi	dattam	datta	
		3 人称	強 dadātu	dattām	dadatu	
	中動	1 人称	強 dadai	強 dadāvahai	強 dadāmahai	
		2 人称	datsva	dadāthām	daddhvam	
		3 人称	dattām	dadātām	dadatām	

2. dhā-「置く」

気音の移動に注意！ dadh > dhad

第3類 dhā-「置く」強語幹: dadhā-, 弱語幹: dadh-						
			単数	双数	複数	
現在	能動	1 人称	強 dadhāmi	dadhvaḥ	dadhmaḥ	
		2 人称	強 dadhāsi	dhatthaḥ	dhattha	
		3 人称	強 dadhāti	dhattaḥ	dadhati	
	中動	1 人称	dadhe	dadhvahe	dadhmahe	
		2 人称	dhatse	dadhāthe	daddhve	
		3 人称	dhatte	dadāte	dadhate	

第3類 dhā-「置く」強語幹: dadhā-, 弱語幹: dadh-						
			単数	双数	複数	
過去	能動	1 人称	強 adadhām	adadhva	adadhma	
		2 人称	強 adadhāḥ	adhattam	adhatta	
		3 人称	強 adadhāt	adhattām	adadhuḥ	
	中動	1 人称	adadhi	adadhvahi	adadhmahi	
		2 人称	adhatthāḥ	adadhāthām	adhaddhvam	
		3 人称	adhatta	adadhātām	adadhata	

第3類 dhā-「置く」強語幹: dadhā-, 弱語幹: dadh-					
			単数	双数	複数
願望法	能動	1 人称	dadhyām	dadhyāva	dadhyāma
		2 人称	dadhyāḥ	dadhyātam	dadhyāta
		3 人称	dadhyāt	dadhyātām	dadhyuḥ
	中動	1 人称	dadhīya	dadhīvahi	dadhīmahi
		2 人称	dadhīthāḥ	dadhīyāthām	dadhīdhvam
		3 人称	dadhīta	dadhīyātām	dadhīran

第3類 dhā-「置く」強語幹: dadhā-, 弱語幹: dadh-					
			単数	双数	複数
命令法	能動	1 人称	強 dadhāni	強 dadhāva	強 dadhāma
		2 人称	dhehi	dhattam	dhatta
		3 人称	強 dadhātu	dhattām	dadhatu
	中動	1 人称	強 dadhai	強 dadhāvahai	強 dadhāma
		2 人称	dhatsva	dadhātham	dhatta
		3 人称	dhattān	dadhātām	dadhatu

特例

1. bhī-「恐れる」

第3類 bhī-「恐れる」強語幹: bibhe-, 弱語幹: bibhī-, bibhi-					
			単数	双数	複数
現在	能動	1 人称	強 bibhemi	bibhīvaḥ/bibhivaḥ	bibhīmaḥ/bibhimaḥ
		2 人称	強 bibheṣi	bibhīthaḥ/bibhithaḥ	bibhītha/bibhitha
		3 人称	強 bibheti	bibhītaḥ	bibhyati

*第1類 bhī-「恐れる」					
			単数	双数	複数
現在	能動	1 人称	bibhyāmi	bibhyāvaḥ	bibhyāmaḥ
		2 人称	bibhyasi	bibhyathaḥ	bibhyatha
		3 人称	bibhyati	bibhyataḥ	bibhyanti

**第1類 bhī-「恐れる」					
			単数	双数	複数
現在	中動	1 人称	bhaye	bhayāvahe	bhayāmahe
		2 人称	bhayase	bhayethe	bhayadhve
		3 人称	bhayate	bhayete	bhayante

2. bhṛ-「運ぶ」

第3類 bhṛ-「運ぶ」強語幹: bibhar-, 弱語幹: bibhṛ-					
			単数	双数	複数
現在	能動	1 人称	強 bibharmi	bibhṛvaḥ	bibhṛmaḥ
		2 人称	強 bibharṣi	bibhṛthaḥ	bibhṛtha
		3 人称	強 bibharti	bibhṛtaḥ	bibhṛanti

*第1類 bhṛ-「運ぶ」					
			単数	双数	複数
現在	能動	1 人称	bharāmi	bharāvaḥ	bharāmaḥ
		2 人称	bharasi	bharathaḥ	bharatha
		3 人称	bharati	bharataḥ	bharanti

3. hā-「捨てる」(cf. hā-「出て行く」3.cl. jihī-, jīhi-)

第3類 hā-「捨てる」強語幹: jahā-, 弱語幹: jahī-, jahi- (jah- 母音・yの前)					
			単数	双数	複数
現在	能動	1人称	強 jahāmi	jahīvaḥ, jahivaḥ	jahīmaḥ, jahimaḥ
		2人称	強 jahāsi	jahīthaḥ, jahithaḥ	jahītha, jahitha
		3人称	強 jahāti	jahītaḥ, jahītaḥ	jahati

4. ṛ-「行く」

第3類 ṛ-「行く」強語幹: iyar-, 弱語幹: iyṛ-					
			単数	双数	複数
現在	能動	1人称	強 iyarmi	iyṛvaḥ	iyṛmaḥ
		2人称	強 iyarṣi	iyṛthaḥ	iyṛtha
		3人称	強 iyarti	iyṛtaḥ	iyrati

*第6類 ṛ-「行く」

*第6類 ṛ-「行く」					
			単数	双数	複数
現在	能動	1人称	ṛchāmi	ṛchāvaḥ	ṛchāmaḥ
		2人称	ṛchasi	ṛchathaḥ	ṛchatha
		3人称	ṛchati	ṛchataḥ	ṛchanti

5. pī-「満たす」(> 9.cl.)

第3類 pī-「満たす」強語幹: pipar-, 弱語幹: pipūr-, pipur (母音の前)					
			単数	双数	複数
現在	能動	1人称	強 piparimi	pipūrvaḥ	pipūrmaḥ
		2人称	強 piparṣi	pipūrthaḥ	pipūrtha
		3人称	強 piparti	pipūrtaḥ	pipurati

6. mā- 「測る」

第3類 mā- 「測る」強語幹弱語幹の区別なし: mimī-, mim- (母音の前)					
			単数	双数	複数
現在	中動	1人称	mine	mimīvahe	mimīmahe
		2人称	mimīṣe	mimāthe	mimīdhve
		3人称	mimīte	mimāte	mimate

■3.2.5.5 第5類動詞

3.2.5.5.1 第5類動詞活用表

第5類 su-「搾る」 強語幹: suno-, 弱語幹: sunu-						
			単数	双数	複数	
現在	能動	1人称	強 sunomi	sunuvaḥ/sunvaḥ	sunumaḥ/sunmaḥ	
		2人称	強 sunodsi	sunuthaḥ	sunutha	
		3人称	強 sunoti	sunutaḥ	sunvanti	
	中動	1人称		sunve	sunuvahe/sunvahe	sunumahe/sunmahe
		2人称		sunuṣe	sunvāthe	sunudhve
		3人称		sunute	sunvāte	sunvate

第5類 su-「搾る」 強語幹: suno-, 弱語幹: sunu-						
			単数	双数	複数	
過去	能動	1人称	強 asunavam	asunuva/asunva	asunuma/asunma	
		2人称	強 asunoḥ	asunutam	asunuta	
		3人称	強 asunot	asunutām	asunvan	
	中動	1人称		asunvi	asunuvahi/asunvahi	asunumahi/asunmahi
		2人称		asunuthāḥ	asunvāthām	asundhvam
		3人称		asunuta	asunvātām	asunvata

第5類 su-「搾る」 強語幹: suno-, 弱語幹: sunu-					
			単数	双数	複数
願望法	能動	1人称	sunuyām	sunuyāva	sunuyāma
		2人称	sunuyāḥ	sunuyātam	sunuyāta
		3人称	sunuyāt	sunuyātām	sunuyuḥ
	中動	1人称	sunvīya	sunvīvahi	sunvīmahi
		2人称	sunvīthāḥ	sunvīyāthām	sunvidhvam
		3人称	sunvīta	sunvīyātām	sunvīran

第5類 su-「搾る」強語幹: suno-, 弱語幹: sunu-								
			単数		双数		複数	
命令法	能動	1人称	強	sunavāni	強	sunavāva	強	sunavāma
		2人称		sunu		sunutam		sunuta
		3人称	強	sunotu		sunutām		sunvantu
	中動	1人称	強	sunavai	強	sunavāvahai	強	sunavāmahai
		2人称		sunuṣva		sunvāthām		sunudhvam
		3人称		sunutām		sunvātām		sunvatām

注意

1. 語根に no/nu を加える第5類と、o/u を加える第8類は、本来同一である。
2. 母音で終わる語根の動詞では命令2単の語尾-hi は落ちるが、子音で終わる語根では落ちない
 - ci-「集める」5.cl. > ip.act.2.sg.: cinu
 - āp-「獲得する」5.cl. > ip.act.2.sg.: ānuhi

3.2.5.5.2 第5類に属する重要動詞

1. āp-「獲得する」

第5類 āp-「獲得する」強語幹: āpno-, 弱語幹: āpnu-								
			単数		双数		複数	
現在	能動	1人称	強	āpnomi		āpnuvaḥ		āpnumaḥ
		2人称	強	āpnoṣi		āpnuthaḥ		āpnutha
		3人称	強	āpnoti		āpnutaḥ		āpnuvanti

2. śru-「聞く」

第5類 śru-「聞く」強語幹: śṛṇo-, 弱語幹: śṛṇu-								
			単数		双数		複数	
現在	能動	1人称	強	śṛṇomi		śṛṇuvaḥ, śṛṇvaḥ		śṛṇumaḥ, śṛṇmaḥ
		2人称	強	śṛṇoṣi		śṛṇuthaḥ		śṛṇutha
		3人称	強	śṛṇoti		śṛṇutaḥ		śṛṇvanti

3. śak- 「出来る」

第 5 類 śak- 「出来る」 強語幹: śakno-, 弱語幹: śaknu-					
			単数	双数	複数
現在	能動	1 人称	強 śaknōmi	śaknuvaḥ	śaknumaḥ
		2 人称	強 śaknoṣi	śaknuthaḥ	śaknutha
		3 人称	強 śaknoti	śaknutaḥ	śaknūvanti

■3.2.5.6 第7類動詞

3.2.5.6.1 第7類動詞活用表

第7類 rudh-「阻む」 強語幹:ruṇadh-, 弱語幹:rundh-						
			単数	双数	複数	
現在	能動	1人称	強 ruṇadhmi	rundhvaḥ	rundhmaḥ	
		2人称	強 ruṇatsi	runddhaḥ	runddha	
		3人称	強 ruṇaddhi	runddhaḥ	rundhanti	
	中動	1人称		rundhe	rundhvahe	rundhmahe
		2人称		runtse	rundhāthe	runddhve
		3人称		runddhe	rundhāte	rundhate

第7類 rudh-「阻む」 強語幹:ruṇadh-, 弱語幹:rundh-						
			単数	双数	複数	
過去	能動	1人称	強 aruṇadham	arundhva	arundhma	
		2人称	強 aruṇat/aruṇaḥ	arunddham	arunddha	
		3人称	強 aruṇat	arunddhām	arundhan	
	中動	1人称		arundhi	arundhvahi	arundhmahi
		2人称		arunddhāḥ	arundhāthām	arunddhvam
		3人称		arunddha	arundhātām	arundhata

第7類 rudh-「阻む」 強語幹:ruṇadh-, 弱語幹:rundh-					
			単数	双数	複数
願望法	能動	1人称	rundhyām	rundhyāva	rundhyāma
		2人称	rundhyāḥ	rundhyātam	rundhyāta
		3人称	rundhyāt	rundhyātām	rundhyuḥ
	中動	1人称	rundhīya	rundhīvahi	rundhīmahi
		2人称	rundhīthāḥ	rundhīyāthām	rundhīdhvam
		3人称	rundhīta	rundhīyātām	rundhīran

第7類 rudh-「阻む」 強語幹:ruṇadh-, 弱語幹:rundh-								
			単数		双数		複数	
命令法	能動	1人称	強	ruṇadhāni	強	ruṇadhāva	強	ruṇadhāma
		2人称		runddhi		runddham		runddha
		3人称	強	ruṇaddhu		runddhām		rundhantu
	中動	1人称	強	ruṇadhai	強	ruṇadhāvahai	強	rundhāmahai
		2人称		runtsva		rundhāthām		runddhvam
		3人称		runddhām		rundhātām		rundhatām

—注意—

1. 語根は必ず子音で終わる.
2. 強語幹は語根末の子音の前に na (ṇna) を挿入する.
3. 弱語幹は語根末の子音と同種の鼻音が語根末子音の前に挿入される.
4. 語根末子音が ś, ṣ, s, h の場合には, 弱語幹は語根末子音の前に ṃ が挿入される.

3.2.5.6.2 第7類に属する重要動詞

1. bhid-「裂く」

第7類 bhid-「裂く」 強語幹: bhinad-, 弱語幹: bhind-								
			単数		双数		複数	
現在	能動	1人称	強	bhinadmi		bhindvaḥ		bhindmaḥ
		2人称	強	bhinatsi		bhintthaḥ		bhinttha
		3人称	強	bhinatti		bhinttaḥ		bhindanti

2. kṣud-「つき砕く」

第7類 kṣud-「つき砕く」 強語幹: kṣuṇad-, 弱語幹: kṣund-								
			単数		双数		複数	
現在	能動	1人称	強	kṣuṇadmi		kṣundvaḥ		kṣundmaḥ
		2人称	強	kṣuṇatsi		kṣuntthaḥ		kṣunttha
		3人称	強	kṣuṇatti		kṣunttaḥ		kṣundanti

3. yuj- 「繋ぐ」

第7類 yuj- 「繋ぐ」強語幹: yunaj-, 弱語幹: yuñj-

			単数	双数	複数
現在	能動	1人称	強 yunajmi	yuñjvaḥ	yuñjmaḥ
		2人称	強 yunakṣi	yuñkthaḥ	yuñktha
		3人称	強 yunakti	yuñktaḥ	yuñjanti

4. hiṃs- 「傷つける」

第7類 hiṃs- 「傷つける」強語幹: hinas-, 弱語幹: hiṃs-

			単数	双数	複数
現在	能動	1人称	強 hinasmi	hiṃsvaḥ	hiṃsmaḥ
		2人称	強 hinassi	hiṃsthaḥ	hiṃstha
		3人称	強 hinasti	hiṃstaḥ	hiṃsanti

5. ric- 「退く」

第7類 ric- 「退く」強語幹: riṇac-, 弱語幹: riñc-

			単数	双数	複数
現在	能動	1人称	強 riṇacmi	riñcvaḥ	riñcmaḥ
		2人称	強 riṇakṣi	riñkthaḥ	riñktha
		3人称	強 riṇakti	riñktaḥ	ruñcanti

6. piṣ- 「粉碎する」

第7類 piṣ- 「粉碎する」強語幹: pinaṣ-, 弱語幹: piṃṣ-

			単数	双数	複数
現在	能動	1人称	強 pinaṣmi	piṃṣvaḥ	piṃṣmaḥ
		2人称	強 pinaṣṣi	piṃṣthaḥ	piṃṣtha
		3人称	強 pinaṣti	piṃṣtaḥ	piṃṣanti

7. tṛh- 「押し潰す」

第7類 tṛh- 「押し潰す」強語幹: tṛneh-, 弱語幹: tṛṃh-						
			単数	双数	複数	
現在	能動	1人称	強	tṛnehmi	tṛṃhvaḥ	tṛṃhmaḥ
		2人称	強	tṛnekṣi	tṛṇḍhaḥ	tṛṇḍha
		3人称	強	tṛṇeḍhi	tṛṇḍhaḥ	tṛṃhanti

■3.2.5.7 第8類動詞

3.2.5.7.1 第8類動詞活用表

第8類 kṛ- 「為す・作る」 強語幹: karo-, 弱語幹: kuru- (kur- + m,v,y)						
			単数	双数	複数	
現在	能動	1人称	強 karomi	kurvaḥ	kurmaḥ	
		2人称	強 karoṣi	kuruthaḥ	kurutha	
		3人称	強 karoti	kurutaḥ	kurvanti	
	中動	1人称		kurve	kurvahe	kurmahe
		2人称		kuruse	kurvāthe	kurudhve
		3人称		kurute	kurvāte	kurvate

第8類 kṛ- 「為す・作る」 強語幹: karo-, 弱語幹: kuru- (kur- + m,v,y)						
			単数	双数	複数	
過去	能動	1人称	強 akaravam	akurva	akurma	
		2人称	強 akaroḥ	akurutam	akuruta	
		3人称	強 akarot	akurutām	akurvan	
	中動	1人称		akurvi	akurvahi	akurmahi
		2人称		akuruthāḥ	akurvāthām	akurudhvam
		3人称		akuruta	akurvātām	akurvata

第8類 kṛ- 「為す・作る」 強語幹: karo-, 弱語幹: kuru- (kur- + m,v,y)					
			単数	双数	複数
願望法	能動	1人称	kuryām	kuryāva	kuryāma
		2人称	kuryāḥ	kuryātam	kuryāta
		3人称	kuryāt	kuryātām	kuryuḥ
	中動	1人称	kurvīya	kurvīvahi	kurvīmahi
		2人称	kurvīthāḥ	kurvīyāthām	kurvīdhvam
		3人称	kurvīta	kurvīyātām	kurvīran

第8類 kṛ-「為す・作る」強語幹: karo-, 弱語幹: kuru- (kur- + m,v,y)								
		単数		双数		複数		
命令法	能動	1人称	強	karavāṇi	強	karavāva	強	karavāma
		2人称		kuru		kurutam		kuruta
		3人称	強	karotu		kurutām		kurvantu
	中動	1人称	強	karavai	強	karavāvahai	強	karavāmahai
		2人称		kuruṣva		karavāthām		kurudhvam
		3人称		kuruām		karavātām		kurvatām

第8類は語根に o/u を加えるが, no/nu を加える第5類と同一である. 他に tan-「伸ばす」 tano-/tanu-

■3.2.5.8 第9類動詞

3.2.5.8.1 第9類動詞活用表

第9類 krī-「買う」 強語幹: krīṇā-, 弱語幹: krīṇī- (krīṇ- + 母音)					
			単数	双数	複数
現在	能動	1 人称	強 krīṇāmi	krīṇīvaḥ	krīṇīmaḥ
		2 人称	強 krīṇāsi	krīṇīthaḥ	krīṇītha
		3 人称	強 krīṇāti	krīṇītaḥ	krīṇanti
	中動	1 人称	krīṇe	krīṇīvahe	krīṇīmahe
		2 人称	krīṇīṣe	krīṇīthe	krīṇīdhve
		3 人称	krīṇīte	krīṇīte	krīṇāte

第9類 krī-「買う」 強語幹: krīṇā-, 弱語幹: krīṇī- (krīṇ- + 母音)					
			単数	双数	複数
過去	能動	1 人称	強 akrīṇām	akrīṇīva	akrīṇīma
		2 人称	強 akrīṇāḥ	akrīṇītam	akrīṇīta
		3 人称	強 akrīṇāt	akrīṇītām	akrīṇan
	中動	1 人称	akrīṇi	akrīṇīvahi	akrīṇīmahi
		2 人称	akrīṇīthāḥ	akrīṇīthām	akrīṇīdhvam
		3 人称	akrīṇīta	akrīṇītām	akrīṇāta

第9類 krī-「買う」 強語幹: krīṇā-, 弱語幹: krīṇī- (krīṇ- + 母音)					
			単数	双数	複数
願望法	能動	1 人称	krīṇīyām	krīṇīyāva	krīṇīyāma
		2 人称	krīṇīyāḥ	krīṇīyātam	krīṇīyāta
		3 人称	krīṇīyāt	krīṇīyātām	krīṇīyuh
	中動	1 人称	krīṇīya	krīṇīvahi	krīṇīmahi
		2 人称	krīṇīthāḥ	krīṇīthām	krīṇīdhvam
		3 人称	krīṇīta	krīṇīyātām	krīṇīran

第9類 krī-「買う」 強語幹: krīṇā-, 弱語幹: krīṇī- (krīṇ- + 母音)							
		単数		双数		複数	
命令法	能動	1人称	強 krīṇāni	強 krīṇāva	強 krīṇāma		
		2人称	krīṇīhi	krīṇītam	krīṇīta		
		3人称	強 krīṇātu	krīṇītām	krīṇantu		
	中動	1人称	強 krīṇai	強 krīṇāvahai	強 krīṇāmahai		
		2人称	krīṇīṣva	krīṇāthām	krīṇīdhvam		
		3人称	krīṇītām	krīṇātām	krīṇatām		

—注意—

- 語根に nā を加えて強語幹を, nī (母音の前では n) を加えて弱語幹を作る。
 - aś-「食べる」 強語幹:aśnā-, 弱語幹:aśnī- (aśn-)
 - krī-「買う」 強語幹:krīṇā-, 弱語幹:krīṇī- (krīṇ-)
- 命令・能・2単は
 - 子音で終わる語根では弱語幹に ana を加えて作る。 aś-「食べる」
ip.act.2.sg.:aśāna
 - 母音で終わる語根では規則通り hi を加えて作る。 krī-「買う」
ip.act.2.sg.:krīṇīhi
- ū で終わる語根は短母音 u で語根を作る:
 - dhū-「振る」 強語幹: dhunā-, 弱語幹: dhunī-
 - pū-「清める」 強語幹: punā-, 弱語幹: punī-
 - lū-「切る」 強語幹: lunā-, 弱語幹: lunī-
- ī で終わる語根は短母音 i で語根を作る:
 - stī-「覆う」 強語幹:stīṇā-, 弱語幹:stīṇī-
 - pī-「満たす」 (> 3,cl.) 強語幹: pīṇā-, 弱語幹: pīṇī-
- 語根末の前にある鼻音は失われる:
 - bandh-「縛る」 強語幹: badhnā-, 弱語幹: badhnī-
 - manth-「かき回す」 強語幹: mathnā-, 弱語幹: mathnī-

3.2.5.8.2 第9類に属する重要動詞

1. grah- 「捉える」

第9類 grah- 「捉える」 強語幹: gr̥hṇā-, 弱語幹: gr̥hṇī-						
		単数		双数	複数	
現在	能動	1人称	強	gr̥hṇāmi	gr̥hṇīvaḥ	gr̥hṇīmaḥ
		2人称	強	gr̥hṇāsi	gr̥hṇīthaḥ	gr̥hṇītha
		3人称	強	gr̥hṇāti	gr̥hṇītaḥ	gr̥hṇānti

2. jñā- 「知る」

第9類 jñā- 「知る」 強語幹: jānā-, 弱語幹: jānī-(母音の前で jān-)						
		単数		双数	複数	
現在	能動	1人称	強	jānāmi	jānīvaḥ	jānīmaḥ
		2人称	強	jānāsi	jānīthaḥ	jānītha
		3人称	強	jānāti	jānītaḥ	jānānti

3.3 未来組織

3.3.1 単純未来

1. 現在組織の強語幹に未来接尾辞 $-sya(aniṭ$ 語幹) / $-iṣya(ṣeṭ$ 語幹) を付けて未来語幹を作る.
2. 第1次語尾(第1種)を付ける.
3. 語幹末子音と未来接尾辞の s との間の *sandhi* に注意せよ. $labh-$ 「得る」 > $labsyate$, $tyaj-$ 「捨てる」 > $tyakṣyati$
4. 要注意: $dr̥ś-$ 「見る」 > $drakṣyati$, $gai-$ 「歌う」 > $gāsyati$, $grah-$ 「取る」 > $grahīsyati$
5. 第10類動詞の場合, aya は ay となって $iṣya$ を付けて未来語幹を作る. $cur-$ > $coraya-$ > $corayiṣya-$

		単純未来 $ṣeṭ$ 語幹		単純未来 $aniṭ$ 語幹	
		bodh-「目覚める」: $bodhiṣya-$		dā-「与える」: $dāsyā-$	
		能動	中動	能動	中動
単 数	1	$bodhiṣyāmi$	$bodhiṣye$	$dāsyāmi$	$dāsyē$
	2	$bodhiṣyasi$	$bodhiṣyase$	$dāsyasi$	$dāsyase$
	3	$bodhiṣyati$	$bodhiṣyate$	$dāsyati$	$dāsyate$
双 数	1	$bodhiṣyāvaḥ$	$bodhiṣyāvahe$	$dāsyāvaḥ$	$dāsyāvahe$
	2	$bodhiṣyathaḥ$	$bodhiṣyethe$	$dāsyathaḥ$	$dāsyethe$
	3	$bodhiṣyataḥ$	$bodhiṣyete$	$dāsyataḥ$	$dāsyete$
複 数	1	$bodhiṣyāmaḥ$	$bodhiṣyāmahe$	$dāsyāmaḥ$	$dāsyāmahe$
	2	$bodhiṣyatha$	$bodhiṣyadhve$	$dāsyatha$	$dāsyadhve$
	3	$bodhiṣyanti$	$bodhiṣyante$	$dāsyanti$	$dāsyante$

3.3.2 複合未来

動詞語幹から作った *tṛ*-語幹名詞（行為者名詞）の単数主格に *as-*「～ある」の現在変化形を加える（3人称例外）。

		複合未来 <i>seṭ</i> 語幹		複合未来 <i>aniṭ</i> 語幹	
		budh-「目覚める」		dā-「与える」	
		能動	中動	能動	中動
単 数	1	bodhitāsmi	bodhitāhe	dātāsmi	dātāhe
	2	bodhitāsi	bodhitāse	dātāsi	dātāse
	3	bodhitā	bodhitā	dātā	dātā
双 数	1	bodhitāsvaḥ	bodhitāsvahe	dātāsvaḥ	dātāsvahe
	2	bodhitāsthāḥ	bodhitāsthāhe	dātāsthāḥ	dātāsthāhe
	3	bodhitārau	bodhitārau	dātārau	dātārau
複 数	1	bodhitāsmāḥ	bodhitāsmāhe	dātāsmāḥ	dātāsmāhe
	2	bodhitāsthā	bodhitādhve	dātāsthā	dātādhve
	3	bodhitāraḥ	bodhitāraḥ	dātāraḥ	dātāraḥ

3.4 アオリスト組織

1. 近い過去を表すために用いられた。使用はまれ。
2. 弱語幹に下図のような変化を加え、加音を付けてアオリスト語幹を形成し、第2次語尾を付ける。
3. アオリスト語幹の形成方法と単数 1,2,3, 複数 3 人称語尾の違いにより、7 種類の形式がある。

		単数 1 人称	単数 2 人称	単数 3 人称	複数 3 人称
単純アオリスト	1. 語根アオリスト	-am	-ḥ	-t	-uḥ
	2. a-アオリスト	-am	-aḥ	-at	-an
	3. 重音アオリスト	-am	-aḥ	-at	-an
シグマ・アオリスト	4. s-アオリスト	-sam	-siḥ	-sīt	-suḥ
	5. iṣ-アオリスト	-iṣam	-iḥ	-īt	-iṣuḥ
	6. siṣ-アオリスト	-siṣam	-siḥ	-sīt	-siṣuḥ
	7. sa-アオリスト	-sam	-saḥ	-sat	-san

3.4.1 語根アオリスト

		dā-「与える」	so-「結ぶ」	bhū-「成る」	*能動態のみ
		能動	能動	能動	
単	1	adām	asām	abhūvam	
	2	adāḥ	asāḥ	abhūḥ	
数	3	adāt	asāt	abhūt	
双	1	adāva	asāva	abhūva	
	2	adātam	asātam	abhūtam	
数	3	adātām	asātām	abhūtām	
複	1	adāma	asāma	abhūma	
	2	adāta	asāta	abhūta	
数	3	aduḥ	asuḥ	abhūvan (不規則)	

3.4.2 a-アオリスト

		sic-「注ぐ」		*ほぼ能動態のみ ** 不規則なもの
		能動	中動	
単	1	asicam	asice	sṛ-「流れる」>asarat, jṛ-「老いる」>ajarat
	2	asicah	asicathāḥ	
数	3	asicat	asicata	bhramś-「落ちる」>abhraśat
双	1	asicāva	asicāvahi	dṛś-「見る」>adaśat, śās-「命令する」>aśāsat
	2	asicatam	asicethām	
数	3	asicatām	asicetām	
複	1	asicāma	asicāmahi	
	2	asicata	asicadhvam	
数	3	asican	asicanta	

3.4.3 重音アオリスト

		śri-「赴く」		*1. 重音・加音・テーマ母音でアオリスト語幹を作る
		能動	中動	
単	1	aśīśriyam	aśīśriye	*2. 極めて少数
	2	aśīśriyaḥ	aśīśriyathāḥ	
数	3	aśīśriyat	aśīśriyata	
双	1	aśīśriyāva	aśīśriyāvahi	*4. 他には: dru-「走る」>adudruvat,
	2	aśīśriyatam	aśīśriyethām	
数	3	aśīśriyatām	aśīśriyetām	sru-「流れる」>asusrot
複	1	aśīśriyāma	aśīśriyāmahi	kam-「愛する」>acikamata/acakamata
	2	aśīśriyata	aśīśriyadhvam	vac-「言う」>avocat(<a-va-uc-at)
数	3	aśīśriyan	aśīśriyanta	pat-「落ちる」>apaptat(<a-pa-ot-at)

3.4.4 s-アオリスト

1. 人称語尾の前に s を挿入する.
2. 単数 2 人称: -sīḥ, 単数 3 人称 -sīt, 複数 3 人称: -suḥ
3. 短母音・鼻音・r 以外の子音の後, t/th で始まる語尾の前で, s 脱落.
4. 複数・2 人称・中動 -dhvam の前でも s 脱落. a/ṛa/r 以外の子音の後で -ḍhvam となる.
5. 語根母音は能動態で vṛddhi 化, 中動態では語根末の i/ī/u/ū のみ guṇa 化し, 他は無変化.

		nī- 「導く」		tud- 「打つ」	
		能動	中動	能動	中動
単	1	anaīṣam	aneṣi	atautsam	atutsi
	2	anaīṣīḥ	aneṣṭhāḥ	atautsīḥ	atutthāḥ
数	3	anaīṣīt	aneṣṭa	atautsīt	atutta
	1	anaīṣva	aneṣvahi	atautsva	atutsvahi
双	2	anaīṣtam	aneṣāthām	atauttam	atutsāthām
	3	anaīṣtām	aneṣātām	atauttām	atutsātām
複	1	anaīṣma	aneṣmahi	atautsma	atutsmahi
	2	anaīṣṭa	aneḍhvam	atautta	atuddhvam
数	3	anaīṣuḥ	aneṣata	atautsuḥ	atutsata

*その他特例:

kṛ- 「なす」 能単 3: akārṣīt;

中単 3: akṛta

rudh- 「阻む」

能単 3: arautsīt;

中単 3: aruddha

3.4.5 iṣ-アオリスト

		lū-「切る」		
		能動	中動	
単	1	alāviṣam	alaviṣi	*1. s-アオリストにほとんど同じ
	2	alāviḥ	alaviṣṭhāḥ	*2. 能単 2, 能単 3, 中複 2 で s 消失.
数	3	alāvit	alaviṣṭa	*3. 幹母音は能動で vṛddhi, 中動で guṇa.
双	1	alāviṣva	alaviṣvahi	*4. i を延長する場合がある.
	2	alāviṣtam	alaviṣāthām	grah-「捉える」> agrahīt/agrahiṣṭha
数	3	alāviṣtām	alaviṣātām	*5. 単子音の前の a 以外の母音は guṇa 化.
複	1	alāviṣma	alaviṣmahi	budh-「目覚める」> abodhiṣam/abodhiṣi
	2	alāviṣṭa	alavidh(ḍh)vam	*5. 中間の a は任意に延長.
数	3	alāviṣuḥ	alaviṣata	path-「読む」> apāṭhiṣam/apāṭhiṣam
				*6. 8 類動詞は任意に鼻音を失う.
				tan-「伸ばす」> ataniṣṭhāḥ/atathāḥ

3.4.6 siṣ-アオリスト

		yā-「行く」	gai-「歌う」	nam-「曲げる」	
		能動	能動	能動	
単	1	ayāsiṣam	agāsiṣam	anamsiṣam	*1. 能動態のみ
	2	ayāsiḥ	agāsiḍh	anamsiḥ	*2. s-アオリストにほとんど同じ.
数	3	ayāsīt	agāsīt	anamsīt	*3. 幹母音は変化しない.
双	1	ayāsiṣva	agāsiṣva	anamsiṣva	*4. 少数の動詞のみ.
	2	ayāsiṣtam	agāsiṣtam	anamsiṣtam	jña-「知る」, pā-「守る」
数	3	ayāsiṣtām	agāsiṣtām	anamsiṣtām	(pā-「飲む」は 3.4.1)
複	1	ayāsiṣma	agāsiṣma	anamsiṣma	mī-「毀す」> amāsiṣam, amāsīt
	2	ayāsiṣṭa	agāsiṣṭa	anamsiṣṭa	lī-「付く」> alāsiṣam. alāsīt
数	3	ayāsiṣuḥ	agāsiṣuḥ	anamsiṣuḥ	yam-「抑える」, ram-「満足する」

3.4.7 sa-アオリスト

		diś- 「指示する」		
		能動	中動	
単	1	adikṣam	adikṣi	*1. 過去の活用とほとんど同じ. *2. ś, ṣ, h で終わり, その前に i, u, ṛ を持つ aniṭ語幹の動詞のみ.
	2	adikṣaḥ	adikṣathāḥ	
数	3	adikṣat	adikṣata	*3. h で終わる動詞の変化に注意: guh- 「隠す」 > aghukṣat
双	1	adikṣāva	adikṣāvahi	*4. 中単 2, 中単 3, 中双 1, 中複 2 で sa が省かれることがある:
	2	adikṣatam	adikṣāthām	
数	3	adikṣatām	adikṣātām	duh- 「乳を搾る」 > adhuḥṣathāḥ/adugdhāḥ
複	1	adikṣāma	adikṣāmahi	
	2	adikṣata	adikṣadhvam	
数	3	adikṣan	adikṣanta	

3.5 完了組織

3.5.1 重音完了（単純完了）

1. 語根に重音を加え、完了人称語尾を付ける。
2. 強語幹と弱語幹を持つ。

		単数	双数	複数
能動	1 人称	強 -a/-au	-va	-ma
	2 人称	強 -tha	-athur	-a
	3 人称	強 -a/-au	-atur	-ur
中動	1 人称	-e	-vahe	-mahe
	2 人称	-se	-āthe	-dhve
	3 人称	-e	-āte	-re

3. ā/2 重母音で終わる語根を持つ動詞は、能単 1,3 で語尾が -au となる。
dā-「与える」 dadau, dadātha; gai-「歌う」 jagau, jagātha
4. 結合母音 i は広く用いられる。全ての語根は子音で始まる語尾の前で i を挟む。
5. aniṣṭ 語根: dru-「走る」、śru-「聞く」、stu-「誉める」、sru-「流れる」、kṛ-「為す」、bhṛ-「運ぶ」、vṛ-「選ぶ」、sṛ-「流れる」。
6. 子音で始まり、子音で終わり、かつ「長い音節」である語根を持つ動詞は、語幹に強弱の別がない。
nind-「非難する」 > ninind-, jīv-「生きる」 > jijīv-。
7. (単子音 +) a + 単子音という語根を持つ動詞では、強語幹に vṛddhi と guṇa の区別がある。この場合 1,2 人称では任意にどちらも可能だが、3 人称は必ず vṛddhi。
tap-「熱する」 > 単 1: tatapa/tatāpa, 単 3: tatāpa
8. i, ī, u, ū, ṛ, ṛī に終わる語根を持つ動詞も、強語幹に vṛddhi と guṇa の区別がある。能単 1 で両方可、能単 2 で guṇa、能単 3 で vṛddhi を取る。

■3.5.1.1 単子音 + i,u,r + 単子音

		bhid-「毀す」 強語幹:bibhed-, 弱語幹:bibhid-		
		単数	双数	複数
能	1	強 bibheda	bibhidiva	bibhidima
	2	強 bibheditha	bibhidathuḥ	bibhida
	3	強 bibheda	bibhidatuḥ	bibhiduḥ
中	1	bibhide	bibhidivahe	bibhidimahe
	2	bibhidiṣe	bibhidāthe	bibhidihve
	3	bibhide	bibhidāte	bibhidire

*最も基本的な活用タイプ

■3.5.1.2 単子音 + a + 単子音

1. 語根の子音と重音の子音が同じ場合は、幹母音の a を e に変えて弱語幹を作る。

tan-「伸ばす」 強語幹: tatan-/ tatān-, 弱語幹: ten-

2. 代用子音で重音を作る場合には、a はそのまま。

has-「笑う」 強語幹: jahas-/jahās-, 弱語幹: jahas-

3. 代用子音で重音を作る動詞に、弱語幹で母音を失うものがある。

gam-「行く」 強語幹: jagam-, 弱語幹: jagm-; ghas-「食べる」 jaghas-/jaghās-, 弱語幹: jakṣ-; han-「殺す」 強語幹: jaghan-/ jagān-, 弱語幹: jaghn-

		pac-「調理する」 強語幹: papac-/papāc-, 弱語幹: pec-		
		単数	双数	複数
能	1	強 papaca/papāca	peciva	pecima
	2	強 pecitha/papaktha	pecathuḥ	peca
	3	強 papāca	pecatuḥ	pecuḥ
中	1	pece	pecivahe	pecimahe
	2	peciṣe	pecāthe	pecidhve
	3	pece	pecāte	pecire

■3.5.1.3 Saṃprasāraṇa の起こるもの

1. va + 単子音: vac- 「言う」: 強語幹: uvāc-/uvāc-, 弱語幹: ūc-; svap- 「眠る」: 強語幹: suṣvāp/ suṣvap, 弱語幹: suṣup-
2. ya + 単子音: yaj- 「祀る」: 強語幹: iyāj-/iyāj-, 弱語幹: īj-; vyac- 「囲む」: 強語幹: vivyāc-/vivyac-, 弱語幹: vivic-
3. grah- 「捉える」 強語幹: jagrāh-/jagrah-, 弱語幹: jagṛh-

		vac- 「言う」 強語幹: uvac-/uvāc-, 弱語幹: ūc-		
		単数	双数	複数
能	1 強	uvaca/uvāca	ūviva	ūcima
	2 強	uvacitha/uvaktha	ūcathuḥ	pūca
	3 強	uvāca	ūcatuḥ	ūcuḥ
中	1	ūce	ūcivahe	ūcimahe
	2	ūciṣe	ūcāthe	ūcidhve
	3	ūce	ūcāte	ūcire

■3.5.1.4 ā/2 重母音で終わる語根

		dā- 「与える」 強語幹: dadā-, 弱語幹: dad-		
		単数	双数	複数
能	1 強	dadau	dadiva	dadima
	2 強	dadātha/daditha	dadathuḥ	dada
	3 強	dadau	dadatuḥ	daduḥ
中	1	dade	dadivahe	dadimahe
	2	dadiṣe	dadāthe	dadidhve
	3	dade	dadāte	dadire

3.5.2 複合完了

1. 第 10 類動詞・使役活用のための完了形
2. 語根に ām を付けたものを、機能動詞 kr-「為す」の完了能・能動, as-「～ある」の完了能動, bhū-「成る」の完了能動と共に用いる.
3. 単子音で終わる語根の幹母音, 語幹末の母音は guṇa 化する.

		cur-「盗む」 > corayām + cakāra / āsa / babhūva
		能動
単	1	corayām(ṁ) + caka(ā)ra/āsa/babhūva
	2	corayām(ṁ) + cakartha/āsitha/babhūvitha
数	3	corayām(ṁ) + cakāra/āsa/babhūva
双	1	corayām(ṁ) + cakṛva/āsiva/babhūviva
	2	corayām(ṁ) + cakrathuḥ/āsathuḥ/babhūvathuḥ
数	3	corayām(ṁ) + cokratuḥ/āsatuḥ/babhūvatuḥ
複	1	corayām(ṁ) + cakṛma/āsima/babhūvima
	2	corayām(ṁ) + cakra/āsa/babhūva
数	3	corayām(ṁ) + cakruḥ/āsuḥ/babhūvuḥ
		中動
単	1	corayām(ṁ) + cakre/āsa/babhūva
	2	corayām(ṁ) + cakṛṣe/āsitha/babhūvitha
数	3	corayām(ṁ) + cakre/āsa/babhūva
双	1	corayām(ṁ) + cakṛvahe/āsiva/babhūviva
	2	corayām(ṁ) + cakrāthe/āsathuḥ/babhūvathuḥ
数	3	corayām(ṁ) + cakrāte/āsatuḥ/babhūvatuḥ
複	1	corayām(ṁ) + cakṛmahe/āsima/babhūvima
	2	corayām(ṁ) + cakṛdhve/āsa/babhūva
数	3	corayām(ṁ) + cakrire/āsuḥ/babhūvuḥ

3.6 第2次活用

3.6.1 受動活用

1. 能動と中動の対立とは別に，第2活用として受動活用がある．原理的には第1次活用と同じ組織で活用しうる．
2. 弱語根に *ya* を付けて受動語幹を形成する．中動態の語尾を付ける．現在組織では第4種動詞と区別がない．
3. 語根末子音の前の鼻音は一般に脱落する．*damś-*「咬む」：*daśyate*; *bandh-*「縛る」：*badhyate*.
4. 語根末の *i/u* は延長される．*ci-*「集める」：*cīyate*; *stu-*「誉める」：*stūyate*.
5. 語幹末の *ṛ* は：単子音が前にあると *ri* になり，複子音が前にあると *ar* になる．*kṛ-*「為す」：*kriyate*; *smṛ-*「記憶する」：*smaryate*.
6. 語根末の *ṛ* は：普通は *īr* となり，唇音の後では *ūr* になる．*kṛ-*「撒く」*kīryate*; *pṛ-*「満たす」;*pūryate*.
7. 語根末の *ā* と複母音 (*e, ai, o*) は *ī* となる．しかし複子音が前にあると *ā* が保たれる．*dā-*「与える」：*dīyate*; *gai-*「歌う」：*gīyate*; *jñā-*「知る」：*jñāyate*.
8. 第10類動詞・使役動詞は *ay* を失う．*cur-*「盗む」(現在 *coraya-*)：*coryate*; *kṛ-*「為す」*>kārayati*「為さしむる」(使役活用)*>kāryate*「為さしめられる」;*dā-*「与える」*>dāpayati*「与えさせる」*>dāpyate*「与えさせられる」
9. 現在組織以外(一般時制)においては，中動態が受動態の意味を兼ねる．

10. 現在組織の活用例:

		tud-「打つ」 > 受動語幹: tudyā-		
		単数	双数	複数
現在	1	tudye	tudyāvahe	tudyāmahe
	2	tudyase	tudyethe	tudyadhve
	3	tudyate	tudyete	tudyante
過去	1	atudye	atudyāvahi	atudyāmahi
	2	atudyathāḥ	atudyethām	atudyadhvam
	3	atudyata	atudyetām	atudyanta
願望法	1	tudyeya	tudjevahi	tudyemahi
	2	tudyethāḥ	tudyeyāthām	tudyedhvam
	3	tudjeta	tudyeyātām	tudyeran
命令法	1	tudyai	tudyāvahai	tudyāmahai
	2	tudyasva	tudyethām	tudyadhvam
	3	tudyatām	tudyetām	tudyantām

3.6.2 使役活用

- 第10類動詞の語幹形成と活用方法に同じ。
- 第10類動詞の使役動詞は *aya* を反復する。
- 完了は複合完了を用いる。
- さらに受動活用にすることが出来る。使役接尾辞 *aya* を落とし、使役語幹を作るために *guṇa* 化した語幹に、受動接尾辞 *ya* を付けて、普通に受動活用させる。

語根	意味	クラス	現在	使役	使役+受動
tud-	打つ	6類	tudati	todaya-	(打たせる) todyate
cur-	盗む	10類	corayati	corayaya-	(盗ませる) coryate

3.6.3 意欲活用 (desiderative)

1. 意志・意欲・意向を表す。
2. 語幹に重音と接尾辞 -sa (-ṣa) を付ける。
3. 全ての第1次活用を行うことが出来る。完了は複合完了を用いる。
4. 第2次活用を行うことが出来る。
5. 使用はまれ。

tud- 「打つ」意欲語幹:tututsa-

現在形	能動 tututsati	中動 tututsate
過去形	能動 atututsat	中動 atututsata
願望法	能動 tututset	中動 tututseta
命令法	能動 tututsatu	中動 tututsatām

3.6.4 強意活用 (intensive, frequentative)

1. 動作の強度・反復を表す。
2. 語幹に重音を付け、能動では接尾辞を付けず、中動では接尾辞 -ya を付け、強意語幹を作る。
3. 全ての第1次活用を行うことが出来る。完了は複合完了を用いる。
4. 第2次活用を行うことが出来る。
5. 中動で使うことが多い。
6. 使用はまれ。

bhū- 「成る」能動強語幹 bobho-, 能動弱語幹 bobhū 中動 bobhūya-

現在形	能動 bobhoti	中動 bobhūyate
過去形	能動 abobhot/abobhavīt	中動 abobhūyata
願望法	能動 bobhūyāt	中動 bobhūyeta
命令法	能動 bobhotu/bobhavītu	中動 bobhūyatām

3.7 準動詞

名称		接尾辞	例: कृ- 「為す」	変 化
3.7.1 現在分詞	能動	-at/-ant	kurat-/kurant-	at-語幹変化 >2.1.2.2.2
3.7.2	中動	-māna(āna)	kurvāna-	a/ā 語幹変化 >2.2.1
3.7.3 未来分詞	能動	-(sy)at/-(sy)ant	kariṣyat-/kariṣyant-	at-語幹変化 >2.1.2.2.2
3.7.4	中動	-(sya)māna	kariṣyamāna-	a/ā 語幹変化 >2.2.1
3.7.5 完了分詞	能動	-vas	caḥvas-	vas-語幹変化 >2.1.2.3.3
3.7.6	中動	-āna	caḥrāṇa-	a/ā 語幹変化 >2.2.1
3.7.7 過去分詞	受動	-ta(-na)	kṛta-	a/ā 語幹変化 >2.2.1
3.7.8	能動	-tavat	kṛtavat-	vat-語幹変化 >2.1.2.2.2 の 2
3.7.9 動形容詞		-tava	kartavya-	a/ā 語幹変化 >2.2.1
		-anīya	karanīya-	a/ā 語幹変化 > 2.2.1
		-ya(-tya)	kārya-	a/ā 語幹変化 >2.2.1
3.7.10 不定詞		-tum	kartum	無変化
3.7.11 絶対詞		-tvā	kṛtvā	無変化
		-ya(-tya)	*pra-kṛtya	

3.7.1 現在能動分詞 (at-語幹変化 >2.1.2.2.2)

現在語幹 (弱語幹) に-at(-ant) を付けて作る. bhṛ-「運ぶ」>bharat-(bharant-)

3.7.2 現在中動分詞 (a/ā 語幹変化 >2.2.1)

第1種動詞: 現在語幹に māna (女 mānā) を付けて作る. bhṛ-「運ぶ」>bharamāṇa-

第2種動詞: 現在語幹 (弱語幹) にāna (女 ānā) を付けて作る. dviṣ-「憎む」>dviṣāna-

3.7.3 未来能動分詞 (at-語幹変化 >2.1.2.2.2)

未来語幹に-at/-ant を付けて作る.

dā-「与える」>dāsyat-/dāsyant-

budh-「目覚める」>bodhiṣyat/bodhiṣyant-

3.7.4 未来中動分詞 (a/ā 語幹変化 >2.2.1)

第1種動詞も第2種動詞も, 未来語幹に māna (女 mānā) を付けて作る.

dā-「与える」>dāsyamāna-

budh-「目覚める」>bodhiṣyamāna-

※ 第2種動詞の中動分詞が, 現在と未来で扱いが異なるので注意せよ:

例: hū-

1. 現在中動分詞: juhāna-

2. 未来中動分詞: hoṣyamāna-

3.7.5 完了能動分詞 (vas-語幹変化 >2.1.2.3.3)

完了の弱語幹に接尾辞-vas (女 -uṣī) を付けて作る. nī-「導く」>ninīvas-

3.7.6 完了中動分詞 (a/ā 語幹変化 >2.2.1)

完了の弱語幹に接尾辞āna (女 ānā) を付けて作る. nī-「導く」>ninyāna-

3.7.7 過去受動分詞 (a/ā 語幹変化 >2.2.1)

1. 弱語幹に -ta/-ita または -na を付けて作る. bhṛ-「運ぶ」>bhṛta-; vac-「言う」>ukta-; pat-「落ちる」>patita-; dah-「焼く」>dagdha-, guh-「隠す」>gūḍha-
2. 他動詞から作られると受動の意味, 自動詞から作られると能動の意味になる.
3. 語幹末の ā/ai に代わって ī/i が現れる場合がある: pā-「飲む」>pīta-; sthā->sthita-
4. 第10類動詞・使役動詞では aya を取り去って -ita を付ける: tuṣ-「満足させる」>toṣayati > toṣita-
5. na は ī や d で終わる語根で使われる. ta と共起することもある. tī-「渡る」>tīna-; pat-「落下する」>panna-; und-「濡らす」>unna-/utta-
6. 名詞に -ita を付け、「～を持つ」の意味になることがある.

3.7.8 過去能動分詞 (vat-語幹変化 >2.1.2.2.2 の 2.)

3.7.7. の過去受動分詞に接尾辞 vat- (女 vatī) を付けて作る.

kṛ-「為す」>kṛta-「為された」>kṛtavat-「為した」

3.7.9 動形容詞 (gerundive) (a/ā 語幹変化 >2.2.1)

1. tavya を語幹に付ける. 第10類動詞は ay を失う: kṛ-「為す」>kartavya-「為すべき」; bhū「成る」>bhavitavya-「成るべき」
2. anīya を語幹に付ける: kṛ-「為す」>karaṇīya-「為すべき」; cint 10「考える」>cintanīya-「考えるべき」
3. ya を語幹に付ける: kṛ-「為す」>kārya-「為すべき」; bhū-「成る」>bhavya-/bhāvya-「成るべき」
4. tya を語幹に付ける (i, u, ṛ で終わる少数のもの): kṛ-「為す」>kṛtya-「為すべき」

3.7.10 不定詞 (無変化)

1. 語根を *gun* 化して, *tum/-itum* を付ける. *kr-*「為す」>*kartum*; *bhū-*「成る」>*bhavitum*「成ること」
2. 第 10 類動詞・使役動詞は, *aya* を *ay* とし, *itum* を付ける. *budh-*「目覚める」>*bodhayitum*「目覚めさせること」

3.7.11 絶対詞 (*gerund, absolutive*) (無変化)

1. 語幹に *-am* を付ける. 使用はまれ. *kr-*「為す」>*kāram*
2. 弱語幹に *tvā/-itvā* を付ける. 動詞前綴のない単純動詞に用いる. *kr-*「為す」>*kṛtvā*; *grah-*「取る」>*gṛhītvā*
3. 第 10 類動詞・使役動詞は, *aya* を *ay* とし, *itvā* を付ける. *budh-*>*bodhayitvā*
4. 弱語幹に *ya* を付ける. 動詞前綴と複合した動詞に用いる. *vi-muc-*「解放する」>*vimucya*
5. 短母音で終わる複合動詞には *tya* を付ける. *abhi-dru-*「馳せ寄る」>*abhidrutya*
6. 第 10 類動詞・使役動詞の複合動詞では, *aya* は脱落する. 語幹が「短い音節」である場合のみ *ay* が保持される. *vi-bhāvayati*「開示する」>*vibhāvya*; *sam-gamayati*「集まる」>*samgamaya*

3.8 前置詞・動詞の派生接頭辞

3.8.1 前置詞・動詞前綴り

1. ati- 「向こうに, 越えて, 過ぎて」 carati 「行く」 > aticarati 「行き過ぎる, 踏み越える」
2. adhi- 「越えて, 上に」 adhikaroti 「上に置く > 統括させる」
3. anu- 「沿って, 後から」 eti (< i-) 「行く」 > anveti 「後から行く > 従う」
4. antar- 「中間に」 dadhāti 「置く」 > antardadhāti 「中に置く > 隠す」
5. apa- 「離れて, 遠く」 nayati 「導く」 > apanayati 「連れ去る」
6. api- 「近く, において, 上に」 dadhāti 「置く」 > apidadhāti 「蔽う, 閉じる」
7. abhi- 「の方へ, に向かって」 dru- 「走る」 > abhidravati 「に向かって走る, 馳せ寄る」
8. ava- 「下に, から, 離れて」 tī- > avatarati 「降下する」
9. ā- 「こちらへ, その方へ」 gacchati 「行く」 > āgacchati 「来る」, dadhāti 「置く」 > ādatte 「取る」, nayati 「導く」 > ānayati 「連れて来る」
10. ud- 「上に, 上方に, 外へ」 eti (< i-) 「行く」 > udeti 「上昇する, 出現する, 起こる」
11. upa- 「の方へ」 eti (< i-) 「行く」 > upaiti 「達する」
12. ni- 「下に, 中へ」 pat- 「落ちる」 nipapati 「落下する」
13. nis- 「外に, 離れて」 kram- 「歩む」 > niṣkrāmati 「出て行く」
14. parā- 「離れて, 遠く, 離して」 vṛt- 「存在する」 > parāvartate 「引き返す」
15. pari- 「巡って, 周り」 kṣipati(6) 「投げる」 > parikṣipati 「取り囲む, 閉じ込める」
16. pra- 「前に, 前方へ」 vahati 「運ぶ」 > pravahati 「前進する」, (起動でも) hasati 「笑う」 > prahasati 「笑い出す」
17. prati- 「に対して, 戻って」 bhāṣate 「語る」 > pratibhāṣate 「答える」
18. vi- 「ばらばらに, 離れて」 yunakti 「繋ぐ」 > viyunakti 「分離する」
19. sam- 「一緒に」 gacchati 「行く」 > saṃgacchati 「集まる, 合同する」(強意でも)

3.8.2 機能動詞表現

1. 名詞は、機能動詞（助動詞） $kṛ-$ 「する」、 $bhū-$ 「なる」、 $as-$ 「ある」と複合動詞を作りうる。
2. 名詞語幹の末尾音は次のように変える:
 - (a) $a/an > ī$
 - (b) $i > ī$
 - (c) $u > ū$
3. 例: $bahulībhavati$ 「増加する」; $ekībhavati$ 「合一する」

4 統語論

4.1 概略

1. ラテン語やギリシャ語に比べると、サンスクリット語の統語構造は一般に単純で未発達である。
2. 主要な特徴は：
 - (a) 並列構文が優勢
 - (b) 長大な複合語や動形容詞句が関係節や従属節の代用をする事が多い
 - (c) 間接語法は存在しない
 - (d) 動詞定形の使用がまれ
 - (e) 過去分詞や動名詞等が動詞定形の代用をする事が多い
 - (f) 受動態・受動表現が多用される
 - (g) 絶対位格句の使用
 - (h) 冠詞は存在しない。eka-「1つの」が不定冠詞単数の、kaścīd-「ある～」が不定冠詞双複数の働きをし、また tad-が定冠詞の働きをすることがある。

4.2 語順

1. 一般的な語順は：主語名詞句>目的語名詞句>動詞句
2. 属格は通例修飾する名詞の前に置かれる
3. 副詞句は通例文頭近くに置かれる。
4. 小辞は文頭の語の次に置かれることが多い。 janakastu satvaraṃ svīyaṃ nagaraṃ jagāma. 「しかるにジャナカは大急ぎで自分の町へ行った。」
5. 呼格は通例文頭に置かれる。
6. 主語以外に強調される語は文頭に置かれる。 *rātrau* tvayā maṭhamadhye na praveṣṭavyam. 「夜にあなたは僧院に入ってはならない。(＜あなたによって僧院に入られてはならない)」
7. 主語代名詞は、動詞定形で表されていれば、強調されない限り明示されない。
8. 英語の one/they, ドイツ語の man 等にあたる一般的主語は明示されない。

brūyāti. 「(人は) 言うべきである」 āhur 「彼らは言う>～と言われて
いる」

9. コピュラ動詞 *asti* は、特に時制や法を表す必要がなければ、通例省略される。
10. コピュラ動詞 *asti* を省略した「名詞構文」では、通例述語名詞が先行する。
śītalā rātrī 「寒い夜」
11. コピュラ動詞が強調される場合は、*asti* ではなく、*bhavati* が用いられる。
yo vidyayā tapasā janmanā vā vṛddhaḥ sa pūjyo bhavati dvijānāt. 「知識、修行、あるいは生まれによって秀でた者は、転生した者（パラモン）によって尊敬される。」

4.3 数 (numerus)

1. 双数と複数との区別は厳密であり、2つあるものは必ず双数形で表し、複数形を用いることはない。
2. 男女一対の名詞の双数形は、男性双数形が用いられる: *pitarau* 「両親」
3. 2人称代名詞において、単数の相手に複数形を用いて敬意を表す:
tvam>yūyam; *bhavān>bhavantaḥ*. 固有名詞や、普通は双数で表す *pāda-* 「足」なども、敬語として複数形で用いられることがある。
4. 語り手・話者が1人称複数を用いることがある。
5. 国名はその民族名の複数形で表す。
6. 複数形でのみ用いられる名詞がある: *ap-* f. 「水」, *prāṇa-* m. 「命(息)」, *varśā-* f. 「雨期(雨)」, *dāra-* m. 「妻」

4.4 一致の特例

1. iti 「～として」の次におかれた名詞は、対格であるべきところで、主格を撮る場合がある。
2. 双数形や複数形の動詞が、2つ以上の人称の違う主語にかかる場合、2・3人称より1人称が、3人称より2人称の形にすることが好まれる。
3. 双数形や複数形の形容詞は、男性名詞と女性名詞の混合した集団を修飾する場合には男性形をとるが、中性形が混ざっていると中性形をとる。この場合中性単数形をとることがある。
4. 主語が2つ以上あっても、あるいは複数形であっても、緊密な関係にあったり、一体性が強く感じられた場合には、動詞が複数形ではなく単数形をとることがある。

4.5 代名詞

1. 人称代名詞は一般にあまり用いられない。
2. bhavān- は敬語として多用され、2人称代名詞として用いられるが、動詞は3人称の形を取る。
3. bhavān- はまた敬語として、atra-bhavān-の形でその場にいる人を(2人称としても3人称としても)指し、tatra-bhavān-の形でその場にはいない人物を3人称代名詞として指すことがある。
4. 指示代名詞の etad- と idam- は「近いもの、その場にいるもの」を指し、 tad- と adas- は「遠いもの、その場にはいないもの」を指す。
5. 所有代名詞-īya- はあまり用いられず、人称代名詞の属格形が用いられる。

4.6 主格の用法

1. 他の印欧語に比べ、主格形が用いられることが少ない。その代わりに意味上の主語を具格においた受動表現を多用する。
2. 主格形は専ら主格補語や述語名詞として用いられる。
3. *iti* と用いられた主格形は、対格として機能する場合がある。

4.7 対格の用法

1. 他動詞の直接目的語になるのが基本の機能である。
2. 移動を表す自動詞と共に用いられて、目的地を表す: *sa Vidarbhān agamat.* 「彼はヴィダルバに行った」
3. 更に移動動詞と共に抽象名詞の対格が用いられると、「～なる」という意味になる。
4. 時間や空間の広がりを表す副詞句となる: *māsanadhīte.* 「彼は一月の間学んだ」
5. SVOC 文型をとる動詞や、使役動詞などで、しばしば二重対格が用いられる。
6. 能動から受動への転換において、能動態の対格目的語のみが受動態の主格主語に転換できる。

4.8 具格の用法

1. 道具・手段、随伴、動作手を表すのが基本の機能である: *tenoktam.* 「彼によって言われた＝彼は言った」
2. そこから発展して以下の意味を表す:
 - (a) 理由・原因: *bhavato `nugraheṇa* 「あなたの好意のおかげで」
 - (b) 一致（判断基準）: *prakṛityā* 「自然に」、*jātyā* 「生まれつき」

- (c) 価格・対価
 - (d) 運動が起こる場所: *katamena māṛgeṇa pranaṣṭaḥ kākāḥ?* 「どの道を通って（どこへ）カラスどもは消え失せたのか」
 - (e) ~の間（時間）
 - (f) ~に関して（比較の基準）: *etābhyāṃ śauryeṇa hīnaḥ*. 「(彼は) その2人と比べて（双数・属格）、勇気の点で劣っている。」
 - (g) 必要性, 有用性: *ko me jīvitenaṛthaḥ*. 「私にとって（属格）人生に何の価値があるか」
 - (h) 感情の原因（喜び, 満足, 恥辱, 驚き等）
 - (i) 特定の動詞の目的語として
3. 随伴の意味では, 前置詞 *saha/sākam/sārdham/samam*(=with) を伴うことが多く,
- (a) 付帯状況を表し: *mahattā sukhena* 「大きな喜びと共に」
 - (b) 受動表現による同伴・付加・所有を表し
 - (c) 同一・同等・類似を表す形容詞と共に用いられる: *anena sadṛśaḥ* 「(彼は) この男に似ている」

4.9 与格の用法

1. 与格の基本の意味用法は, 動詞の間接目的語になるか, 行為の目的を表すかである。
2. 動詞の間接目的語になるのは以下の場合である。
 - (a) 授与動詞; 与える (*dā-*, *arpayati*), 語る (*bru-*, *cakṣ-*, *śams-*, *kathayati*, *khyāpayati*, *nivid-*), 約束する (*pratiśru-*, *āśru-*, *pratijñā-*), 見せる (*darśaya-*) 等
 - (b) 送る (*visṛj-*), 投げる (*kṣip-*) 等
 - (c) 喜ばせる (*ruc-*, *svad-*), 欲する (*spr-*, 怒る (*krudh-*), 傷つける (*druh*) 等
 - (d) 祝福の言葉と共に: *kuśalam te!* 「あなたが健康でありますように!」, *svāgataṃ devyai!* 「女王陛下, よくいらいっしやいました!」

3. 行為の目的を表すのは以下の場合である。
 - (a) 目的: phalebhyo yāti. 「(彼は) 果物を採りに行く」(yāti=eti)
 - (b) 適している, 傾向がある (kṛp-, sampad-) 等
 - (c) ~出来る (śak-), 始める (pravṛt-), 努める (yat-), 決する (vyavasō-), 命令する (ādiś-) 等
 - (d) 副詞 alam と共に「~に匹敵する, 相応しい」

4.10 奪格の用法

1. 出発点や起源を表すのが奪格の基本である: aham asmād vanād gantumicchāmi. 「私はこの森から出発したいと思う」
2. 距離の基点や, 時間的経過の基点を表す。
3. 恐れる・嫌う (bhī-, udvij-) 等の目的語
4. 原因・理由を表す(具格と競合する): jāḍyād/jāḍyena baddhaḥ. 「(彼は) 愚鈍の故に投獄された」
5. 比較対象を表す: Govindād rāmo vidvattaraḥ. 「ラーマはゴーヴィンダより博識である」, Kṛṣṇādanyo Govindaḥ. 「ゴーヴィンダはクリシュナと違って
いる」

4.11 属格の用法

1. 他の名詞に付着し, 修飾するのが属格の基本の用法である。
2. 名詞に直接付着する属格は, 他の古典語同様, 所有属格・主語属格・目的語属格・部分属格の用法がある。
3. 属格目的語をとる多くの動詞がある(対格・与格・具格と競合する場合も多い)
 - (a) 所有 (iś-), 支配 (prabhū-)
 - (b) 記憶 (smṛ-), 同情 (day-), 模倣 (anukṛ-)
 - (c) 援助 (upakṛ-), 傷つける (apakṛ-), 信用 (viśvas-), 許容 (kṣam)

- (d) 「言う」の目的語として、「言及する、話題にする」という意味になる
- (e) 与格の代わりに間接目的語となる
- (f) 具格の代わりに「満足・充足」の目的語になる
- 4. 属格名詞句をとる多くの形容詞がある
 - (a) 依存: āyatta-, sakta-
 - (b) 熟達: abhijña-, kuśala-, kovid-, ucita-
 - (c) 同等・類似: tulya-, sadṛśa-
- 5. 受動分詞の動作手を表す
- 6. -tas という語尾の形で、方向を表す副詞となる
- 7. 時の副詞
 - (a) ~以来: katipayāhasya 「何日か経った後で」
 - (b) 回数: triḥ saṃvatsarasya 「年に3回」

4.12 位格の用法

1. 位格の基本用法は
 - (a) 行為が行われている場を表す: pakṣiṅtastasmin vṛkṣe nivasanti. 「鳥たちはこの木に住んでいる」
 - (b) 運動が向かう方向を表す: bhūmau papāta. 「(彼は) 大地に倒れた」
 - (c) これらはラテン語の前置詞の奪格支配と対格支配の違い、また現代ドイツ語の前置詞の3格支配と4格支配の違いに相当する。
2. 場の位格には以下の用法がある
 - (a) ~の間に (amang) (部分の属格と競合): sarveṣu putreṣu Rāmo mama priyatamaḥ. 「すべての息子の中で、ラーマは私にとって一番可愛いのです」
 - (b) 同居: gurau vasati. 「(彼は) 教師のところに住んでいる」
 - (c) tiṣṭati/vartati と共に用い「堪える」「従う」: na me śāsane tiṣṭasi. 「お前は私の指示に従わない」
 - (d) (原因に対する) 結果: daivameva nṛṇāṃ vṛddhau kṣaye kāraṇam.

- 「人々の繁栄や衰退にとって運命こそがその原因である」
- (e) 行為の手掛かり: keśeṣu grhītvā 「髪を掴んで」
- (f) 精通する (属格と競合): Rāmo 'kṣadyūte nipuṇaḥ. 「ラーマはサイコロゲームが得意だ」
- (g) 性質・形状: dr̥ṣṭadoṣā mṛgayā svāmini. 「君主にとって狩猟は悪徳と見なされる」
- (h) 環境: bhāgyeṣu 「幸運の時に」
- (i) 時の副詞句: niśāyām 「夜に」, dine dine 「毎日」
- (j) 距離 (属格と競合)
3. 方向の位格には以下の用法がある
- (a) 行為の対象 (与格と競合): prāṇiṣu dayāṃ kurvanti sādharmaḥ. 「正しい人々は命あるものに対して同情の心を持つ」
- (b) 間接目的語 (与格と競合): sahasrākṣe pratijñāya 「千の目を持つ (インドラ) に約束をして」
- (c) 命令・指示・要求の対象 (与格と競合): patitve varayāmāsa tam. 「(彼女は) 彼を結婚相手に選んだ」
- (d) 要求・献身・尊敬・敬愛; 軽蔑等の対象: na me tvayi viśvāsaḥ. 「君に対する私の信頼はない」

4.13 絶対位格と絶対属格

1. 位格と属格は絶対格として特別の副詞句を形成する。これはラテン語の絶対奪格, ギリシャ語の絶対属格とおなじものである: gacchatsu dineṣu 「日々が過ぎ去るうちに」
2. 擬似従属節として, 意味上の「主語」と「述語」を備えるが, 「述語」は分詞を用いる。as-の分詞 sat-だけは省略される。
3. 非人称受動表現も絶対格になる: tenābhyupagate 「彼によって同意されると」
4. eva や mātra と共に用いられると, 「～するやいなや」という意味になる: prabhātāyāmeva rajanyām 「夜が明けると直ぐに」

5. 絶対属格は絶対位格に比べてはるかに使用頻度が低い。
6. 絶対属格の場合、ほとんど「述語」は現在に、「主語」は人である。
7. 絶対属格の意味はほとんど「～の間」「～なので」「～にもかかわらず」に限られる。

4.14 分詞

1. 分詞を用いた同格名詞句は、ギリシャ語やラテン語と同様にサンスクリット語でも多用され、関係節・時間節・理由節・結果節・仮定節・目的節などの従属節の代用をする: *srgālah kopāviṣtam tam uvāca*. 「ジャッカルは、怒りに震える彼に向かって（彼が怒りに震えているので、彼が怒っているにもかかわらず等）、言った」
2. *bahuvrīhi* 型複合名詞（所有複合語）は、しばしば分詞と同等の働きをする。 *atha śaṅkitamanā vyajintayat*. 「それから、恐れた彼は考えた（恐れたので、恐れたにもかかわらず等）」
3. 現在分詞
 - (a) *asti/bhavati/āste/tiṣṭati/vartate* 等と共に用いて、「進行」の意味を表す: *bhakṣayannāste*. 「彼は食べ続ける」
 - (b) 「～を止める (*uparam-*)」という表現も、現在分詞を用いて表す: *siṃho mṛgām vyāpādayannopararāma*. 「森の動物を殺すライオンは、止めなかった＝森の動物を殺すことを、ライオンは止めなかった」
 - (c) 「恥じる」等の感情を表す動詞と共に用いられると、感情の原因を表す: *kiṃ na lajjasa evaṃ bruvāṇaḥ?* 「そんなことを言っ君は（＜言っ君は）恥ずかしくないのか？」
4. 過去分詞
 - (a) 過去分詞はしばしば述語の代用として用いられる。コピュラ動詞は省略される: *tenedam uktam*. 「このことは彼によって言われた」; *sa idamuktavān*. 「彼はこのことを言った」
 - (b) 自動詞の過去受動分詞は非人称的に用いられる: *mayātra ciram sthitam*. 「長い間私はここに立っていた（＜長い間私によってここに立たれ

ていた)』

- (c) 自動詞の過去受動分詞が能動の意味を持つこともある: sa Gaṅgam gataḥ. 「彼はガンジス河に行った」
- (d) 過去受動分詞が「受動」と「他動詞的能動」の両方の意味を持つ動詞がある: prāpta- 「獲得された・到達した」, praviṣṭa- 「侵入された・入った」, pīta- 「飲まれた・飲んだ」, vismṛta- 「忘れられた・忘れた」, vibhakta- 「分けられた・分けた」, prasūta- 「産んだ・産まれた」等
- (e) ただし na-過去受動分詞は「他動詞的能動」の意味で用いられることはない。
5. 動形容詞 (未来受動分詞 gerundive)
- (a) 可能・義務などの意味を表す: mayāvaśyaṃ deśāntaraṃ gantavyam. 「どうしても私は外国に行かねばならない<何としても私によって外国に行かれねばならない」
- (b) 場合によっては純粋に未来の意味を表す。
- (c) bhū-から作られた bhavitavyam/bhāvyaṃ は、非人称的に用いられて推量を表す: tayā saṃnihitayā bhavitavyam. 「彼女は近くにいるに違いない<近くにいる彼女によって成られたに違いない」
6. 絶対詞 (gerund/absolute): 不変化
- (a) 主文と意味上の主語は共通で、通例主文の述語より以前に行われた動作を表す: taṃ praṇamya sa gataḥ. 「彼は彼にお辞儀をすると、出発した」
- (b) 条件文になることもある: maṃ nirdhanaṃ hatvā kiṃ labhedhvaṃ. 「私のような卑しい者を殺して、あなたは何が得られるのでしょうか」
- (c) 分詞同格句と同等の働きをする場合がある: sarvapaurāṃ atīnya vartate. 「彼は指導的な市民である<全ての市民を指導して彼は存在している」
- (d) いくつかの絶対詞は前置詞として用いられる: uddīśya 「向かって、について、～へ<指し示す」, ādāya 「～とともに<取って」等多数。
- (e) 絶対詞がもともと具格の用法を起源とすることの名残が、非人称表現などの場合に現れる: kiṃ tava gopāyivā. 「隠すことによってあなたにとって何になるのか」

4.15 不定詞

1. 目的を表す用法では、与格のそれとほとんど変わらない: *taṃ jetuṃ yatate.* = *tasya jāyāya yatate.* 「彼を征服するために彼は努力する」
2. 対格の用法を起源とするため、主語になることはない。
3. ラテン語のような「対格不定詞句」は存在しない。間接語法は発達しておらず、接続詞 *iti* によって直接引用をするのが普通である。
4. 「時」「可能性」を表す名詞や形容詞を修飾する: *nāyaṃ kālo vilambitum.* 「これは延期すべき時ではない」
5. *arh-* 「値する」の直説法現在 2 人称・3 人称現在形は、不定詞と共に用いられて丁寧な命令文になる: *bhavān māṃ śotumarhati.* 「閣下、私の申すことを聞いて頂けますか」
6. *-tum* ではなく *-tu* の形で、*-kāṃ* や *-manas* と結びついて *bahuvrīhi* 型複合語を作る: *draṣṭukāmaḥ* 「見たがっている」
7. 不定詞の受動態の形は存在しない。不定詞を支配する述語動詞が、受動の不定詞の意味を必要とする場合は、その述語動自体が受動態になる: *mayā nītiṃ grahayitdm śakyante.* 「彼らは私によってモラルを教えられ得る」
8. *śak-* 「できる」の動形容詞 *śakya-* は、主語に一致させることも、中性単数で表すこともある: *na śakyāste doṣāḥ samādhātum.* 「これらの損害は修復できない」、*sā na śakyam upekṣitum kupitā.* 「怒っているときに、彼女は無視できない<怒っている彼女は、無視されることができない(ものである)>」

4.16 動詞の現在形

1. 歴史的な語りに用いられる。
2. *purā* と *sma* を添えて、過去の継続を表した。
3. 直前の過去を表すことがある。
4. 近い未来を表すことがある。
5. 疑問文で使う現在形は、未来に対する懐疑的な気持ちを表す。

6. また勧告・勧奨を表すことがある。

4.17 動詞の過去形（未完了過去・完了・アオリスト）

1. 過去を表す3つの時称（未完了過去・完了・アオリスト）も、過去分詞を用いた代用述語でも、過去の事実について、何回も反復されたものか、1回きりの出来事なのか、明確に用法が区別されていない。
2. 一般に、完了は遠い過去を表し、話者の直接経験ではないことを表す。
3. 一般に、未完了過去は、歴史的過去に用い、話者の経験を語るときに用いる。
4. 一般に、アオリストは「現在完了」の意味で、近い過去を表し、過去分詞による代用述語に置き換えられていった。
5. 加音を省略したアオリストが ma と共に用いられ、命令形の意味を表すことがある。
6. 過去完了は存在しない。文脈で判断する。

4.18 動詞の未来形

1. 単純未来はいわゆる「一般時称」で、広く色々な未来を表す。
2. 複合未来はこれに対して遠い未来のみに限定される。
3. 未来形は命令の意味を表すことがある。

4.19 命令形

純粹の命令の意味の他に、以下のような特別の用法がある：

1. 1人称で用いると、意思を表す。
2. 一般に3人称単数受動態で用いると、丁寧な命令になる。

3. 願望や祈願を表す.
4. 疑問文で用いると, 推量を表す.
5. ma と命令形を用いた禁止命令はまれである. 禁止命令は, 加音のないアオリストと ma, 願望法と na, alam/kṛtam と具格を用いて表す.

4.20 願望法

純粋な願望・祈願の意味の他に, 次のような意味を表す:

1. api をつけて, 要求
2. 推量 (可能性や懐疑)
3. 蓋然性を表し, 未来形と同じ意味になる.

2016年8月6日

千葉大学大学院人文科学研究科 教育・学修支援研究会 編・発行

千葉大学 人文社会科学教科書シリーズ No.2

著者 石井正人（千葉大学文学部 教授）
